



始



田宮新十郎

奉



638

持279

322



持279
322
[Seal]

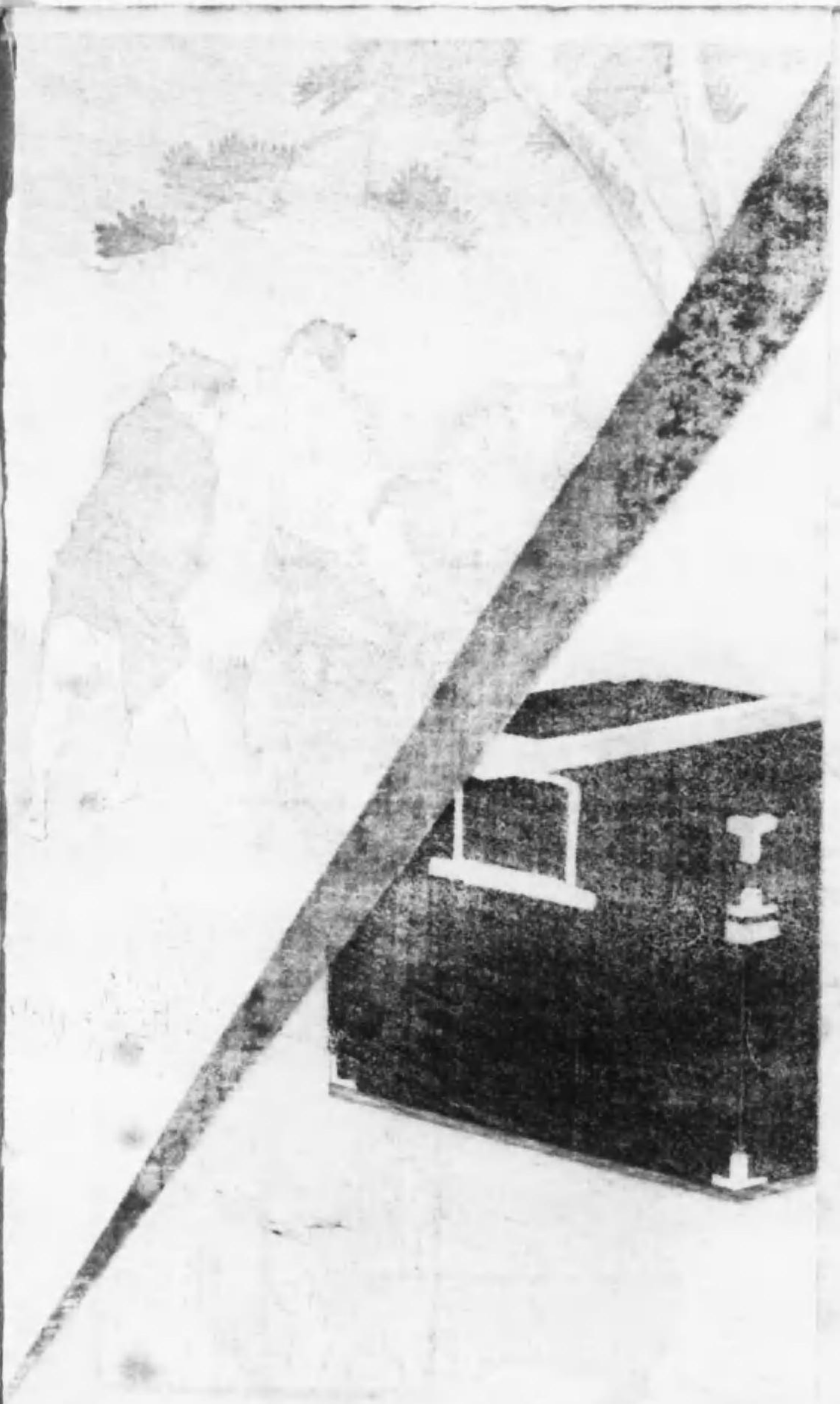
持279

322



持279
322
[Seal]





水府 勇 士 氏 宮 新 十 郎

四代目 石川 一口 講演
丸山 平次 郎 速記
利見 新吉 復文



新 宮 田 十 郎

第 一 回

世に名人と云ふものは誠に珍しいものでございませう、上手は擧げ
て算へ難い程と云ひ、學ばずして覺ゆるを名人と云ひ、學
んで覺ゆるを上手と云ふ、學んで覺ゆるは下手の零點と申し
ます、何に限らず一藝一能を後世に傳へてその美名を博すと云
ふことは、なかく、難しいことでございませう、然うでございませ
う、名人の弟子に名人の出ると云ふことは比類稀なることでござい
まして、學ばずして覺ゆる位ですから名人に違ひない、併し往昔
は人の氣も大きに緩容して居りましたからそんな考へも出たので
ございませう、當今でも世には名人もあるのをごさ
いませう、

智識が進歩いたしましたゆゑ名人も分らなくなつて、名人や晴人と
 云ふものは一向出ません、その代り唐人と異人は澤山増へて参りま
 した、併し徳川三代將軍家光より、引續いて四代家綱、五代綱吉
 この三代の將軍家の治世には随分世に聞かぬた所の藝道に優れた方も
 出ました、文武は言ふも更なり或は工又は彫刻師、將た町人も
 せにも數多、晴人が出て居ります、是れ徳川の胸を固むる時代で
 さいませう、斯の如く藝道に秀でたる者が星の如く現はれたので
 さいませう、本日はより申上げます、講談は、五代將軍の御時代で
 夫殿の御分家、周防國岩國錦帯町に御陣屋をお設けに相成りし、吉
 川監物經倫殿の家臣に、國次惣左衛門と云へる人がございまして、
 この人十四の歳から三十一歳までの間、晝夜分たず工夫を凝し、
 に考へを附けましたのは惣身惣刀流と云ふ劍道の流義でございす
 る、此流は總て柄は一握り二指と申しまして、右の手にて握り、
 左の手の指を二本當がふと柄一杯になるだけの長にしてございす

る、それゆゑ片手で自由に使へるやうに編み出したもので、
 通の鑄より大きなのを用ゐまして、肝腎の刀身とするところは曲尺
 一尺三寸しかございせん、して見ると左の手で随分何を持つて居
 ても右の手にて自由に使へます、又長物を以て來る時は亂槍巻取
 ど云ふことを掛けます、又弓矢の類ひ鐵砲などにて對ふ時は鑄を
 以て落します、かるが故に鑄は大きくしてございす、手元に
 近寄る時は一尺三寸の刀身を以て自由自在に斬り拂ふと云ふ古今の
 便利を圖つてございす、併しそんな事が出来るものかどの御懸
 念もございませうが、それは近くには彼の柳原健吉先生の頑固扇と
 云ふものを御覽遊ばせ、赤樫の木で拵へてある扇の形狀の僅か一尺
 前後のものゝを以て自由自在に刃を受け流すと云ふ、その位ゝのこ
 が出來ぬやうでは到底名人とは申せません、所が惣左衛門は三十一
 歳に至つてこの事を十分に考へが附きましたので、主家吉川經倫
 殿へ申上げます、誠にか御賞美あつて、比類稀なる流義を編み出
 したと云ふその功に依つて五百石の藤を賜はりました、誠結搦なや

田宮新十郎

うではございませぬ、國次惣左衛門不満でございませぬ、殆んど二十年に近きその間、難をなし、晝夜苦心なして編み出したる流義、
でございませぬ、五百石ばかりの餘を頂き、それ卒るやうな了簡は、
宗殿入道は、前名重兵衛と云はれ、昔より普通ならざる苦心を致さ
れし代り、後には一萬有餘の御門人を御教導ありしこのこと、依
自分も縦令適はぬまでも多くの御門人にこの流名を傳へ三千と五千の門
人は取つて見たいと思ひ、苦心をしたのでございませぬ、然る
に吉川殿の仰せには、縦令身の者とも難も頼りに教へることは相成ら
ぬ、確證を取つた上にて、教へよとのことでございませぬ、惣左衛門
の意見は、大いに遠ふ所がございませぬ、情けなきことを仰せられる、非常に國次
へた所が知れたもの、誠に何うも小量なことを仰せられる、非常に國次
は、大いに手前の考へとは違ふ、情けなきことを仰せられる、非常に國次
惣左衛門は、望みを失ひました、所が國次が苦心を致したること、
且々誰れ言ふとなく、世上に聞かぬ所が、彼方此方と近國の大名方も

田宮新十郎

これを開き傳へ、比類稀なる國次が流義、何卒いたして我等の臣に
も學ばせたいと思召しませぬ、例の吉川の少量よりなかく、他國の
者は、殿中での事を、お噂なさいませぬ、安藝侯、備前侯、四國では
伊豫の松山松平隠岐守殿、土佐の山内侯、これ等の方々がお寄りな
なる、この噂が、出ます、岩國の國次と云ふ者は、立派なものだ、我
等の藩中にも、斯様な者があれば、なと思ふが、何うも吉川は少量な
ので、あると云ふことは、時々お噂が、出ますから、不圖この事をば漏
れ聞きなすつたのは、水戸從三位光圀卿でございませぬ、これは毎々
同業者も申しませぬ、稀代不思議の御明君、既に三代將軍家の頃は、
は、右に星名左に水戸と云はれ、御明君、依つて光圀卿は、この事を聞かれま
すと云へば、三代將軍の左右の御明君、依つて光圀卿は、この事を聞かれま
す、何うも珍しき所の流義である、殊に十四歳より三十一歳ま
での間、難を致したとあれば、その苦心の程も感ずる所である、不圖お氣が
うがな致して、その流義をば監み取らせたいもので、あると不圖お氣が

着きましたから、ある日小石川のお館へお歸りになりますと、お側田宮寛八郎をお召しになりまして光園寛八、其方の伴新十郎は、最う好い年頃ぢやのウツハハ、御意にござりまする、最早當年二十三日の春をも過ぎましてござりまする光園才智と云ひ器量と云ひ天晴な者であるから、汝の伴新十郎を周防岩國へ遣はし、吉川の家臣國次徳左衛門の許へ忍び込ませ、何と惣身惣刀流と云へる、それが編み出したる流義を見取らせては呉れまいか寛八未熟の伴、多あるべき御藩のうちよりお見出しに預かりましたること、この上もなき身の面目、然りながら見取と云ふことは容易ならざること、ござりますれば、到底僅かな月日では……光園イヤそれは有理由なことである、以後十年の間暇を取らせるから、敷容とそらに取つて、参るやう申し聞かせよ、併し余がこの儀を申付けたとあれば後日他國への風聞も何とやら、依つて表面的は勘當として遣はすが宜からうぞ寛八ハ、此は悉き君の御鏡意、定めて新十郎に申し聞かせませしたなれば満足に存することとござりませう光園費用も多分に

入るであらう、入用であれば何時なりとも余の許へ申し遣はせ、座の小遣ひとしては此金を遣はすから……と若干の金子を興へ、且つ御佩刀を一口賜はりました、そこで寛八は謹んでお受けを致し、早速お長屋へ退り、密かに己れの室へ新十郎を招きまして寛八如何に伴新十郎事とござりまする寛八汝にお上よりこれの事を仰せ付けたれたが、表面は勘當として出し遣れよとのこと、速かにこの役目をば勤めて参れ新十ハ、數多き臣等のうちより藝道未熟の拙者を以て、斯る大役を命せられましたる段、身の面目の上もなきこととござりまするから、謹んで勤めたくは候へども、父上、勘當とは輕からぬことにござりまするが、何う云ふことにして手前を御勘當なされませるか、寛八ハ其点ぢやて、我が伴を賞めるは異なる、とであるが、其方は親に勘當を受けけるやうな不行跡は毫も無い、依つて此方も勘當する工夫が附かぬ、何卒其方考へて見て呉れ新十、こりやア何うも迷惑でござります、親に勘當されることを自分で考へると云ふやうな他愛もないことは……寛八それは然うであらうが、

何事もお上の仰せぢや、これも忠義の爲りであるから……新十忠義の爲りに勘當されると云ふことはないのでござりませんか。實八なる程、理窟から申せば然うぢやが……ア、困つたことである。と少時頭を垂れて兩手を拱んで寛八考へました。が、寛八、然うぢや、斯う致せ新十郎、早や妹の安も當年十七歳になつて居るから、今晚其方は妹の寢床へ夜這ひに參れ、然うすれば何れ妹は喫驚して大きな聲を出すに違ひない、その時此方は斷け付けて參り、如何に年頃とは云ひでう、妹に對ひ左様な淫猥がましいことをする、梓は片時も當長屋に置くことには相成らぬ、出て行けと云ふて放り出しては何うであらう。新十、イヤ左様なこととは眞平御免蒙ります、一生涯これ限り當お屋敷の御門を跨げぬことなれば、一旦の耻辱と思へば是非もなきことで、はござりませすれど、拙いながら新十郎、周防へ參つて國次家に住み込み、流義を見取つて立歸らねばならぬ身の上、再び歸參を願ひ父の家名を相續いたすことに相成りし場合に、あの新十郎は江戸を立ちしなには斯々の事があつたなせよ、衆人の口の端に掛らんことの

最と耻かしう存じますれば、この儀は平に御免蒙ります。寛八、イヤ有理なることである、そんなら斯う致せ、此方は四五の客人を招待して酒宴を開くから、その席上に於て何か激論を始め出し、それを機會に此方を打て、親に對つて抵抗をするやうな件、當長屋に置くことは相成らぬ、只今より勘當すると申すから……新十、それは氣違ひでござります、殊に同藩の人を招いて置きます以上は、耻を知らば切腹いたして相果てなければなりません、寛八、なる程、それらぢやな……コウツとそれでは何卒其方何ぞ考へて呉れぬか、新十、父上こんな事は實に迷惑の上の迷惑でござります、と稍や少時兩手を拱んで考へて居りました。が、新十、それでは斯う致しませう、手前は此の門前の弓屋藤左衛門と云ふ揚弓場へは折々遊びに參つて弓術を試みて夜更けるまで弓矢を以て遊び深更に至つた所で能う飲まぬ酒をば取寄せて甚か酒を飲みませう、寛八、なる程、新十、泥酔れて先方で寝て了ひ翌日門限を外して立歸りますから、尋父の嚴格さは家中一般の野

判、武士の伴が夜遊びをなし、他方に在つて泊ると云ふやうな不埒な奴は勘辨ならぬ、依つて勘當をするとお上へか願ひ出し遊ばしませ、然うするに必ずお目附所へ御沙汰になつて門止めを蒙ひますから、そこで勘當になつては何うでござりませう、それなれば後日歸參が叶ひましても取つて恥辱と云ふ程でもござりませぬ、弓矢は武士の第、一とすべきもの、弓矢八幡照覽あれどは能く武士の申す位ゐること、他の御事或は色情の道に心を蕩かし、酒池肉林に夜を明したと云ふにもあらず、何處へ聞ゆても尊父の恥にならねば主家の面目にも觸らさず、後日私にも衆人の嗤ひを受けやうなこともござりませぬ、いかに存じられまする寛八、妙計、有策は寛八の伴新十郎、驚き入つたる勘當の工夫、新十郎、お賞り下されませぬ、親に勘當せられる工夫をしてお賞りに預かりませぬ、身に取つて餘り手柄なことは、お賞りませぬ、寛八、イヤ、何さまそれ、然うぢやがこの度は賞めて遣はす、そんなら然うして呉れよ、成るだけ明朝は遅う戻つて来いよ、新十郎、承知、仕りました、尊父も朝寝をなさらぬやうにして

下されませ、寛八、承知いたしました、そこで父子は言ひ合はせましたが、親も知らねば妹も知りませぬ、その夜は夕方より新十郎、ヒョイと出て行きまして、父親の寛八はそれとなく窺へて居りまして、「ヤ出て行き居つたな、恰もものぢや」と心の裡で思ふて居ります、驚てその夜も時間が来れば寝みまして、明る朝となりまして目を覺したる寛八は、エ、何と咳嗽を致しながら、寛八、奥や、妻、ハイ、寛八、寛八、火を一つ入れて、参れ、妻、心得ましてござります、寛八、新十郎は如何に火を一つ入れて、参れ、尊公、夢でも御覽遊ばしませぬか、寛八、イヤ、夢ではいたした、妻、ハイ、尊公、夢でも御覽遊ばしませぬ、居ります、寛八、然う云ふことを言はつしやるな、母親と云ふものは兎角子に掛ると目も鼻もない、隠蔽をさつしやるな、爲にならぬ、この頃は、何となく新十郎は夜遊びを致し、折々は長屋へ立歸らぬやうなことがある、此方は存じて居るわい、不埒な伴だ、妻、尊公、愈々夢でも御覽遊ばしたの、ござりまするな、寛八、イヤ、夢ではないと申すに、新十郎は居るまゝがな、新十郎が居ると云ふやうな不埒なことはない、妻、それは

公何を仰せられますか。寛八「イヤ、居らぬと云ふは不埒だと申すのぢや
 わい、妻、それではア御覽じ遊ばせ、寛八「御覽じ遊ばせと云つて、新
 十郎が居ると云ふやうな他愛もないことがあつて堪るものか」と
 と怒つたる氣色にて小刀を前半に帯け、罷違へば手討にも致さうと
 云ふやうな勢ひにて大刀を携へ、頓て紙門を開けて新十郎の室へッ
 カ／＼と出て参り、悴は居るかど見ますと、新十郎「父上、お早うござり
 まする、寛八「こりやア何うもならぬな、新十郎「新十郎父上、尋公は御老人
 の癖に朝寝をして下されましては困ります、寛八「朝寝と云ふことはな
 いけれど、貴様のやうに早う戻つて呉れては困るではないか、無暗
 に怒つて見た所が最う機會が抜けて了うて何にもならぬ、新十郎「イヤ、
 私が早いと云ふではござりません、尋公の朝寝が過ぎますので……
 寛八「今日は最う仕方がないから、何卒、明の朝は最ッど遅く戻つて來い
 新十郎「イヤ、承知いたしました」と、ここで又その日の夕方に成りますと、
 新十郎は支度をして出掛けやうと致します、新十郎の母の柵と申
 すは、これは水戸家の附家老、中山備前守殿のお娘御でござります

る、依て何事も禮儀作法はお辨へでござります、新十郎が出
 やうと致し、すを引き止り、柵「コン／＼、新十郎や、父上は何うやら
 お目を着けられて、彼是れ仰せあつたが、それでは母も心配すること
 ゆゑ、如才はあるまいけれども、若し泊ることがあつても朝は早う
 戻つて給れや、言はれて新十郎はそれと内實は打明けられず、父に
 は晩く歸れと言はれ、母には早う戻れと言はれ、誠に板挟みとなつ
 て辛いことは一通りではござりません、新十郎「委細承知いたしました」
 と、言つて新十郎は出て行きました、所が翌朝と相成りますと、今
 度は明け卯刻前から咳嗽が始まりました、エ、ヘンと言ふを台圖の如
 く、今度は奥様の方から「お寛八、盆に火を入れますか」とか、室へ参
 りますると、寛八「奥や、新十郎は何うした、柵「尋公はこの頃毎朝左様
 なことを仰せられますか、寛八「行かぬ、新十郎は何うしたと申すに
 柵「ハイ、室に居ります、寛八「何、新十郎が室に居るウ、ドレ、そ
 れでは一ッ改めて遣らう、柵「サア／＼、お改め遊ばせ、寛八「改めると
 そんな不都合なことがあつて堪るものか、柵「尋公の仰しやることは

健張り分りません、居るのが不都合でござりまするか寛八、何然うで
 はない、貴様の知らぬことぢや、何うも親を馬鹿に致し居る、貴様
 は次室へ往け、敗れて還る」と又追取刀にて紙門を開けますると
 新十、お早うござりまする寛八、何うもならぬな新十郎、新十、けれども
 父のやうに老人で熱く寝る方は見たこととはござりません、寛八、馬鹿を
 言へ、然う早く戻つて呉れては何うもならぬではないか、酒を飲ま
 ぬかい酒を……新十、飲まぬかと仰しやりましたも不常から飲めぬ酒
 は然う飲めません、寛八、そこを思ひ切つて飲んで呉れ、命に別條はな
 いわい、新十、私も田宮寛八郎の悴、酒ぐらゐで死にたくはござりませ
 ん、寛八、然うぢやけれど何事も主家の爲ぢやと思ふて飲め、毒では
 ない、新十、然らば今晚は左様仕りませう、寛八、頼むぞ、こんな事になる
 と困る……大体新十郎が居ると云ふのは不思議ぢや」と怒つた体裁
 で我が室へか這入りになりました、奥様は盛張り音が分りません
 欄のう新十郎、新十、ハイ、欄この一日二日は父土は何うか選ばした
 のか知らん、氣を附けて給もや新十、ハイ、老人と云ふものは暇々む

な欄の發るものでござります、私はそれが背觸うてなりませんから
 毎夜遊びに出るのでござりまする欄、何卒か前失策らぬやうにして
 下されや、母の情けも捨て難く、父の言葉も反古にはならず、主家
 の仰せの重ければ、主と親との板挟み、武士は必辛いものはないと
 大きに歎きました、が、扱てその日も夕方前、母の心は察すれど、心
 弱くては叶はじと、覺悟定めて相變らず、弓屋藤左衛門方へ出て參
 りました、新十、親爺や藤左、これは若旦那、この二三日は大層續けてお
 泊りになりました、又お嚴重い旦那様に聞かしてはお聞透びにな
 りは致しませんか、新十、何親父が彼是れ申した所が、好きなことに夜
 泊りを致すので君傾城に魂を奪られ精神を振す拙者ではない、武
 に取つては第一の藝道、我が君に聞かたどて敢て此方が恐縮する理
 由はない、藤左、それはそれに違ひはござりませんが、夜泊りをなされ
 ましては……新十、夢中になつて夜を更すのぢや、なアに彼是れがあ
 るものか、捕ふことはない捨て置け、何うも今晚はアク、身
 が寒うてならぬ、酒を取寄せて呉れ一升ばかり、然うして何ぞ美味

さうな下物を澤山取寄せて呉れ、少し風邪の加減で心地が悪うてな
らぬから、思ひ切つて今夜は酒を飲ひ、藤左、尊公は平素は一杯も能う
お飲みなされませんではござりませんか、新十、平素は謹慎んで居るの
ぢや、飲れぬと云ふ道理はない、そこで田宮はその夜は月術は樂し
ますして酒ばかり飲み始め、而も湯呑でグイ、薬を服ひやうな顔
をして立續けて一升はどの酒を到頭飲んで了ひました、大休壯健な
身体の人でござりますが、嫌ひな酒を無理に飲んだのでございまし
て、何うぞ斯うぞ飲んで了うた時は最う眼は見ぬ位になりまし
た、新十、藤左衛門、貴様は將門の化物見たやうな奴ぢやな、藤左、何故で
ござります、新十、何故と云つて、お前の顔は七ツ程に見ゆるわい、藤左
若旦那、甚いことをなされたな、新十、ヤア、貴様の宅は走馬燈の
やうにクル、廻るぞ藤左、そんな事をなさつては若旦那困りますな
新十、ア、一術ない、水を持つて来て呉れ、藤左、それだから無暗に御酒
を召喚るなど申したのでござります、ヤア困りますな、ヤア水を飲
んだり薬を持つて来いと云つたりして七順八倒の苦しみをなし、藤左

左衛門も徹夜、新十郎も徹夜、鳥の鳴く時分から何うやら少し酔も
醒めて来て心地快くなりましたからウツ、寝て了ひました、揺れ
ど起せと起きればこそ、夢中になつて寝込んで居ります、此方は
お話し轉つて父親の寛八でござります、夜の寅刻ころから目を覺
し、この位に起きたなれば何程彼奴が早くても未だ戻つて居らぬ
であらうと、例のヘエと咳嗽、寛八、奥や、欄、旦那さま、甚うお早う
お目が覺めましたな、寛八、新十郎は如何いたした、欄、ハイ……あの……
奥様も今朝ばかりは言葉が澁みました、占めたく、今朝こそは旨く
行つたと思ひながら、寛八、乃公は知つて居るぞ、この間から其方が隠
して夜泊りをさせて居ること、此方能く承知して居るけれど、何
うぞ斯うぞ朝辰つて居るから何にも言はず我慢をして居たが、居る
まいがな、欄、ハイ、その……若い者でござりますから偶には一晩ぐ
らゐは……、寛八、一夜ではない、不埒な奴だ、あのやうなもの、勘當
いたして了ふ、欄、尊公そのやうな短氣なことを仰せられませ……
寛八、なアに、ア、可内は居らぬか、手水の水を取れ、可内、ヘエ……

早うから親爺奴目を覺して家來を酷使にしやアがる、こりやア一番困つて了つた、併し何んなことになるか知らん、と吐きながら早速手水の水を汲んで参りました、寛八は手水を使ひ身繕ひをして朝飯を喫べ終り、そのまゝお上へ出で、光園殿にお目通りを願ひ出でました、然るに光園殿は至つてお情け深い方ゆゑ、他のお側衆もこの事を聞いて、寛八殿は無暗に嚴い氣質ゆゑ、斯様なことを願ひ出したが、登や一應で勘當いたせとは仰せあるまいと皆々思つて居ります、夜泊りを致し、折々立歸らぬことがあつた、其は不埒な奴である、十年ばかり勘當いたせ、他の者は皆嘆息した、年限を極めて勘當するとは稀代なこともあるもの、新様なことは恐らくないことゝは思ひましたけれど、お上の御明君ゆゑ、十年経てばこの位ものか知らぬと思ひましたが大方向が着くであらうと云ふ思召しで仰せられたものか知らぬと思ひました、餘りのことに不思議に思つて居ります

する光園寛八、目附所へ申し出で、新十郎立歸りなば門限切れの隙を以て逐ひ拂うて了へ、寛八ハッ……光園併し彼れも勘當いたせば當江戶表には居られまい、何れ他國へ行くであらうから道中は氣を着けるやう言うて置け、こんな稀代な勘當は見たことはない、餘程野しいことであるとお側の衆も呆れて居ります、然るに寛八は早速御前を退つて目附所へ右の趣きを通達いたしました、目附所に於てもこれを聞きますると、あの新十郎に限り、なか／＼遊君傾城に心を動かかし、色情に迷つて酒などを過す人でない、一過ぐらゐ門限を外せばとて勘當とは氣の毒であると思つて居ります、それは皆日頃の性行を知つて居りますから斯く思ふは人情でございませう、此方は新十郎、藤左衛門方にて彼是れ巳刻時分まで居りました、が、漸う目を覺し、新十郎、快い心地になつた、藤左衛門、最う何時ぢやの藤左、若旦那、今朝ばかりは大變でござります、新十郎、何が大變だ、藤左、無暗にか過しなされて最うこれ巳刻でござります、親且旦那様は至つて御氣性の嚴い方、こりやア普通では尊公はか長屋へか

歸りなされることは出来ませんよ新十、なアに愚圖く、言へば出て行く
 分のことだ藤左、こりやア何うも平常のお氣質にも似合はしからぬ、
 根が御親子の間柄、不和を生ずるなと云ふことは宜しくないこと吐
 でござります、新十、藤左衛門、貴様も武家に交際ふから厳しいこと吐
 すな、不和を生ずるも親子の喧嘩もあつたことかい、此方とても木
 竹の身でない人間ぢやわい、年頃になれば一夜ぐらゐ夜泊りを致し
 たどて上でも彼是れあるものかそんな頑固なことを申す親父なら此
 方から勘當して送る藤左、これは怪しからぬことを仰しやる」と藤左
 衛門は妙な顔附をして居ります、そのうち新十、邪魔であつた」と
 言ひながら、ノソリくと佩刀を携へ、藤左衛門方を出て富阪御門
 へ掛りまして新十、ハイ田宮でござります、役人、ア、イヤ新十郎殿、お
 刻限が外れましてござる、其許の父寛八殿よりお届けになり御勘當
 とお上りの御沙汰……新十、何、すりや手前の父の寛八よりお上へ
 願ひ出で、拙者の入門叶はぬとの仰せでござりますか、役人如何にも
 新十、ハッ……と言つて少時は黙然と致して居ります、お目附一同

の方は互に顔を見合して氣の毒氣に見遣つて居ります、役人、賦にお
 氣の毒なることなれど、君命なれば已むことを得ず……言はれて定
 めて困るであらうと見て居ります、新十郎はハッと膝を打ち
 「ヤレ助かつた役人、これは怪しからぬ新十、御免……」と新十郎は再び
 門を出で、その足にて弓屋藤左衛門方へ立歸つて参り、新十、藤左衛門
 藤左、若旦那何うなりました新十、到頭門限外れの廉を以て勘當となつ
 て了つた藤左、それ御覽遊ばせ新十、なアに捕はぬ、これから手前は四
 ツ谷より板橋の方へ参り、板橋で以て少時待ち合して居るから、若
 し父が参つたら左様申して呉れよ藤左、何の尊公の父御様がそんな重
 を尋ねにか出でなされますものか新十、イヤ、然うでない親父が來
 るであらう、一旦は怒るであらうが親子の情愛と云ふものはそんな
 ものではない、今に來るであらう藤左、へエーお出でになりませうか
 な新十、ハ、來たら頼むぞ藤左、へエ、マアお出でになりませうか
 様申しませう、併し若旦那、お小遣錢でもお入用なら多分はござり
 ませんが少々お立替へ申しませうか新十、金も親父が持つて來るわい

藤左「これは妙な、そんな旨いことがございますものか」そのうち新十郎は「イヤ、どして出て行きました、跡見送つて藤左衛門、不思議に思ひながら、貧乏を引寄せ、店に座つて煙草を燃らして居ります、所へ佩刀を抱へ、その他次類萬端、總て用意を致して父の寛八、小者も伴れず只一人、欣然として藤左衛門方へ出掛け、参りました。寛八「藤左衛門、藤左、これは旦那様でござりまするか、寛八「悴は何うしたな、藤左「エー、旦那様は……」寛八「イヤ、彼は云うて話して居る暇はない、出て行つたか、藤左「御意にござります、寛八「何處へ行くぞ申した、藤左「へい、あの四ッ谷より板橋の間で緩容と待つと斯う仰しやりました、寛八「ア、然うか、憎い奴だ、藤左「何卒、ア、一ッ且旦那様御勘當の程を……」寛八「イヤ、彼は言ふな、藤左「して何公は何しにか出でなされ、ます、寛八「何しにとて、勘當して放り出した件、何うせこの江戸にも居られまい、旅へ行かねばならぬ身の上、支度もせねばなるまいし、足拵へから差替の佩刀、それから旅費を遣りに行くのぢや、こんな稀代な勘當と云ふものは聞いたことはない、腹が立つて居るのか承

知で勘當するのかわが分らぬと思ひながら呆れて居りますと、後をも見ずして寛八は、その足でスル／＼板橋の方へ出て行きました。すると路の傍より新十郎、父上でござりまするか、寛八「オ、新十郎、出来した、た、旨いこと参つたぞ、今朝ばかりは奥りが顔の色を變へて妙、な、顔をし居つたぞ、新十郎「誠に母人には申すもござりませぬ、寛八「イヤ、大事ない、何事も主家の爲ぢや、新十郎「左様なれば父上、これより直ちに……」寛八「ム、随分首尾好く御用を勤め、歸國の日をば相待つぞ、新十郎「心得ましてござります、御両親とも随分お風邪を召さぬやう、度、歸國仕りますから、寛八「無事に歸國を此方は、藤左から相待つぞ、道中、氣をつけて行くが可い、是に於て支度をなし、君より拜領の相州傳、來、秋廣の一刀を携へ、その他多分の金子を懐中爲し、父に別れて新十郎は中仙道を急ぎ、追々上方筋へ赴いて参りましたが、大阪より便船を求めて周防の國は岩國へ到着なし、これより國次、惣左衛門の屋敷へ住み込み、愈々惣身惣刀流の見取と云ふのお話しでござりま

田宮新十郎

第二回

切て新十郎は周防の岩國へ着いたしまして、錦帯町の小紅屋爲助と云ふ宿許へ参り新十郎免せ爲助か入來遊ばしませ新十郎武家一人だが暫く當地に滞在いたしたい、差支へはないか爲助へエ、決して差支へはございせん、何卒お泊り下されまし、そこで新十郎は足を洗つて、案内に俾れて奥の綺麗なる室へ通りました爲助併し旦那様一寸お断り申上げて置かねばなりません新十郎オウ何事ヒや爲助當地から九州へ掛けましては、近頃正雪が駿河に於て隠謀を企みまして、より以來、その御漏らされの浪人共が八方へ散亂いたしまして、甲武家と見るときは大きに嚴重しいこと、一々お上に於てお聞込みに相成り、敷を代へて頂かねど、一室に何日も武家を泊り置きまして、三日毎に座は恐ろしい科料を命けられ、都合に依つては長らく牢へ入れられたり

する。

田宮新十郎

することございませ新十郎オ、それはく、氣の毒千萬、何遍でも貴様どころの座敷廻りをさして呉れ爲助へエ、それさへ御承知なれば結構でございませ新十郎そんな事くらゐは一向頓着はない、然りながら亭主、新様なことを申すと訝しいやうであるが、此方宿屋の食物が氣に入らぬと云ふではないが、些と頑是なき頃から父が榮耀に育てたものだから、此方は其方方にて飯だけは出して貰ひ、總て茶廻りは料理屋から食事の毎度に取寄せて貰ひたい爲助心得ましてございませ新十郎又茶の所番茶は能う飲まぬから極く良い茶を取寄せて呉れ、茶菓子も何卒好いのを取寄せて呉れるやう爲助承知いたしまし、茶菓子も何卒好いのを取寄せて呉れるやう爲助承知いたしまし、茶は玉露、茶菓子には上等の菓子をして、程鉢に入れて持つて参りました、すると三ッは取つて新十郎は入らぬから其方で喫べて呉れ爲助有難うございませと臺所へ持つて退り爲助お竹たけ何ぢやいな良人爲助お菓子を下されたたけか前値しがつてそんなものを喫べなや爲助喫べなど云つて先方で下されりやア喫べても可いではないかたけイエ、勘定を先に貰はねば

當にはなりません 爲助馬鹿を云ふな、あれだけの御立派なお武家、宿屋を倒したりなどしなさるものか、たけお前はん然う云ふことを云つて始終客に惚れ込めひから間違ひが出来来るのぢや、爲助、ア何でも可い、歌つて置いとけ、たけ、イ、エ、妻は他に客のあつた時この菓子を出すから…… 爲助、厚皮しい奴ぢやわい、ア飯時分になりますと三ッ鉢を料理屋から持つて参りましたから、これを出しますと、一ト鉢好きなのを取つて二ト鉢は下げて遣ると云ふやうな譯でございませぬから、爲助は嬉しがつて居りますすが、お竹はなか／＼嬉しがりません、たけ、美味いもの喫はす奴に油断すな、後で跡腹痛りものなりと云ふことを知らないで、又何處ぞで甚い目に遭ふぞ、爲助、そんなことがあつて堪るものか、扱て三日経つても五日経つても勘定をしやうとは致しませんから、たけ、それ見なされ、爲助さん、産しも勘定を尋ねまいがな、爲助、勘定を尋ねぬと云つて氣遣ひがあるか、下さるに違ひないわい、たけ、イ、エ、ア一遍今日は七日目だに依つて催促をしてお出で、爲助、そんな現金なことをしないで可いではないか、

たけ、イ、然うではない、行つてお出でと云ふに…… 爲助、ア入夫はど情けないものはない、喉、アに幅をされて馬鹿／＼しい話したな、ア、たけ、先方へ行つたらな、爲助さん、コッコー笑つて頭を一遍掻いて結構なお天気さまでございます、斯うお急しう申すではございませぬが、何の旦那様でも三日目には大抵御勘定を願ふのでございませぬ、旦那様は關東のお方とお見受け申し、實はこれまで差控へて居りましたやうな仕儀で、何うか宜しう、一寸勘定書だけは御覽に入れて置きますと斯う云つてな、ア、兎角これだけの營業をして居て七日や十日の旅籠賃を急しく云ふどの思召しもございませうが、あるやうに見えてないのが金子、ないやうに見えてあるのが借金とやら申しまして、誠に手許が不如意でございしますので…… と先方へ行つて云ふのだせ、爲助、可いわい、子供に用を吩咐るやうなことを云つて呉れるな、それ位のことには乃公だつて知つて居るわい、たけ、早く行つてお出で、爲助、情けない奴だな、ア、ツベコベ／＼と喋りやアがつて…… それぢやに依つて貴様のことをば世間のお方が雀のお竹と云はつしや

るわい たけ、雀でも燕でも妾があればこそこの營業が出来のちや、お前はんのやうなお目出度い人を一人打遣つて置いたら、客に家を潰されて十日と経たぬうちに宿屋は閉店ぢや、爲助能う何うの斯うのと轉る奴ぢやなア、云ひつゝ奥の室へ出て参り、障子を開けまして爲助御退屈様でございます新十、イロウ亭主か爲助エ、一結構な天氣さまでございます新十然うぢやな、好い天氣である爲助ア、早いものでございます、最うお泊りになりましてから今日で七日目でございます新十然うかのウ、貴重な光陰をば無駄に七日も我れを忘れて費して了つたか新助一寸旦那様、七日目は大抵何の位も長い御逗留のお客様でも御勘定を願ひますのでございますから、一寸お書附だけを御覽に入れて置きます、旦那様は御飯は手前の方で召喚りするが、その他の料理、或ひはお菓子などは皆他店から取寄せまして現金でございますので……新十、ア、然うであらう、レ勘定書をいませう……ハ、ア、これまで所々長旅をして参つたが、何處の宿屋へ行つてもこのやうな安價いことはない、お前の方は餘程勉強い

て居るかして案外に安價いのウ爲助、エ、手前の方は精々お働さ申上げて居ります新十、然うであらう、餘程安價い、併し確かに書附は見たぞ、爲助所で旦那様、新様にお急しう申上げてはお氣に觸るか存じませんが、あるやうに見てないのが金子、ないやうに見てあるのが借金とか申しまして……ヘッヘッヘッ何うも……と附けたやうな笑ひやうを致しました、すると此方は兩方の袖をハハと叩き、袖口を持って兩手を擴げ新十、何うぢや亭主、手前のこの姿を見て金子はあるやうに見ゆるか無いやうに見ゆるか爲助、そりやア最う旦那様……新十、何うぢや、あるやうに見ゆるか爲助、翠公のお姿を見まして錢がないの金子がないのと申せますものか新十、あるやうに見ゆるか爲助、ヘ、エ、そりやエラ見でございます新十、所が……あるやうに見ゆるか、爲助、ヘ、エ、そりやわい爲助、エ、ハ、ツ……と爲助は返り爲助、それでは何うも我々共、夫婦喧嘩が出来ますので……新十、何故ぢや爲助、又お竹が臺所で雀のやうに轉ります、何うもあの雀が刺り始めますと喧しうて私は壽命が縮まる位なことで……新十、ハ

、ア、それは氣の毒ぢやの、イヤけれども貴様の方の支拂は減多に
 倒しはせぬぞ、ドレ待て〜と忽ち傍にあつたる大刀を取寄せ
 火鉢に差しあつたる火箸を抜き取り、一本を目釘に當がひ、又一
 本の火箸でコック三ツ四ツ打ちますと目釘はホリと抜けまし
 た二本目釘でございますから二本とも抜き取り、この柄をグイッと
 放し新十、サア爲助、この柄を賣るのではないぞ、何處ぞ道具屋へ見
 せて來い、何の位な價值があるかこの柄だけでも貴様の處で五十
 日や六十日は、賣りさへすれば樂々滞在して居ることが出来る爲助
 へエー、マア一應女房と相談いたしまして……新十、ム、ム、誰れと
 でも相談いたせ、賣りはせぬぞ、道具屋に値を入れますただけだぞ
 爲助、心得ましてございます、そこで蒼い顔をして爲助は柄を持つて
 臺所へ參り爲助、竹たけ宜しい、皆開いた、それ見い、お前が惚れ
 込んで茶菓子を喫したり料理屋から食物を取寄せたりして……併し
 武士にしては殊勝しい抵當を出し居つただけが尙だ、見込みがあ
 る、併しそんなものをこの儘で持つて行つては、何んな價值のある

ものでも人が安價う見倒して了ふから、妾が味好うして進げる」と
 そこで眞綿を出して柄を巻き、鬮金木綿の小さい風呂敷でこれを包
 みたけ、これを持つて行つてな、見倒し屋の豊七の處で見てお出で
 あの豊七が價値を入れ居つたら、他店へ行つたら五層倍位には賣
 れるから、それでお前、先方へ行つてクック、笑ふては可けないせ、
 煙草を二三服喫むぐらゐの間は黙つて居て、それから決して賣るの
 ではないが、一ツ眼の正月をして置きなされど重々しく云つて價値
 だけ入れさしてお出で爲助、オツと承知、とこれから爲助は出て行き
 ました、道具屋豊七の戸前まで參りますと、なか〜商賣に掛け
 ては如才のない男、馴染の者は呼び込んで何に依らず世間話しから
 錢儲けの口があれば直ぐ掛らうと云ふ豊七でございますから、物に
 油断はございませぬ、豊七、オイ小紅屋、ココ〜笑ふて何處へ行きな
 ざる爲助、イヨ、お前どこは……オ、然うぢや寄つて遣らう、豊七、マア
 上れ、何處へ行く積りかな、爲助、イヤ一寸今日は用事があつて一二軒
 見せるものがあるのだが、斯う云ふものは到底お前に見せた所が駄

目だけけれども、マア眼の正月をして置け豊七、ヤ何の彼のと大層察さ
うに言ひ出したな、これもお前どこの雀どんのお指圖だな爲助、コリ
ヤ見倒し屋、人の噂アを捕へて雀どんと云ふやうな挨拶があるか
豊七、怒るなく、小紅屋、お前の處の噂衆はこの界限では誰れ一人と
して雀どんと云はぬものはない爲助、併しな、これは賣るのではない
が、お前も道具屋だけに見て置け豊七、何う、見せて貰はうか」と聽
て爲助の出したる風呂敷包を手に取上げ豊七、ハ、ア刀の柄だな、ム
、ウ……」と風呂敷を解いて見るとスツカリと真綿で巻いてございま
す豊七、ハ、ア、これもお前どこの雀どんの細工だな、素人細工に無
暗に物を長く見せやうと思ふて綿さへ巻けば可いと云ふやうな考へ
から、巻止めの分らぬほど、會式のお宗師さんぢやアあるまいし、
綿ばかり巻いたとて長く見ゆるものかな」と頓て綿を取り少時の間
目貫に眼を止め豊七、小紅屋、この位ゐでは何うか」と片手を出して
指を五本攪げました爲助、ハ、ア五百兩か」豊七は呆れ返りました
豊七、オイ小紅屋、馬鹿にして呉れるな、刀の柄に五百兩と云ふやう

なものがあるか爲助、それだと云つて五本の指を出したら五兩でも五
本なら五萬兩でも五本ぢやアないか豊七、大概、法と面とを見て話し
をして呉れ、刀の柄だけで刀身なしで五百兩なんて何値があつて
堪るものか爲助、ハ、アすると何程か豊七、五兩だ爲助、返して呉れ」と
突然引奪りまして爲助、折角綿で巻てあるものを引剥して、こんな代
品を五兩なんて人を馬鹿にして居やアがる豊七、ぢやア何の位ゐなら
先方で賣る積りぢや爲助、買りやアせぬのぢや、見せるだけだ、マア
それでは話しにならぬ最う歸る豊七、そりやアお前のものを無理に買
はうとは云やアせんが……」爲助、オア、云ふな」言ひつゝ爲助は庭
へ下り草履を穿いて出掛けますると豊七、オイ、最う五兩買つて十兩
では何うだな爲助、勝手に喋つて居る」戸外へ出て走り掛けますると
豊七、十五兩では何うか爲助、何となく云つて居る……」豊七、二十兩に買
ふぞ爲助、獨り喋つて居る豊七、二十五兩」大きな聲を出して居りま
すうち、爲助は走つて戻りまして爲助、お竹、たけ、オ、爲助さん、慌て
いでも宜しい、何うでした爲助、見倒し屋が二十五兩に値を附け居つ

たたけ、そりやア最う大丈夫他の道具屋へ持つて行きやア百兩にはな
 る、僅た刀の柄だけでも百兩の價値があるとすりやア、刀身からス
 ヲカリのものを入れたら大方五百兩ぐらゐのものはあるだらう、爲助
 そんなら何うするたけ、これからお前は奥へ行つてな、これく、斯う
 云つて、少し位ゐな金子なら取替へて錦帯橋から就ては安藝の宮島
 なぎを見物さして、腹一杯金子を遣はして置いて、精出して宿賃を
 滞らせて、その上で腰の刀も何も彼も取つて了ふが可い、爲助そんな
 薄情なことが出来るかい、たけ、マア行つてお出でと云ふに………とこで
 爲助は喉アの勤めに據所なく、再び奥へ出て参りました、爲助、且
 那樣、只今仰せに従ひこの柄を持つて刀屋へ見せに行かうと思ひま
 したが、不圖途中で平素悪意に致すお武家に出會ひまして………新十
 ハ、ア成程爲助、そのお方の仰せられますには、暫く主公の御用で江
 戸表へ行かねばならぬから不在中は萬事頼む、就ては金子が少々遊
 いて居るからお前の方で融通に遣うて呉れ、利も何も入らぬ、預け
 る先は別にないのだから預かつて置いて呉れと云ふことで、少しく

不意の金子が這入りましたことゆゑ、何卒旦那様にも御心配のなき
 やう、又然う云ふ都合でございますから、少々ぐらゐの金子は、お
 入用でございますればお立替へ申して宜しくは御用達て申します、
 何ならこれから尊公、景色の佳い地もございますし、船でお越しに
 なつて安藝の宮島の御見物、その他所々に名所もございますから、
 何なら御案内申しませうか、新十、それはく、忝い、何うぢや、この刀
 の柄を道具屋へ見せたな、爲助、イエ、なか、新十、見せたであら
 う、何うぢや何の位ゐ酷い道具屋に見せても二十五兩より以下には
 附けまい、爲助、エ、ツ、イヤそんな事はございませぬ、新十、マアそれは
 何うでも可い、こりやアお前も知つて居るであらうが、この目貫は
 生地は赤銅だから左してこの金には何程と云ふ價値のあるものでは
 ない、只この彫刻だけの價値ぢや、これは蘆に蟹の彫刻であつてこ
 れか世に名高い御藤祐乗の作である、總て名人の作と云ふものは生
 物に疵を附けぬと云ふのが見處である、これを見よ、蘆の葉の枯れ
 たのが彫つてあらう、この枯蘆へ以て行つて銘が刻つてある、これ

が眞の生物に我を附けぬと云ふ名人の作ぢや、爲助且那様、すると何
 でございませうか、名人が彫りましたのならこの蟹でも動きませうか
 新十「マアその位なことはあるとしたものぢや、爲助道理で横這ひの
 二十五兩でございませう新十見せたな爲助へ、、、、、」言ひつゝ体裁
 の悪るさうに頭を掻きました新十何うぢや、違ふまい爲助且那、尊
 公は少し占易もなされますか新十イヤ、そんな事は無いが、併しマ
 アこれは元へ收めて置かうと、刀を取寄せて柄を俄めて目釘を打ち
 新十これはな、柄だけでも三十五兩や三十兩に賣るものではな
 い、刀身諸共で何うしてもこの一刀で八百兩位の價値は確かにあ
 るもの、小刀も二百兩位の價値はある、都合千兩だ、言ひながら
 頓て懐中から胴巻を出しまして中から金子を振り出しました、振
 る度毎にストン／＼と以上十二包振り出しました新十これが何れも
 二十五兩包だから都合三百兩ある爲助ヒエエ……新十尙だ紙入に
 も少々小出しはあるが、こんなものは小遣錢である、それでお前の
 處の支拂ぐらゐは此金に手を着けずとも自由に出来る、これを見て

一々爲助は嘆息いたしました新十併し亭主、金受には立つとも人受
 には立つなどは能く世に云ふことであるが、何とこれを皆で千三百
 兩として、これだけの金品の預けて置くから此方の一身を世話して
 は呉れまいか爲助へエ、それは何處へでございませう新十此方、
 實は當地に足を留めて奉公したい先方がある爲助それは何方でござ
 いませう新十當地吉川家の藩中にて國次惣左衛門と云ふ、劍術の先生
 の許へ奉公したいのである、何うだ、周旋を致しては呉れまいか
 爲助へエ、するとこれだけのものを私の方へお預かり申しますの
 か新十ム、爲助イヤ一應愚妻と相談いたしまして……新十斯様なこ
 とは家内に相談せずともお前は亭主のことだから亭主の了簡にある
 ではないか爲助へエ、何分入夫の身の上でございませうから、殊に女
 房は雀のお竹と云はれる位の能う喋は女でございまして……新十左
 様か、然らばそれはお前の所有通りにするが可い、この時隙子の外
 から女房はたけ爲助さん、諸合ひなさい、爲助何ぢやい、其處に
 立つて居るのかい、新十郎はこの体を見て噴飯しました爲助且那様

あゝ云ふ女でございます新十、イヤ一層變つて宜しからう」そのうちお竹は會釋をしながら遣入つて参りたけ、旦那様、最う妾が引受けまして屹度、良人を遣りますでございます、國次様は以前この人の奉公して居りました主家でございまして、この人は國次様方に中間奉公をして居りましたもので、人間は些と愚鈍ではございませぬが正直に能く働くといふのが見込みでございまして、國次の旦那様のお世話で手前の方へ入夫に遣して下されましたのでございませぬ、妾もこんな亭主は嫌やでなりませんけれども、何分阿呆正直なものと客評判の好いものと、夜が明けたら寝るまで働いて居ると云ふ質ですから、それだけで「ア我、慢いたして居りますやうなことで……」爲助、最う可い止け、新十、イヤ成程、化鶴、鳴いて牡鶴時を告ぐると云ふ譬へもあるが、お前は餘程才物ぢやのウ御家内、たけ、へ、皆そのやうに云ふて下されませぬ」爲助も實に呆れて了ひました、扱て臺所へ引き取りますると爲助、お竹、あれで可いかたけ、ハア宜しいともお前、あの人を國次様へ奉公に入れると、以前は武家だに依つて中間奉公などをし

て朝から早う起きて労働なせをする、冷ね込んで屹度、あの人が病氣に違ひない、そこで宅へ引取つて介抱をして居るうちに、病氣が重つて「コ、リ」と死んで了ふだらうがな、然うするとも前、これだけの品は皆流れ込むのだ、サア何でも彼でも國次様へ行つて奉公させるやうに都合をしてお出でよ、爲助、それでは一通國次様へ行つて來やう、そこで羽織を引掛けて爲助は、國次、惣左衛門の屋敷へ出掛けて参りました、爲助、へ、旦那様、今日は……と勝手元より辭を掛けますと、今、惣所にて惣左衛門は一服喫んで居りまして、惣左、誰れぢや……オ、小紅屋か、爲助、へ、今日は……惣左、マア上れ、爲助、御免下されませぬ、オ、苦しい、苦しい、苦しいから此方へ上れ、爲助、有難う存じます、惣左、相變らず繁昌かな、爲助、お蔭様でお客様もボチ……惣左、オ、それは目出度い、何ぞ用かな、爲助、へ、實は旦那様、一人中間を置いて頂きたうございませぬので……惣左、へ、ア然うか、此方には新平に儀助と云つて若黨も中間もあるから別に今日の所では人は入らぬやうであるが、何う云ふ者か、爲助、所が私もお屋敷の御勝手は知つて居りますので

さいますければ、他の旦那方には一向お馴染もございませず、
 他家様へ周旋をする時にも参りませず、本人も亦お屋敷のやうな
 斯う云ふ武藝を御指南なさるお方へ御奉公をしたいと斯様に申しま
 すので…… 惣左、ハ、ア何者ぢや爲助お竹の遠縁の者でございます
 惣左、妙ぢやな、お竹には親類はない筈であるが…… 其方は素より獨
 身者、我が屋敷に奉公して居たのを勤め方が忠實しい所から身が周
 旋を致して小紅屋へ入家さしたる者である爲助所が段々物詣りをし
 て見まするとお竹の爲には叔母の縁者ださうでございまして、幼
 頃より江戸表へ参つて居りまして、スツカリ江戸兒になつて居りま
 す惣左、ハ、ア爲助この度中國へ参つて手前方に泊り、段々お名乗つ
 て見ると遠縁に繋がるのでございます惣左、成程、何と云ふ名ぢやな
 爲助、ヘ、エ…… コウツと名前は…… 惣左、貴様、家内の縁者の者の名
 を知らぬと云ふことがあるか爲助、それは…… その何でございます、
 聞きましてございしますが、その記憶が悪うございしますので…… 源左
 衛門でもなし、儲か源…… ヘ、エ、源助とか申しましてございます

惣左、ハ、ハ、好い名ぢや、幕堂侯の御先祖も源助と云はれた、何歳
 ぢやな爲助、ヘ、エ…… コウツと儲か二十四歳でもなし、五でもなし
 六でもなし…… 先づ其邊でございませう惣左、複雑しいことぢやな、
 けれども貴様の粗忽しいことは今に始めぬこと、他愛もないものを
 世話してはならぬぞ爲助、イ、エ、なか、惣左、其方が差當つて他へ世
 話をすることも出来難いのであれば伴れて来て見よ爲助、ヘ、エ、素より
 私を受人には大丈夫立ちますから、何卒マア願ひ申します惣左、オ
 、然うか、其方が引受けるのであれば伴れて参れ爲助、左様なら立歸り
 まして直ぐ伴れて参りますから…… 惣左、イヤ、明朝でも可い、今日
 はこれから余も用向があつて出て行かねばならぬから爲助、それでは
 然う云ふことに致しませう、宜しく願ひ申します」と屋敷を出で
 直ちに宅へ戻つて参りまして爲助お竹、行つて来た、マア無理から
 置いて貰ふことに頼んで来たのぢやたけ、オ、然うか、ナヤツとそ
 の事を奥の旦那に返事をするが宜からう爲助、よし…… 旦那
 往つて参りました新十、オ、御苦勞であつた、何うぢやな好都合か

爲助へ、實は先方でも今二人も御家來がございまして、餘計には入らぬと云ふことでございまして、無理から頼みましたら、然う云ふものなら、伴れて来て見よとの仰せでございまして、新十、それは御苦勞であつた爲助所てな旦那、弱りましたのは、尋公の名前が分りませんでございまして、新十、オ、なる程、けれども武家なと云つては先方へは納まるまい、爲助御有理なことでございまして、それで恩妻の縁者と申しました、それで名が分りませんから、出目源助やと申しました、大事とさいませんか、新十、これははしたり、不思議なこともあればあるもの、人の世話をばしやうと云ふ實意があればこそ、キチンと名前の合ふ所が不思議だ、拙者は源助と云ふ名ぢやない、爲助旦那、尋公好い加減な程の好いことを仰しやいます、新十、イヤ、實源助と云ふ名であるぞ、爲助へ、エ、……所で年齢でございまして、何歳だと聞かれましたから、二十四歳でもなし、五でもなし六でもなしと斯う三ッはを言うて置きました、新十、聞違うてもその位を言うて置けば何れかに當るわい、爲助尋公も餘程なまくらな方でござい

ますな、新十、然らば二十五歳なら二十五歳にして置いたら可いではないか、所てな爲助、髪結を一人呼んで呉れ、頭髪の恰好から變さねばならぬ、爲助承知いたしました、そこで床屋を呼びまして、スツカリ頭髪を變へまして、元服を廣たくして、短かく致しました、頭髪より取寄せまして、スツカリ支度を致し、大小刀金子を首り手荷物等は残らず當家に預け置き、その翌日爲助と同道して、國次の屋敷へ遣つて参りました、すると此方は爲助は先に立ち、「へエ旦那様、今日は小紅屋爲助でございませぬ、惣左、オ、小紅屋か爲助へ、昨日お願ひ申して置きました源助を伴れて参りましてございませぬ、惣左、オ、然うか」と起つてお出でになりまして、惣左、其方が此方の屋敷に奉公したと申すのか、新十、左様でございませぬ、惣左、其方が此方の屋敷に奉公したいと申すか、何うちや辛抱は出来ぬかな、新十、へエ、精々辛抱いたしまして、私も、ア、お武家のお屋敷で生涯終りたいと思ふ位でござりませぬから……惣左、へ、ア、して身元は小紅屋が引受けると申すの

ぢやな新十左様でござります。惣左、それでは爲助に就いて、此方の屋敷には若黨新平、中間儀助の二人が居るから、それ等の者に引合しで貰ふが可からう。すると新十郎は何心なく「ハ、ッ」と答へました。所で惣左衛門は心中に「ハ、ア、この者武家だな、手の舞ひ足の踏み處、餘程武術の心得ある者に違ひない、扱ては何處の藩かは知らねど、我が流名を聞き傳へ、惣左衛門を見取りに來たのぢやな、よし、見取れる程の器量あるものなら見取つて呉れ、素より一人にても多く教へて遣りたいが我が希望である」と口に出さね、心の裡では悦んで居られます。此方は爲助は新十郎を伴つて中間部屋へ遣つて來り爲助、オイ新平、此方に儀助、新十郎、小紅屋、人餘計な人が置いて貰ふことになつたから何卒心易くして下され。新平、オ、然うか、何と云ふ名だ、爲助、源助と云ふ名です。新平、承知した、ア、心易くは御同然にせねばならぬから爲助、それぢやア、お前方に頼んで置きますから新十、何卒お朋輩衆、心易く頼みます。新平、オイ

今日、初めだから可いが、明日からは朋輩の頭へおの字を附けたりして、お朋輩の新平さんに儀助さんなどと言はれると此方が迷惑だから、斯うして同室に住む限りは、互に名前を呼び合つて、オイ新平、の儀助と云つて貰はねば困るから……新十、ア、何卒宜しく願ひます。新平、爲助さん、ぢやア、この人のことは承知しましたから安心をしなされ爲助、それではア、何卒宜しく頼ん申します。是にて小紅屋は國次へ右の赴きを言ひ置いて源助を殘して宅へ歸りました。所が源助は二人に對ひ新十、私は大体この劍術が好きなので、新十、ア、然うか、新十、人に負けることは大嫌ひで、何を隠さう雅い時分から關東で成人して話らぬもの、間違ひから人と喧嘩をして、蒲座の中、赤肌を搦され、それから後と云ふものは何うぞして普通の腕前になりたいもの、苦心に苦心をして彼處此處と流汗うて來たが、思はしく足を留める處もなく、遂に當地へ來て聞いて見ると國次様と云

ふ先生は、日本に類のない剣術の先生だとのこと、依つて御當家へ奉
 公して何でも一ツ武藝を習はたいと思つて来たのですから、朝はお
 前さん方の寝て居るうちに目を覺して、何事も用は引受けて私がす
 るから、何卒剣術の稽古が始まつたら一ツ私に見せて貰ひたいので
 すか……新平、そりやア好い心懸けた、なア儀助、乃公等ア旦那が剣
 術の稽古をせよと云つて下されても、そんな事をする氣は露ばかり
 もないのに、この男は又剣術の稽古がしたいと云ふ、餘程變つた人
 物だ、何時などお稽古が始まつたらお前は見に行くが可い、跡の用
 事は乃公等が二人でするから源助、そんなら何卒お頼み申します」そ
 こでその日はそのまゝ過しました、その翌朝は二人の者より一時
 も早く起き出で、聞いた通り庭前の掃除から道場の掃除を済して、
 漸う二人が目覺す時分には部屋へ歸つて煙草を吸うて居ると云ふ
 有様でございませう、新平、源助、早いな、源助、オ、目が覺めましたか、道
 場も庭も不殘掃除をしました、新平、恐ろしい早いな、それぢやアこれ
 から後の用は二人で引受けるぞ、源助、有難うございませう、新平、最う程な

うお稽古が始まるだらう」と話しをして居るうち、追々門人方も出
 て参り、扱てお稽古に掛られます、源助は正面の門人方の後の
 方に座してお稽古の様子をヤツと見て居ります、ハ、アと國次は
 目を着けました、我が鑑定に毫しも違はず見取りに來たに相違ない
 器量があるなら見取つて呉れよ、覺えて呉れよと云はぬばかりに、
 悠刀流の木刀を携へて道場へ立ち出で、門人方へお稽古を始められ
 ました、然るに悠左衛門がヤツと聲を掛けますと源助もヤツと云
 ひます、前に居た門人は振り返り、〇これはしたり、貴公は何じや
 源助、ヘ、御當家へ昨日から置いて頂きました中間の源助と申す者
 でございませう、お見識り置かれますやう、〇先生、これは甚い者が
 参りましたな、悠左、ハ、イヤその者は餘程武藝に熱心でお稽古を
 拜見したいと新様に申して居りますから、何卒門人方お氣にせずと
 見せて遣つて下され、〇ハ、ア左様でござるか、ヤア中間、此方へ
 並んで拜見するは可いが時々聲を發すな、源助、ヘ、最う私は武藝
 が好きなのでござりまして、ツイ……〇拜見するのは構はぬが喋

らすにヤツと見て居ねばならぬぞ源助長りました「そのうち國次が
 再び「ヤ、ヤツ」と聲を掛けますると同じく「ヤ、ヤツ」と聲を發
 てまする、門人は邪魔になつてなりませんが、この位も稽古の様に身を入れて我れ
 は訝しいやうでございませぬ、この位も稽古の様に身を入れて我れ
 知らず聲を掛ける程でなければその呼吸と云ふものはなかく覺
 られるものでございませぬ、又國次は先方に見取らすのでござい
 まするが、これは普通一様の者ではなかく出来ぬことで、一
 流の奥儀を極めたものでなければ見取れるものではございませぬ
 うで、新十郎と源助は毎日刻限違はず、お稽古が始まれば
 ば道場に來つて拜見をなし、凡そ三月ばかりは油断なくお稽古を拜
 見いたして居りましたが、大抵太刀の造ひやうは分りましたなれ
 手に執つて見れば最う一ツと云ふ呼吸の程が分りません、そこで
 木の樫の薪を以て参り、我が部屋に於て頻りとこれを削り、牛の生
 皮の鑛を嵌めて惣刀流の木劍を拵へました、これを以て一ツ試して
 見たいと思ひまして、これより若新平、中圓儀源助等を相手に、精

古に及ぶと云ふが抑も間違ひを惹起すの端緒でございませぬが、ナ
 〇イと御免を蒙りまして次回に伺ひませう。

第三回

一日源助は、新平、儀助が一生懸命に草鞋を造つて居るのを見まし
 て源助、オイ新平に儀助、兩人何だい源助、そんなに草鞋ばかりを造つて
 居て、何の位おの錢が儲かるんだ儀助、源助、馬鹿なことを云つて呉
 れるな、何の位おの錢が儲かるんだ儀助、源助、馬鹿なことを云つて呉
 を持つて出来るものぢやアない、マア新平なんどは力が強いから葉
 を打つのが早いゆゑ、夜業を掛ければ四十八文位おの儲けがある、
 油代を八文引くと全くの儲けが四十文、乃公ア新平の半分しか力が
 ないから葉を打つのに暇が入るからマア三十二文だ、そのうち八文
 の油代を引きやア乃公ア二十四文しか儲かれないやうな勘定で、な
 か、そんなことを何う勘定も勘定合で出来ぬものぢやアない、マ
 ア手を空して遊ばうより湯錢でも儲けやうと云ふ考へた源助、そんな

詰らぬことをするなら、何と隣りの長谷川さんのお屋敷が空いて居るから、裏の堀の堀口から隣りの廣場へ出て行つて、彼處で何うだりて来て一ツ稽古を以て受けるから、手前等は道場へ行つて空槍を借りて来て一ツ稽古をしたら何うだ新平、そんな事をしては向は錢にやアならぬではないか源助、イヤ然うでない、乃公が一突貴様等に突かればたら百文遣る、乃公が貴様を殿つたら一打が十六文だ新平なる程一遍突いたら百文なら六遍殿られて無出入になる勘定か、そりやア源助、汝ア毎日お稽古を見て居るが宅の旦那に手を取つて教へて貰うたと云ふ譯ぢやアなし、して見ると六遍に二遍は突くと源助、六遍に二遍突いて見る、二百文から百文引いても百文は儲かる源助、を打つて草鞋を造るより餘程割が可からう新平、成程、そんなら源助、造るとしやう、お前は小紅屋と云ふ後見があるから工面も可からう源助、なアに、小紅屋くらゐのことには當てにはして居ぬ、乃公も江戸からこの中國まで来るのに一文なしぢやア出て来られないから、多少の金子は持つて来た、一ツ遣るなら錢を取寄せるが何うだ新平、そ

れが眞實なら乃公ア一ツ遣らう源助よし、そんなら乃公ア錢を取寄せるから」とそこで下賤の者を迷はすには金錢を重ねて見せねば何うしても行きませんから、小紅屋に吩咐けまして金子を取替へさせ百五十貫ばかりの錢を中間部屋へ積みました、ヤアこれを見ると云ふと中から以下の者は金錢に心の迷ふと云ふのは例で、こりやア草鞋を造つて居るより、早く源助と勝負をしてあの錢を此方へ巻上げて遣らうと云ふ考へになりましてから、道場の空槍のツボ付の太さうな柄のやつを持つて参りました、長谷川の廣場へ出て仕合を始めて出ししました新平、ヤア源助、遣るぞ源助、汝ア錢を見ると大層急ぎ出したな新平、知れたこと云へ、錢儲けと死病に粗略があるものか源助、マア新平待て、乃公が先に行く新平、イヤ乃公が先だ」と互に争うて居りましたが、聽て新平は槍を持つて源助に對ひました新平、ヤア源助、突くぞ源助、マア待て、それで勝負をするのも可いが極りから先にして置かねばならぬ新平なる程源助、貴様に突かれた方は筆の尻で〇を押す、乃公の殿つた方は墨で以て縦に棒を引くと新平よし

解つた、ヤア行くぞ、源助併し新平、そんな槍の構へやうをするよ云ふことがあるものか、槍は半身と云つて左の手では只見當の狂はぬやうに槍の柄を握るだけのもの、右の薄片手で練り戻し練り戻すと云ふことをするのだ、然うして左眼と云つて左の眼で見當を着けて、身体を板の如くにして槍に我が体を隠して了ふのが、これが槍術の身構と云ふものだ、新平源助、難しいことを云ふナ、何うして、も構はぬ、突きさへすりやア百文になるのだ、源助よし、そんなら来い、新平行くぞ、源助「言ひながら百文になつたかど突き込んで参りまするを源助未だ」と言ひながらカチリと槍の柄を拂ひまするのだ、彼方に躲し此方へ開き、暫くの間は源助、試みをして居りましたが、なアにこんな者を打つのは猫を打つより手輕うはございませすけれども、源助は只亂槍巻取りと云ふのを試して居るのでございませす、正敷獨りでは遣れませんから、腕に覺ぬのないものでも人間に槍を持たして戦して見たら大抵その呼吸も分るものでござい

ます、そこで源助は試して居る、此方は錢儲けに掛つて一生懸命でございませす、なかく、思ふやうには突かせません、そこで新平は玉の汗を發いて新平こりやア源助、なかく、何うも骨が折れるな、源助、そこを我慢して遣つて来い、夜業へ掛けて四十八文のが一過突けば九十六文になるのだ、新平なる程そこもあるな、ど一生懸命に突いて来ませするを、餘り先方を懲りさせませると明くる日から稽古をしませんから、そこで源助はこゝぞと思ふ所で勢みを抜いてボンと一ツ足を突かせて遣りませした、源助「旨いワ新平、乃公が負けた新平、ハア……」と一突きで太息して居ります、新平源助、なかく、百文取るには並や大抵のことぢやアないな、源助然うさ、貴様の言ふ通り錢儲けと死病には粗略はないのだ、新平なる程それもある、然うだ、儀助、サア、新平、退け、乃公が行く新平、マ儀助待て、乃公が最う一過行つて最う百文取ると四日分になるに依つて、疲勞れ次手に最う一過行かう儀助、退けと云ふのに新平、馬鹿を云ふな、お前が錢儲けをしたいの、公が錢儲けをしたいのも心は同じことだ、遣らせいと再び對

したるがなかく、今度は最う續きませぬ、眼が見ぬやうになつて居ますが、儲けたいと云ふ一心から突込んで参りまするを、再び源助はボン／＼と右に拂ひ左に懸して居りまするうち、入身になつてヤツと云ひさま忽ち亂槍巻取りに掛けましたから、小手が痺れてガカリと槍を落しました、所を隙さす飛び込んで腕首を一ツ、甚くも打ちませんがビヤリ打殿はせました源助、ア新平、十六文取つたぞ、新平、失敗つた、先なりで止せば九十六文儲かつて居たものを、強情張つて十六文減らされた、ア儀助行くが可い、そこで儀助は槍を持つて對ひまする、同じく玉の汗を發いて突込んで参るを、よく源助は受け流し、疲勞れた時分に一ツ突かして遣りました、儀助は百文になつたど、源助はビヤリ／＼と續けて二ツ小手を殿はした、するどこの度は源助はビヤリ／＼と續けて二ツ小手を殿はしました、源助、儀助、汝ア二ツ打つたぞ、聲が掛らなんだから三十二文だぞ、儀助、新平、汝ア十六文で事が済んだが乃公ア三十二文取られて六十四文になつて了つた、源助、又明日のことだ、と、その儘別れと云ふ

ことになりました、それからと云ふものは斯う云ふ盃梅に毎日少々の銭が貰へますから、これにて兩人も止りず毎日相手になつて居りました、所が屋敷の方では下女が朝中間に用事を吩咐けやうとする、と、隣の長谷川の廣場に「お部屋に衆く」と呼びますけれども返事がございませぬから、ハテ不思議だと思ひ彼方を探しますると、すすから、眼いて見ると夢中になつて稽古をして居ります、下女は、この体を見て早速臺所へ駆け付けて参り、下女、旦那様へ申上げます、稽古をして居ります、下女、中間衆三人は長谷川さんの廣場へ行つて槍を以て稽古をして居ります、何時御覽なさいました、源助が太刀を持つて新平と儀助が槍を持つて遣つて居るのであらう、下女、能う尋公御承知でございませぬ、何時御覽なさいました、源助が太刀を持つて新平と儀助が槍を持つて遣つて居るのであらう、下女、能う尋公見よ、大抵其邊のことであらうと思はれる、捨て置け、考へて術の真似をするのはこりやア賞めて遣らねばならぬことぢや、それ

を貴様等が彼是れ云ふ道理はない、以來は朝先方で以て用事を問ひ
 に来た時に用事を吩咐けなれば、貴様の方で勝手に用事を致せ
 他は事なら答めもするが、武術の稽古をして居るとあれば何うも叱
 諄には行かぬ、用事は朝問ひに来て居つたではないか、下女、ハイ、餘
 り早うございませしたので思ひ出すことが出来ませなんだの……
 惣左、それは貴様の粗相だわい、そこで下女は膨面をして仕方なくそ
 のまゝ勝手に用事を致しました、この事が中間部屋に聞かすと
 新平、源助、源助、何だ、新平、今朝下女よりこれ、小言を旦那に告げ居
 つたが、何うやら反對に叱られたやうな蓋梅だから、明の朝からは
 例もより早く起きて三人が交々用事を聞きに行つて、思ひだして吩
 附けねば先方の粗相ゆゑ、一ツ此方から催促して遣らうぢやないか
 源助、なる程それも面白い、然う云ふことなら催促をして遣らう、大抵
 からうと云ふので三人は翌日から朝早くから起き出して、大抵
 寅刻時分から道場の掃除に掛り、屋敷中を掃除して了ひますと、
 三人は交々、に用事を尋ねに参りまするが、然う取掛け尋ねられ

ると用がありまして思ひ出せるものではございませぬ、一時はか
 りは三人が交々、入交り、御用はございませぬ、新平でございませぬ、
 ございませぬ、只今は未だ御用はございませぬ、するど左様でござい
 ら下女、ハイ、只今は未だ御用はございませぬ、するど左様でござい
 ますかと云つて引き退ります、その代り夜が明けると長谷川の廣
 場へ出まして稽古を始めますから、下女は泣き出し、何處の藩であ
 左衛門は腹の中で笑を含み、「あの源助は働きの者、併し何處の藩であ
 らうか、合點の行かぬ者だ、餘程身分のある者には相違ないが、今
 一通りでは云ふまい、何うか探りたいもの、朝夕これに心を着けて
 お在でなりました、そのうち早や今日と過ぎ明日と暮れ、もの
 二年三年は夢のうちに過ぎました、大抵源助も最う腹には怒刀流の
 極意と云ふことも概略考へは着きましてございませぬ、なれども何
 うも新平、儀助ぐらゐな者を相手にして居ては到底本當のことは分
 らぬ、一流の奥義を極めた者を相手にして居ては到底本當のことは分
 のは分らぬと考へて居ります、然るに秋の中旬のことでございま

新平、儀助の兩人は稽古槍を持つて行つて加勢して斑犬を突き倒し
 ました、そこで斑犬は逃げ出し、屋敷のうらへ飛び込んで吠き出し
 ましたので、隣りの門人は怖がり、汝れ小癩の中間共、動もすると
 百文流と云ふ詰らぬ真似をなし、人間には對はずして畜生を突き倒
 すとは不埒な所爲、イテ我々が隣りの中間共に一泡吹かして呉れん
 ど、これ亦稽古槍を携へて飛び出し、當るを幸ひ突き倒して參りま
 するを、負けず劣らず新平、儀助の兩人は、門人を相手に無暗滅法
 界に突き捲りまする、なる程兩人は錢が欲しいと思つて慾に眼が眩
 んで稽古をしたのでございませうから、突くだけは二三年の間一生懸
 命に練まつて居りますから、隣りの倉橋の門人も一突き突かれま
 ると身体が痺れるばかり、その代り身を鍛へすことも練り戻すことも
 知りませんから、必死となつて隣りの門人と闘つて居ります、こ
 の体を見た源助は忽ち部屋へ取つて返し、惣刀流の種子丸を携へ來
 り源助、ヤア、新平、儀助、源助、參つて加勢をするぞ、新平、オ、百文
 流のお師匠様か、忝い」と兩人は限りなく悦びまして一心不乱に飛び

した、源助は主人の用事で一里もある處へ用途しに參り、用事を済
 して屋敷へ戻り、夕飯を喫はんとして部屋へ這入りまする、新平、
 儀助の兩名は見ゆません、何處へ行つたであらうかと思ひながら
 飯を喫べに掛つて居ります、突然源助の袂を唾へて頻りに引きま
 すから、源助、オ、白や、何うした、然う此方の袂を唾へて引いて呉れ
 ても飯を喫はねば何うもならん」と云ひましても畜生のことゆゑ無理に
 啞へて引張りまする、源助、牛に引かれて善光寺參詣と云ふことはある
 が、犬に引かれて何處まで行くのぢや」と源助は至つて犬を可愛が
 りますから、引かるといふ處へ乃公を伴つて出居るな、何うするのだ
 ます、源助、こりやア妙な處へ乃公を伴つて出居るな、何うするのだ
 とヒヨイと見ると、隣り屋敷の槍衛指南番、倉橋段右衛門の門前の
 處で、一生懸命儀助、新平の兩人に隣りの門人と稽古槍を以て闘う
 て居ります、これは何故とございませうと、國次の飼犬の白犬と
 倉橋の飼犬の斑犬とが喧嘩をして居ましたのでございませう、所が

込みます、源助は笑ひながら忽ち隣りの門人を相手に、是ど儀槍
 巻取りを試る場所なりと縦横無事に暴れ捲れば、看るくうちに隣
 りの門人の稽古槍を片端から巻き落し、五名八名抵抗ひましたなれ
 ど源助には遠く及びませんから、槍を捨てたなりで屋敷へ逃げ込ん
 で了ひました。新平源助、有難い、貴様が来て呉れたので首尾好く、
 此方の勝利になつた、この稽古槍は何うしやう源助分捕功名は戦ひ
 の例ひ、擔げて行け、兩人合點だ、と隣りの門人の捨て、行つた槍を
 引奪へて欣々然として中間部屋へ歸りました、面を膨らした隣りの
 門人、さても思々しい馬鹿く、しい始末、こんな他愛もないことは
 ない、非常に憤つて居りましたが如何とも致方のなきこと、それは
 扱て措きまして此方は國次の女中でございませぬ、中間部屋へ來つ
 て「お部屋の人衆く」と呼びますから新平へエ、何ぞ御用でございま
 すか下女源助さん、新平さんも儀助さんも三人ながら一寸旦那が來
 いと仰しやいます、新平へエ、畏りました、源助、源助、オイ新平、サア
 信譽をしたから旦那に叱られるのだらう源助、マア何でも構はぬ、此

られたらそれまでのことだ、そこで三人は打連立つて探手をしなが
 ら遣つて参りました新平へエ、三名の者でございませぬ、何ぞ御用で
 ……」すると奥方の松枝は「オ、部屋の人衆かや、庭前へ廻るが
 可からう新平へエ……源助、何うもこりやア何だか怪しいぞ、若や
 お手討になるてはな、これはあるまいか源助、イヤ、そんな事かも知れ
 ぬ、新平、こりやア甚いことになつて來たな、何うしやう源助、仕方がな
 いわい、正敷旦那に限つてお手討になさると云ふやうなことはない
 だらうから、兎も角も行くが可い新平、それも然うだ、と恐るく、探
 手をしながら庭前へ廻りました、すると惣左衛門は「コ、笑ひな
 がら、貴益を引寄せて惣左、コリヤ三名の者、新平ハッ、何事でございま
 す惣左、何事は今日犬の喧嘩の腰押より意外の闘ひが始まつたが、妙
 な流義があるのウ新平へエ、誠に恐れ入ります、惣左、貴様の流義は
 百文流と云ふのぢやな、往古からなき所の流義を相定め、三百文寄
 つての今日の闘ひ、コリヤ新平、貴様は何うしたことでぢや、首筋を
 突かれたな、又儀助は向脛を突かれ、他愛もない目に遭つたでないか

新平「旦那様御覽なされませしたか惣左門前で見居たわい新平「それなれば旦那、何故御加勢下されません惣左、他愛もないことを申すな、此方が加勢が出来るか、貴様等は稽古を一生懸命とせぬからあんな處を突かれるのだ、既に危い處へ源助が出て行つて加勢をして遣つたことであるが、併し源助、源助、ハッ惣左、朋輩の誼みに依つて危きを助けた段は神妙の至りである、然りながら中間の分際として斯様なことの出來たと云ふも、全く其方が百文流と云ふ一流を編み出したるゆゑ斯様な間違ひが出来たのである、今後は細令聊かのことがあつても其方の落度として其方に暇を取らずぞ源助、ハイ、委細承知仕りましてござります惣左、ア、新平、儀助、兩人「へ、エ……惣左、其方共は身休が痛んで居るから今日から以後百日の間は後々部屋にて養生いたせ、別に治療は他の者に手術を受けずとも源助に治療して貰へ、大儀ながら源助、其方は療治をして遣つて呉れ源助、心得ましてござります惣左、暫しの間は貴様一人にて三人の役を勤めねばならぬからナと忙しいが、百文流の指南番ゆゑその罪は免れぬ源助、イヤ、何うも

致方はございません惣左、それでは一人前一兩、一歩づゝ取らせる、源助は兩人の治療に就ての世話賃として遣はす、又兩人は其金を膏藥代と致せ三人有難う存じます」そこで三人は金子を頂いて部屋へ退りました新平「ア源助、源助、何ぢやい新平「何うも馬鹿くしい話した何處も痛くもないのに療治をして貰へど云ふのは何う云ふ譯だ」源助はこれを開いてハ、ハ、と笑ひ出しました源助、貴様等はそれが未だ分らぬ位なだから痛い目に遭ふのだ新平「けれども何處も痛くはない源助、それではこれから痛い處を知らして遣る」と云ひながら手桶に水を一杯汲んで柄杓を添へて持つて参り源助「アこの水を飲んで見ろ新平「馬鹿なことを言つて呉れるな源助、手桶に汲んである水が飲めないで何うなるものか源助、そんなら飲んで見ろ」そこで兩人は柄杓を執つて水を汲んで飲まうと致しましたが、七分通り持ち上げると胸の邊りまで手を上げて最うそれから首を突き出すことも出来ぬば手を上げることも出来ず奇妙奇烈な顔をして居ります新平「オヤッ、源助、奴妙なことさせやアがるぞ、身体が痺れて骨が

るから運らぬか新平、運るは構はないが叱られるはすまいか源助、なアに
 叱られるものか、武士と云ふものはそんな譯の分らないものぢやア
 ない、百日暇を遣ると云へば百日の間は此方の身体、早く癒つたの
 は手前等の幸ひ、間があつたら錢儲けた、一番連れ新平、それぢやア
 遣らう、そこで二人は相變らず通り出しましてございませう、妙な
 もので一通痛い目に遭ふと藝道は目切り上達して来まして、儀助も
 新平も可なり八合に槍の構方が出来て参りました、そのうち新平は
 源助に劍術の一ツも教へて貰ひまして新平、源助、汝ア武士だ、源助
 馬鹿を言へ、武士がこんな馬鹿な奉公が出来るか、乃公ア劍術が
 好きなんだ、新平、何だか知らぬが貴様は餘程風の變つた男だ、と驚き
 ました、が、慙くて源助は毎日二人を相手に稽古をして居りました、が
 これより源助の身に振り掛る災難が、却てその身の幸ひとなり、當
 地出立のお話しに引き移ります。

第四回

扱て源助はその年も早や暮れ行きて翌年の春を迎へました、空飛
 る雁を眺め、「ア、く、我れ國許を出しより、既に足掛け五年はか
 り、國も遠けき中國の、この岩國の錦帯町、定めて父上母様には、
 我が歸國を待ち詫かしう思はるゝであらう、それに就けても我が君
 にも應ぞ待ち久しう思召しつらん、雁の翼があるならば、一度飛ん
 でこの事を報せたいもの、その事ばかりを思ひ詰り、「秋に來て春
 歸り行く雁金の、何の情けに音をやなくらん」と京の君の脈をれし
 も道理、雁の聲音を打聞きて最と懐しさに東の空のみを振り向いて
 居りました、が、イヤ、然うでない、今暫くの辛抱をして何か幸ひ
 の時機を見て眼を腫はんとその春も過ぎ、夏の初めの卯月の空には
 なりました、が、屋敷の裏の庭屋敷倉橋と當國次との取合の婿が取れ
 ましたので、この頃普請をして居りますから竹柵をして只往來をば
 止めてあるばかりのこと、ございませう、その際、草を刈つて
 てございませう、今日しも源助は錢を以て頼りにその草を刈つて
 居ります、處へお乳母のお覺と云へるが、惣左衛門の悴惣之助と

田宮新十郎

云ふ當年九歳になる坊の手を引いて送つて参りまして、草を茹つて居る源助の背中を膝頭でポンと突きかゝ源助さん、何をしておいでだに、後方振り向いて源助は「イロウお覺せんか、何をしてお居るつて眼で見分らないければ仕方がない、鎌を以て草を茹つて居れば、草茹をして居るのぢやアないかい、かく、ホソにマアそりやア然うに違ひないが、そのやうな情ない理屈を言はずと、お前と云ふ人は無情い、妾が何度となくあゝして書いて送れど、只の一度も返事をして呉れず、男心と云ふものは然うまを情ないものかいなア源助こりやア一番恐れ入つた、乃公ア古今の色男、然うお前から直接に口説かへて見なさい、乃公ぢやどて木竹の身体ぢやなし、お膝でマア人聞の五倫五体はこの通り何不自由なく生み附けて貰ひ、女を厭ふと云ふ道理はないが、若や御奉公中に訝しな間違ひが出来て、それを爲めにお暇を出される日にやア、お前も耻なら乃公も耻、再び御主人のお屋敷へ對けて出入をすることを出来ぬやうになるは必定、あの

田宮新十郎

小紅屋の爲助さんを見なさい、神妙しうこのお屋敷で奉公して勤め方が好かつたゆゑ、旦那のお世話で以て小紅屋の宅へ養子に遣つて貰ひ、今では結構な宿屋の主人、盆と暮には相違なく禮にも来ればお上で以て酒の一杯も頂いて、何事も小紅屋くとお用およき今日のお身の、上、それもあるの人の勤め方が好かつたゆゑぢや、お前もこれ來年か再來年には坊様の手も離れりやア、立派に上からお暇を貰ひ、その上、多少の御褒美を頂き、然うして乃公と夫婦になれば、天下に於けるの夫婦ゆゑ、長くお屋敷へお出入の出来ると云ふもの、奉公中に野しなことをして、千日に刺つた萱を一日と云ふやうな馬鹿なことをがあらば、新平や儀助にも笑はれて、第一御主人へも濟まず、旁々するから暫くの辛抱ぢや、我慢をする方が可からうかゝ源助さんそりやア然うに違ひはないけれども、妾もこれを想ひ込んだことも濟まず、一度や二度の身上でなし、二十三歳にも四にもなり、何となう心よ、返事をして呉れ、源助、ア其點ぢや、戀と云ふものはな、一度

すから、ハッとはかりに打驚き、段右衛門は奇々妙々な面相で怒りの眼を見開いて、段右衛門の代りに素首刺ね、吉川侯へ申講をせねば主家へ對して相濟まぬ、あの是な悪戯者奴、惣之、アノ一小父さん御登、よ、と言ふ聲に驚きましたは、お乳母のお覺、源助も此は何事と垣根より覗いて見れば、この有様、源助、コレお覺せん、乃公は俯何いて一生懸命に草薙をして居るのに、お前は坊さまを手放して斯様なことが出来た、と言ひつゝ、源助は鎌を腰に差して垣の圓より潜り込み、縁の處へ進み寄り、兩手を支へ、源助、これは倉橋の旦那様、飛んでもないことが出来ました、何とも申講はございませぬ、何卒御勘辨下さいませ、と、一心不亂に草薙を致して居りまして、毫しも心着きませぬ、でございませぬ、段右衛門、汝は隣りの源助と云ふ下司野郎だ、平素百文流など、喧しう長谷川の廣場でヒヤリパチリと音をさせ、中間の分際、似合しからぬ不埒なことを致し、餘のみな

らす草薙をして居ればとて、この小忤が悪戯をするに心着かねと云ふ道理はあるまい、汝が承知でさせ居つたのであらう、何うしても勘辨は相成らぬ、源助、でございませうなれど、心着きませぬ、なんだは私のみ失、只管御勘辨の程を願上げ奉ります、段右衛門、何うあつても勘辨ならぬ、源助、ヘエ、それぢやア何う致しましたら御勘辨下さいませ、段右衛門、強て勘辨して貰ひたくば、貴様の主人國次惣左衛門、此方の屋敷へ參つて七重の裏を八重に折り、その上、説言をすれば趣意に依つては免しも致さうが、武士に取つては古今には如何な免さぬ、源助、七重の裏と仰しやります、武士に取つては古今には如何な免さぬ、源助、七重に折り、穿いて歩くは武士の耻辱、二百六十餘大名、普ねく諸侯のその中で、八重袴と云ふものは、この日本のうちにも二家より他ない、と承る、又八重袴は武士が穿くべきものでない、殊に主人惣左衛門様は吉川家の藩中にて惣身、惣刀流と云ふ一流を編み出し、五百石の縁さへ頂かれ居るお身分、今更中指突いてお説言の出来さうな筈もござりませぬ、若しその事が出来ずば、貴下は何う遊ばします

段右その上はこの小倅奴の首を打落し、牡丹の代りに吉川侯へ差出し、段右衛門申開きを致す心底であるわい」源助は「コソマリと笑を
 含み、聞きしに違はぬ段右衛門と云ふ奴は、傍若無人の大馬鹿者、併し槍術は一人前、人に師と云はるゝこの者なれば、これ程の者を
 相手にして日頃見取りし惣刀流の亂槍巻取りを掛けて見れば、眞の呼吸も相分るであらうと、不國念頭に浮みました、何うで暇の出る
 身の上、又買はねばならぬ此方、是ぞ武徳の極意を試すにはこの上もなき設けぬ幸ひ、オ、然うだと心中に覺悟を極めましたから、大
 口開いて笑ひながら源助こりやア何うも倉橋先生の仰せども覺はせん、能く物を考へて御覽遊ばせ、吉川監物經倫侯と仰せらるゝ君
 は毛利三家の御一家にして、なかく大したお家柄、縦令岩國の陣屋にお在であるとも、往古を思へば堂々たる阿保親王以來連綿たる
 舊家の分家、牡丹ぐらゐのその代りに、小兒たりども人間の生命を取つてそれで御承知あるやうな、そんな他愛もなき君ではござりませ
 ない、縦令貴下の庭前に植ゑ付けたる牡丹が日本に一本しかなく

ればとて、夏の初めを待つて咲き揃う牡丹如きと、人間の生命とが同様になるべきものでござりませぬ、吉川監物侯も豈も首級を見てお悦びはこれありませぬ、それとも是非首級を持つて出なければ言譯がならぬと云ふやうな無休なことを仰られるなら、モシ旦那様吹けば飛ぶやうな一文奴の源助でも、そんな他愛もないことは能う聞いては居りませぬ、又貴下は三百石の槍術家、手前の主人は五百石、世に比類なき武術の先生、その先生が説言をするに、七裏袴を八裏に折ると云ふやうな、そんな間拔けた馬鹿くしいことが出来るものか出来ぬものか考へて御覽なされませ」この時段右衛門はハッタと睨付け段右、汝れ下司下郎の分際として我れに對して無禮の過言、下郎なりとて用捨はせぬぞ」と夢中になつて張臂をなし、烈火の如く憤りました、源助は鎌を取つて柄を逆手に持ち、鎌の刃にきり身、刀流の木刀はどございませぬから、彼れを怒らせてこの柄を以て一ツ試みて遣らうと存じましたから、それとなくして心膽を固め、

十分用意を致しませした、所が惣之助は、段右衛門が夢中になつて怒つて居りませすから自然と小手が緩んで來ましたので臨の下から抜け出し、ッロ／＼縁を下り出しました、そこでお乳母のお覺は垣の間から手を出して惣之助を招きませすから、そこで子供のお覺の側へ参り後方を振り向き逃げ出して、垣の間より潜り込んでお覺の側へ参りませした、お覺は漸う惣之助を庇保うて了ひ、惚れ込んで居る源助のこどゆゑ、粗相はないか間違ひは出來はせぬかと一心不乱に見て居りませすると、源助は先方を怒らせやうと云ふ位ゐの了簡でございますから、自然言葉も暴くなりませした、段右衛門は惣之助の逃げて了うたのも知らずして益々怒り段右衛門は左様申せばこの小倅を眞兩断に……と敦固暴くヒヨイと眺めて見ますれば、何時の間にか惣之助は居なくなつて居りませす、段右衛門は汝れ下司下郎、何時の間にか惣之助は出た汝れのやうな馬鹿者にでも、此方に租相があれこそ坊様を何處かへて説言をなし、手を支へて説つて居るに、汝れこそ坊様を何處

へ遣つた、此方が知るこどか段右衛門返す／＼も憎むべき下司下郎のその過言、最う聞捨てには相成らぬ、この上は槍玉に上げて呉れん源助ハ、猪牙才なるその一言、一文奴の源助と侮つて、不覺を取るな段右衛門、段右衛門益々憎き下司下郎、イデこの上は日頃の意恨汝れの爲めに門人を多少減らされ、國次へ肩を代へられたる腹立たしさ、思ひ知らして呉れんす」と、此方の長押に掛けたる槍を取るより早く一振り振つてボンとばかりに槍鞘を拂ひ、勢ひ込んで突き掛る槍尖を、右左に体を躲けて打拂ふ手練の早業古今の腕並、一文奴と思ひの外、太刀を取らせれば比類なき古今無双の田宮の一子、何條以て及ぶべき、鎧取らせれば比類なき古今無双の田宮の一子、何頭めく處を、して遣つたりと飛び込む源助、鎌の柄を取つて倉橋の鮮血眼に入りければ思ふやうには働さならず、段右衛門へ段蔵の門人方は居らざるや」と大音聲に呼はれば、夢中になつて道場にて團圓の勝負に心を寄せて居りませしたる舍弟段蔵を首め四五の門人、何事

助が来たぞ、ヤア百文になつたか百文になつたか、と垣の間から突
 き出し、門人は顔、鼻の厭ひなく、胸先、小手と當り放題に突き倒され
 りの門人は顔、鼻の厭ひなく、胸先、小手と當り放題に突き倒され
 近寄ることも相成らず、扱ては隣りの中間共、忘々しい奴とは思へ
 ど、何分突きには妙を得て居る二人の槍先、なかく、手許へは近
 寄れません、折から源助は呼吸を見澄し、ヤアと一聲手練の早業、
 難なく垣根を飛び越して、己が屋敷へ這入り、門人は引取つて、如
 る譯にも相成らず、無念ながら段藏首め一同の門人は引取つて、如
 何はせんぞ、致し居ります、然りながら原因はと云へば牡丹の花か
 ら起つたこと、斯様なことを上へ願ひ出し、隣りへ對けての復讐も
 相成らず、只この事を上へ願ひ出し、隣りへ對けての復讐も
 はこの事を届け出でました、が、重役の方々は大きにお笑ひになりま
 したのみにて、別段何等の沙汰もございませぬから、遂にそのま
 寝泣入りのなりませした、それを扱て措き此方は源助「新平、儀助、
 能う加勢をして呉れた、既に命も危い處を、お前等二人が来て呉れ

やらんと追取刀で駆け来れば思ひも寄らぬこの有様、段藏、日頃意恨の
 一文、汝は隣りの源助か、此は兄者人何故に………段右、オ、段藏、
 この源助が、この通り此方の頭へ傷を附け居つた段藏、ヤア憎き奴の
 斬り込むを、右に拂ひ左に懸し、將又足にて蹴倒せど、源助望んで
 も、自由ならず、五人七人を相手に闘ふことでございませぬから、その働
 きも自由ならず、今は進退爰に谷まつて、既に危険に見わたる折か
 ら、お乳母のお覺は此は一大事、源助、源助、源助、源助、源助、源助、
 ずと、そのまゝ坊を抱へて飛ぶが如くに駆け歸り、かく、新平、源助、
 助、源助、源助、源助、源助、源助、源助、源助、源助、源助、源助、
 早う助けて進げてお呉れ、と泣聲揚げて呼ばれば、新平、百文流のお師
 匠様、源助の身に事あつては、朋輩の瞳みが出来ぬ、儀助、儀助、
 、合點だ、と日頃手馴れし、今や源助は柵の垣を後方に取つて
 つて参り、垣の傍へ来て見れば、今や源助は柵の垣を後方に取つて
 是を先途と一生懸命、縦横無盡に働く有様、新平、ヤア源助、新平、儀

たので首尾好く命は助かつた新平源助、話しを聞いて見りやア氣の
 毒だ、あの隣りの門入違ど、乃公等が先達つて間違ひを起したと
 に就き、あの段右衛門は犬の喧嘩を遺恨に思ひ、それと言はずに復
 縁、けれどもマア怪我がなくつて可かつたなア源助、イヤ實に危い處
 を免れてこんな嬉しういことではない、折から女中は遣つて参り下女源
 助とん源助オ、又呼びにござつたぞ、イヤ索より覺悟の上だ、一寸
 行つて来るから……新平源助、マア併し何う云ふことかは知らぬけ
 れども、及ばすながら乃公等も俱々詫つて宜くば詫るから……源助、
 イヤ、心配して呉れるな、どそのまゝ源助は出て参りました源助、
 エ奥様……と臺所で揉手をしながら頭を下げますと、松枝オ、源助
 かね、旦那様は奥の離座敷においでなさるから……源助でござりま
 するか御免下さいまし、と奥の離座敷へ参りますと、實益を引寄
 せて煙草を燻らせながら惣左衛門「コリヤ源助、源助へ……源左、今
 日は仲惣之助の悪戯より、其方も非常の迷惑、何う云ふことになら
 うかと實に此方も案じて居つたが、幸ひ其方が罷り越して呉れたの

で、惣之助の身には別條なく實に満足の至りである、然りながらこ
 れにて歸りの倉橋兄弟は應を立腹いたすであらう、就ては豫て汝に
 申した通り、其方は今日限り暇を遣はすから左様心得よ、尤もこの
 事は豫て汝に申し置いたる通りであるから承知であらうのウ源助、ハ
 ッ、心得て居ります、今日空しく別れは致すが、一ツの願ひを聞いては呉れま
 も問はず、今日空しく別れは致すが、一ツの願ひを聞いては呉れま
 いか源助、ハッ何のやうなことをかは存じませんが、身に適ひましたこ
 どなれば承りませう惣左、其は餘の儀にあらず、其方も知る通り、此
 方が娘の君も早や年頃になつて居るが、何れ誰れにか嫁さねばなら
 ぬと思ふのである、併し當藩中にはこれと云ふ人もなく縁の取組も
 ならざることをゆゑ、其許本國へ立歸るなれば、何卒身が娘をば妻と
 して迎へ取つて呉れることはなるまいか源助、ハッ恐れ入りまして
 ござりまする、身不肖なる手前のやうなる者にては御息女を下し置
 かれ申することならば、如何にも歸るべき處へ歸つた上、時節を待
 つて申受けることとでござりまする惣左、ハ、イヤそれでは手前も満足

身の修まりの着きますれば屹度迎へ取りませう惣左頼むぞ言ひつ
 の人十四歳より三十一歳までに斯る流義を編み出す位わの仁でござ
 いますから凡人ではございせん、蟲が知らすか名残を借しまれ、
 又源助も心ありげな國次の言葉に、思はず涙に暮れましたが、遂に
 惜しき袂を別つことになり、是に於て奥様にも挨拶をしてお暇乞ひ
 を申し、聽て部屋へ引取りました新平源助、何うなつた源助イヤ最
 う仕方がない、到底お暇になつて了つた新平、オヤ、そりやア氣の
 毒ぢやなア源助こりやア豫て汝等も知る通り、今後間違ひのあつた
 時は他の者には構はぬが、貴様一人を以てその罪を糺すと云ふこと
 を言はれて居るから、乃公にお暇出るのは是非がないわい新平、けれ
 ども考へて見る源助、今日の騒動と云ふものは畢竟言へば坊様の悪
 戯から出来たので、私勝手のお噂ではないぢやアないか源助、サアそ
 れは然うであるけれど、詰り隣りの段右衛門を打つて乃公が傷を
 附けたばかりに斯う云ふことになつて見りやア、矢張り乃公にお暇

いたした、併し源助、其方も十分望みが達せられて本望であらうの
 ウ源助エ、ツ……惣左、惣左衛門が心の裡の切なさを察して呉りやれ
 主家のことを臣の身として非を擧げるにはあらねども、吉川侯の小
 量より、この事を他國へ派すなど、禁められた惣左刀流、併しその方
 に斯く見取られて、此方の望みも十分足りたことである源助ハ、ツ
 段々どの御厚志忝う存じます、惣左、何程の里程離れし地かは知らね
 ど、路用は何うぢや源助、その儀は聊か用意もござりませすれば惣左、
 萬事抜目のなき其方、何處へなりと出立いたせ源助ハ、ツ忝う
 存じます、と起たうと致す足下に、紫縮緬の服紗に包みし一卷、
 源助は不圖打眺め源助、これは……惣左、何ぢや源助、斯様な品物でござ
 ります、惣左ハ、ア手前の足下に左様なものゝありしは、大方天よ
 り授かつたものでがなあらう、此方には覺わのないもの、汝の足下
 に轉がりありしとあるからには汝に授かる品物ならん、持ち行け、
 源助ハ、ツ返す、御厚志の段……惣左、何にも言ふな、娘は其方
 の家内と思つて呉れよ源助ハ、ツ、委細承知仕りました、立歸つて

の出るのは當然の話して仕方がない、小紅屋へ立歸るとしやう、儀助、
 けれども新平、一寸見ろ、源助もなか／＼控らぬ奴だ、新平、何で……
 儀助、何でつて暫く奉公してお暇が出るとなりやア、何など彼など込
 遣たものど見わたる懐中から紫の縮緬の服紗が見えて居るわ、源助、
 これ儀助、馬鹿なことを云つて呉れるな、暇が出たからつて主人の
 物を取るやうな乃公ぢやアないわい、これは旦那様に儀別に貰うて
 来たのだ、儀助、オ、然うか、それは甚いものを貰うて来たな、新平、併し
 汝アこれから小紅屋へ引取るのか、源助、マア小紅屋へ引取るより仕方
 はない、新平、そんなら待て、乃公も別れが惜しいゆゑ、切て小紅屋ま
 で送らうから、一寸奥様に斷つて来やう、源助、それは親切忝い、新平、マ
 イ儀助、一途に來い、これから二人は臺所へ參り、新平、與様、何うや
 ら、源助もお暇が出たさうでございませう、五年以來兄弟同様に致しま
 した、源助、粗相とは云ひでう横着でしたことではございませう、外
 に不調法のあると云ふでもなく、詰りお家のことだから起つた出来事
 このまゝ源助をオ、然うか勝手に歸ねと云つて別れませうのも何とや

ら名残が惜しいやうに思ひますから、小紅屋まで送つて行つて遣ら
 うと思ひますが、何うでございませう、松枝、それはお前方の親切、好
 いやうに送つて遣つて給へ、新平、一寸左様ならお暇を願ひます、松枝、サ
 ア、緩容と行つてお出で、旦那様へは妾から好いやうに言つて置
 きました、そこで新平、儀助は暇を貰うて、源助を小紅屋へ送つて來
 ました、源助は先に立つて、源助、爲助、爲助、ヤアこれは源助様でござい
 ますか、この挨拶を聞いて、新平、儀助の兩人は妙な顔をしながら袖
 引合つて小鮮になり、新平、ウ儀助、乃公の言つた通りぢやらう、あ
 の源助は普通の一文奴ぢやアないぞ、武士に相違ないと云ふのは此
 點ぢや、宿の亭主は女房か竹の縁者と云つて世話をした、源助が
 爲助と呼稱にする筈はない、こりやア多分身分のある人に違ひない
 わい、儀助、イヤ乃公も然う思ふ、然もなければ何程道場で見て居たか
 らどて手を取らずに劍術が覺ゆるものぢやないわい、と噂を致
 して居りませう、今源助さんには話を聞けば何うやらお暇が出たさうだ
 吳んなさい、今源助さんには話を聞けば何うやらお暇が出たさうだ

な新平、サア爲助さん、これにはいろく事情もあつて、實は宅の坊
 の悪戯とかお乳母のお覺の粗相からぢや、お覺さへ氣を着けて居たれ
 ば間違ひはないのぢやが、源助に惚れて夢中になつて居やアがるか
 らこんな間違ひが出来たのぢや爲助、何うやら然うぢやさうで……併
 し何にもないが源助さんがお前方一杯飲別れがしたいとのことや
 うに言つて居るから……新平、イヤ乃公等もその氣で出て来たのぢや
 儀助、兎も角も遣入らうとこれから打連れて小紅屋の座敷へ通り
 ますると新平、源助や、甚う奢つたことは出来ませんが、乃公等有合
 下物で中馬相應な送別をするから……源助、イヤく然うでない、乃
 公はお前方の厚志の程が嬉しいから一寸暇乞の響應氣にやア入るま
 いが一杯飲んで呉れ、新平、出て行くお前に三文の錢でも遣はす法はな
 い、乃公等二人が分擔で一寸別盃がしたいから、それで態々遣つて
 來たのぢや、それにお前に心配を……源助、その儀は決して案じて呉
 れるな、些しの貯金もあるから遠慮なく飲んで呉れ、言ふうち程な
 く持つて参りましたのは二の膳附のなか、立派な料理でございま

する新平、こりやア源助、旅立をする貴様に、餞別も能うせずこんな
 料理を出して貰ふちやア氣の毒ぢやなア源助、なアに遠慮なしに飲ん
 で呉れ、新平、併し斯う澤山出されちやア喰ひ盡れないわい、源助、餘れば
 持つて歸つて飯の菜にせよ、併し新平、儀助や、縁あれば再た會ひ
 もして相生のまづに甲斐あることがあるかないかは過ぎてなけれ
 ば分らぬが、乃公アこれから立ち行く身の上、跡に残つてお前等二
 人、何卒主人へ忠義に奉公をして呉れよ、新平、イヤ、その儀は必ず案
 じて呉れるな、日頃心得の好い旦那様なり、奥様なり、乃公等もこれ
 から一生懸命に御奉公する積りだ、そんならこれが別れか、是に
 於て新平、儀助は馳走を饗はれて土産を貰ひ、遂に國次屋敷へ歸り
 ました、が、その翌日は彼の源助、身支度をしておつた、後日再會するこ
 金子を與へて禮をなし、長らくの間厄介であつた、後日再會するこ
 どもあらんが、先づそれまでは夫婦間よく暮して呉れど、門まで見
 送る小紅屋夫婦に暇乞して源助は、以前來し姿の新十郎、これより
 周防の若國を後になし、上方筋へ上り來る、その途次も名ある城下

の大名は、廣島及び岡山と、追々訪ねて参つて武術家の、腕を試し
て新十郎、心の裡に笑をなし、何さま利ある惣刀流、一日も早く吾
妻へ立歸り、この趣きを御主人に、心もイソ／＼急ぐうち、勇氣
掃磨も後になし、早や津の國に赴いて、次手ながらと京に上り、彼
處此處と見物するうち、京都に於ては非常の噂、洛中洛外の甲處乙
處、立札のあつてその文に「此度紀伊殿の臣下和佐大入郎則違當年
四月二十七日當地三十三間堂に於て通し矢致すべきものなり」と
町奉行所よりの立札でございますから、此は前代未聞のことならん
幸ひ我れも京都に滞在して、一應見物して行かんものと、遂に五條
の片傍に宿を取り、新十郎はその當日を相待ち居りました、扱てこ
れより三家三勇士の出會ひ、譽れの矢數と云ふか話しでございます
るが、一息いたして申上げませう。

第五回

扱てこの三十三間堂の通し矢と云ふものは、これまでは然ほど噂し

く申したものではございませんだ、あれは芝射と申したもので、往
昔は飛道具と云ふものは弓矢より他にはございませなんだから、何
でも間敷の廣い處で十分稽古をさせたりと云ふものは、誰れ一人も往
東三十三間堂なごはお堂の裏手で稽古させるときは、誰れ一人も往
來をするものもなく、誠に好い場所と云ふのは始終身分の下な者には
頃よりこの處で芝射と云ふことは始終身分の下な者にはさせたり
で、所が弓矢熱練の人々は、我れもく、と云ふので、扱て腕を試すと
云ふことになつて見ると、矢數を記して貰はねばなりませんから、
妙法院の宮様に届けて申して諸大夫の出張を乞ひし上通し矢をした
ものでございます、そこで思はく通り通れば必ず額面をば三十
三間堂に納め、その末に松井右近殿と云ふことを記してあります
これは松井右近の許可を得て額を奉げたのでございまして、往古か
ら近くは幕府の末年に至りますまで、代々諸大夫は松井右近と云ふ
姓名でございまして、依て三十三間堂の額面にも皆松井右近と云ふ
御承知でもございませうが、何の額面にも皆松井右近と云ふ名が書

いてあります。なれど和佐大八郎の通し矢をするまでは、然ほど
 浴中落外の人までが見物に出ると云ふことはなかつたのでございま
 する、然るに和佐大八郎はそれとなく三家の御威勢を以て致しませ
 から、將軍家の御名代までも立つことになり、就ては茲に以て心傳心
 を以て通し矢をするると云ふのでございませうから、隠れなくこの事
 大評判となりました、その原因と云ふのはなか／＼容易ならぬ間道
 ひになり掛けたので、これは從來狂言なせに致せば三十三間堂はさ
 ま／＼なことを書き加へて仕組んでございませうが、元來三十三間堂
 は長承の元年平忠盛普請奉行を勤められ、熊野の御を引いて棟木と
 致されたこと云ふことは三十三間堂にもこの事を記した額が掲つて居
 ります、その元人皇七十四代崇徳院と申し奉る御帝は、頻りにお
 頭痛が御持病でございまして、何うしてもそのお頭痛が癒り切ら
 せん、そこで時の天文博士に占はせませうと、恐れ多きことながら
 陛下は熊野に於て没したる六十六部の再来なり、その遺骨を葬つた
 る上に一の樹あり、この樹をば取寄て御所近き處にて一佛を刻むか

但しは一字を創立すれば、必ず御病氣御平癒あらせられんと申し上げ
 奉りましたる所から、早速勅使を以て紀伊の國は熊野へお遣はしに
 相成りませすれば、果せるかな大いなる柳の樹がございませう、そこ
 で此柳を京師へ引いて遂にこれを棟木と致して三十三間堂を建立い
 たされました、又此堂を三十三間堂と申しませうが、弓の丈を以て
 度る時は六十六間堂でございませう、弓は曲尺七尺五寸これを弓勢
 二間と申しませう、能く往昔から二間柄の槍と云ふことを申しませ
 るが、隨分同業者も毎々講談に致しませうが、一向その邊の處は註解
 る、随分同業者も毎々講談に致しませうが、一向その邊の處は註解
 せぬやうに思ひませう、弓勢の二間柄と申しませうれば七尺五寸しか
 ないのでございませうから、二間柄よりは本寸九尺柄の方が遙かに長
 いのでございませう、然るに狂言などは平太郎記と云ふものに依つ
 て書き加へたもので、和歌の浦には名所がございませう、一に權現、二に
 玉津島、三に下り松、四に蓋蓋上、〇一イ、〇オイトナ、これども
 これは穿つたことが言つてございませう、有勢何うも狂言作者の書

いたものだけに宛もあるやうに申してございませぬ、あの奥に、無
 残なるかな稚きものは、母の柳を都へ送る、元は熊野の柳の露に、
 育て上げたるその縁兒が、一口輩とは違ひまして物の著作をする人は
 頭のうちにあります、一口輩とは違ひまして物の著作をする人は
 諸事書物に明るうございませぬから、口實を述べて旨いこと云つて
 さいまする、末の處の文句を見れば、柳と柳の契りたる、連理が襟
 や揚子村、女夫阪とて云ひ傳ふ、棟木の由来の因縁を、語り納りて
 著るく、と云ふことがございませぬが、如何にも穿つた文句でござ
 いまして、あつたやうに思はれませぬが、跡方もない著作でござ
 まする、尤も三十三間堂の淨瑠璃の中へ和佐大八郎や星野勘左衛門
 を加へましては殆んど時代が違ひまする、このお堂を建てましたは
 前申上げたる通り、崇徳院の御宇のこととございまして、このお堂
 を建立したるがゆゑ、御帝の御惱は御平懸在し、天機麗しく渡らせ
 られました、これより三十三間堂と云ふものを衆人信仰してお参詣
 をするやうになりました、然るに三萬三千三百三十三体の千手觀世

音を安置いたしませぬと云ふ、それだけあるかないかは存じませぬ
 が、随分數多な觀音様でございませぬ、斯う云ふ次第でございませ
 て決して弓術の精古場なぞにする處でなかつたのでございませぬが
 當今とは違ひその頃はひは平家盛んの頃にて、京師に多くの武士あ
 りと云へば人家は然ほとございませぬから誰れ見に来るものもな
 通し矢の稽古なぞをするには古今の場所、そこへ聞き傳へて弓術家
 は我れもく、と五人八人通し矢を始め出しましたが遂には弓術の稽
 古場の如くなつて了ひました、所がこの度催しました申して八百石を領
 と云ふものは、その以前紀州藩に吉見臺右衛門と申して八百石を領
 して居る弓術の指南番がございませぬが、京都三十三間堂は弓術を
 試みるには至極の場所と聞き、我れも一應彼の地へ参つて通し矢を
 して見たいと思ひました、矢を上へ願うて只一人門人をも伴れ
 す京都へ上り、試みに通し矢をして見ませぬ、其は五月のことで
 さいませぬが、何うも思ふやうには通し矢をしてみませぬ、其は五月
 は記さず、明暦二年丙申五月紀州藩吉見臺右衛門と記した額を納り

て戻りました、これは全く矢数は記してございませぬが、額は今以て存つて居ります、然るにその後寛文二年壬寅五月二十八日、尾州藩の星野勘左衛門と云へる者が参りまして、これ亦通し矢をしたいと云ふので、この度は改めて妙法院の宮へ願ひ出して通し矢を致しました、これは思はく通りに参りましたか、立派な額面を奉げました、併しこの頃は立派であつたらうと思ひます、明治の今日に取つて見ればあんな粗相な額は餘り見る程の價値はございませぬ、左馬の畫が描いてございまして、寛文二年壬寅五月二十八日星野勘左衛門茂則二十一歳と記してございします、右の額面に納めて置十五本の内通り六千六百六十六本とありませぬ、右の額面を納めて置いて尾張へ歸りました、この事京都にては知る者數多ありと云へど誰れも紀伊國へは報して呉れるものなければ吉見嘉右衛門は何にも存じませんで居りました、然るにその年の六月の下旬吉見は屋敷の裏口を普請を致して居りました、雇大工は晝休に煙草を喫みながら、○なア久助、汝ア今年の三月伊勢へ抜け参詣をして、それから

暫く京都に居たやうな話しを聞いて居るが、何ぞ變つた話しはなかつたか、△イヤ、あつたども、金錢盡ちやア見られぬことがあつた、このお屋敷では近頃と話しは出来ぬが、三十三間堂で通し矢と云ふものがあつて、尾張の家來の星野勘左衛門と云ふ人は恐ろしい弓術の名人で日本一ださうだ、○ム、ウ、△一寸見て呉れ、乃公ア矢數だけを人に聞いて書いて來た、これだけ矢が當つたのだ、と幸ひ莫入に入れてあつた矢數の書附を云して見せました、○ム、ウ、話して居るやうでも何時しか高聲になりまして、遂にこの事が臺右衛門の耳に入りました所より、臺右衛門は實に殘念に思ひまして、面目を次第もなさざり、我れ紀伊國に於て弓術指南の職にあつて高藤を頂戴いたし、自慢顔して上に願ひ、京都へ参つて通し矢をなし、矢數をも記さずして阿容く、和歌山へ立歸つたることを返すべし、未熟の至り、然るに當年二十一歳の若年にして同じ三家の尾州の藩士、星野勘左衛門と云へる仁が然ほ立派な通し矢を致された

聞いて見れば、後日お上へ聞ゆる時は、何面目あつて御前へ面が對はされやう、事そ切腹いたして相果てんと覺悟を致しましたは老の
 一徹でございませう、併しこのまゝ空しく果てなば、亂心者よと笑はれんこと最口惜しければ、一應これと云ふ門人を招き、それ
 どなく話した上のことせんと考へて居ります、大工は何に
 も知らずその日の夕方に仕事を仕舞うて暇を告げて立歸りましたが
 夜中密かに門人を呼び寄せ、右の趣きを一通り話しまして、各方も
 弓術に心を寄せ、油断なく鍛練せられよと、何となくして餘所なが
 ら暇乞らしき話を致しましたから、この時門人の萬四右衛門、
 徳田甚三郎、落合與惣太夫、森才兵衛の四名は「恐れながら先生、
 短慮一徹功をなさすの例し、敢てこれはお耻辱と云ふ譯でもござん
 ません、別段矢数は記してないのでござりますから、何れ程通しを
 をして何程當つたと云ふことも分らず、尊公の耻辱にはならざる
 と、又我々もこれより一修行仕り、屹度遠からず京都へ上り、御
 念をお晴し申しますから……」と新機申しましたから、臺右衛門は

方が左様な御決心ならば拙者も今より一入心を籠めてお仕込み申す
 から……」とこれより死を止まつて一心不乱にこの人々に弓術を仕
 込みました、遂に寛文七年丁未の春三月中旬の頃、右の四名は紀
 州を出で、京都に上り、三十三間堂を御支配なさる妙法院の宮へ願
 ひ出して通し矢を致しました、寛文七年丁未三月二十一日、萬西
 園右衛門十八歳、總數一千本のうち九百六十本通りました、同年四月
 四日、徳田甚三郎は一千本のうち九百十九本同年月日不詳と記しま
 して、落合與惣太夫は千本のうち通り六百八十一本、同年これ月日
 不詳、森才兵衛は千本のうち通り六百五十八本と、各々矢數並びに
 吉見臺右衛門人と肩書を記した額面を納めて紀州へ立
 歸り、自慢らしくこの事をば師匠の臺右衛門へ話しを致しました、
 すると益々臺右衛門は眉に皺を寄せ、「切てく、面目ないことを致さ
 れた、尾州の藩士星野は二十一歳にて總數一萬百二十餘本のうち六
 千六百有餘の本と云ふ矢を通したるに、その上自慢らしく額を納めて來
 本ばかりの通し矢を致しながら、その上自慢らしく額を納めて來

なごゝは、愈々以て不面目、この上は是非に及ばず切腹いたさぬは
 れは相成らぬと覺悟を極めました、この時多くの門人のうち葛西圓
 右衛門友則と云へる者がこれを聞き傳へ、若年ながら夜中吉見の許へ
 出掛け参りまして圓右衛門匠、彼の四名の者の不手際より、限り
 なく御立腹の趣きをば承知いたし、不肖ねども圓右衛門罷り越しを
 してござりまする、必ず短氣をばお出し下されませず、明年までお
 待ち下さりたい、些と思ふ仔細もござりますれば……と止めました
 圓右衛門多き門人のうち其許一人だけ若年なる身を以て、我れを諒め
 に参り呉れたる段、過分に存する、して思ふ仔細とは……圓右衛門其は
 その邊に麻まねば尋公へ對けて申し上げ兼ねることござりまする」
 と何うやら奥の深き當人の諒め方、圓右衛門願もしく思ひ喜右何さ
 ま其許が然まで心を配らるゝも此方を師と思へばこそ、世に死にた
 き者は一人もなし、依て明年まで死を止まることに仕らう圓右それ
 にてこの友則も安堵仕りましてござりまする」
 立歸りまされたが、その後圓右衛門は圓右衛門の様子に注目いたし居

りますると、なか／＼他の者とは修行の仕方が違ひます、然るに
 その年暮れて明れば寛文八年戊申の五月、急ぎ京都へ上つて三日
 の日に三十三圓堂に於て通し矢を致しました、そこで紀州藩吉見圓
 一本のうちに七千〇七十七本通りました、そこで紀州藩吉見圓
 の弟子葛西圓右衛門友則と記した額面を奉げて戻りました、斯て圓
 右衛門は紀州へ戻つてこの話しを致しまして、圓右衛門も横手を
 打つて感心なし、初めて笑を含まれまして、一同の門人を集めて友
 則を見よ、圓右衛門の行ひを見倣へど、圓右衛門を模範として多く
 の門人を勵ましました、何様一同の者も圓右衛門には頭は上りま
 せなんだ、所がその後寛文九年、尾州の藩士星野勘左衛門でござい
 まするが、又候京都へ用向あつて上つて参り、錦小路通り新町東へ
 入る處が尾張の京屋敷でございますから、これに滞在申すに、紀州
 へ出て参り、不圖額面を見ると自分の額の奉げてある周圍に、紀州
 藩吉見圓右衛門人、圓右衛門人、圓右衛門人、圓右衛門人、圓右衛門人、
 これを眺められた勘左衛門は、ハアな、紀州藩士は我等に對ひ遺恨がま

しくも斯く吉見の弟子が額を掲げて取巻くとは怪しからぬことである。もと、そこで星野は眺めて見ると例の圖右衛門友則の額でございませぬ。これは自分寛文二年に通し矢をした時より總数は少くなく、通りは殆んど七千本程ありませぬから、よし、此方は意趣も遺憾もあつてしたのではないが、紀州の藩士吉見臺右衛門と云ふ者の門人が、斯く我れに還恨がましくも我が額面の周囲を取巻いて、これ見よがしの所爲をさるゝ上は、再び通し矢をして喉前の程を顯はして呉れんど、是に於て勘左衛門は願ひを出して通し矢を致しました。これは寛文九年巳酉の五月二日でございまして、總數一万五百四十本のうち八千本通りました。依つて矢數及び姓名を記しまして同様に左馬の額を奉げました。尤もこれには年齢は書いてはございませぬ。それ、そのまゝ京都を後に尾張の國へ立歸りました。然るに吉見臺右衛門の妹の玉章に於ては知る者は、紀伊の國は和佐村の郷士和佐蔵人と申す者の、

方へ嫁入つて居りましたが、なか／＼豪家にして田地持、尤もこの和佐村と云ふ處は和歌山より岩出へ參る路にございませぬ。所が大八郎と云ふ一人の子が出来まして、夫婦間よくその子を育て、唯かく若して居りましたが、不圖した風邪の心地で遂に枕に就き、僅かの病氣にて藏人は死去いたしました。そこで己むことを得ず大八郎の病氣の時、玉章はその子を伴れて家を仕舞ひ、多くの財産を金に代へ、此金を持つて兄臺右衛門の許へ戻つて參りました。然るに大八郎は馬鹿ども附かず、恰も云へず、只大膽にして物事に心を着けませぬから、母は厭しく氣を揉んで行儀等を教へんと致します。と臺右衛門は「捨て置け、未だ、稚いうちと云ふものは、餅にすらも馬子にするも皆上に立つものゝ教育如何や、マア捨て置くが可い」と年を老つて居られませぬから、氣長く育てやうと致されませぬ。けれど玉章は堪り兼ね、偶には屏く意見を致します。と、一兩手を突いて額を疊に擦り附け、宛も神妙に詭言をして居るやうで、ございませぬから、我が子のこどゆゑ惜いことはございませぬ。玉章大

八郎、そのやうに詭言をせぬでも氣さへ着いたら可いわいのウレと
 着めて見ると何うして詫びて居るのでございませぬ、疊に頭を喚
 着けて寝て了うて居ります、スヤッく、と斷を發いて居りますか
 ら、母親も呆れ返りました、ア、情けない、氣振りを致した大馬鹿
 者であるわいと玉章も甚く歎いて居りましたが、臺右衛門に詭しを
 すればマア可い、で取上げては呉れませんか、詮方なくそのま
 打遣つて置きました、然るに大入郎十三の年、天和の元年辛酉三
 月のことございした、吉見臺右衛門はお上へ願ひお眼を頂
 京都見物旁々、嵯峨の虚空藏へ十三歳參詣とて、妹玉章、大入郎を伴
 ら、留守居役は村松郷右衛門と云ふ者、これは以前吉見の弓術の門
 人ゆゑ、この人を便つて參りますと早速空長屋へ吉見一行の者を
 入れ、自分の家來一人を附けまして、京都滞在中は萬事氣を着けよ
 と吩咐けました、と云ふのは吉見も最う六十三歳の老人、他は婦人
 や子供でございすから氣を配つたのでございす、そこで一行

は先づ第一に嵯峨の虚空藏へ參詣いたし、それから後には久し振りに
 て京都見物、西山及び東山、彌生の空のことなれば、空定めなき花
 曇り、折々は雨にて十分に見物も出来兼ねます、今日しも日和が
 好いとて東山へ出掛け、遂に清水より鳥邊山、大谷の眼鏡橋より大
 佛、三十三間堂へと出て參りました、然るに思はず繪馬堂の外より
 内裡を覗いて見ると、正面に二面まで星野勘左衛門の額が奉つて居
 ります、二度目の通し矢は寛文九年云々とございす、これを
 見ましたる吉見臺右衛門、ア、我れながら恥ぢ入ることである、尾
 州藩の星野と云へる者は何處、
 く立派なる額を奉げて參りしとは、實に面目次第もなきことである
 と、思はず無念の切齒を致しました、その日はそのまゝ、妹や甥に
 作られたまへ、三條河原の屋敷へ戻つて參りました、丁度今屋敷
 へ遣入らうとする處で、バツ、と出會うたのは村松郷右衛門でござ
 います、郷右、これは先生、お歸りでござりまするか、臺右、これ
 は村松氏、郷右、今日は何處へ……、臺右、東山をばア、見物に、郷右、左

田宮新十郎

様でござりまするか、して三十三間堂へもお出でになりましたか
 臺石「ハイ……郷右して給馬堂のうちをば御覽なされましたか
 ロッど見ました郷右イヤ最う顔面なせ、云ふものは好い加減なこと
 を書いたものでござります、依つてあんなもをお氣にはお障へなされ
 まするな」それとなく諷めて呉れましたのは、星野の額を見て戻り
 老の一徹氣にするであらうと思ひましたゆゑ、斯くは宥めたのでご
 さいまする、なれども自分には他の用事に心が急きますから、そこ
 くにして別れを告げそのまゝ用向をしに出掛けました、所が此方
 は長屋へ戻り夕飯を済して三ツ四ツの世間話をして寝に就きまし
 た、玉章は豫て顔面のことを聞いて居りますから、日頃兄様の一心
 至つて一徹な方ゆゑ、若もの事があつてはと思ひましてその夜は
 何となく寝苦しく、左右するうち春の夜の早や明け近くなりませうか
 ば、遊早く起き出で、玉章兄様お賞盆に火でもお入れ申しませうか
 お舍敷をなさるならお湯を差上げませうか」と呼べど答へのごさい
 ませぬゆゑ、御免遊ばせと紙門を開けば、思ひも寄らぬ香氣の薫り

田宮新十郎

こは何事ぞと目を着ければ、七言絶句の詩を記したる屏風をば逆様
 に建て、何となく怪しき有様、扱てはと玉章走り寄り、屏風を取除
 け眺めて見れば此は如何に、老の餘腹搔切つて、朱に染みたる臺右
 衛門玉章此は兄様、何故の御生害、狂氣召されしか」と思はず叫ぶ
 その聲を聞き付けて来た大八郎、母様何ぢやと言ひさす見れば、伯
 父の吉見が朱に染みて息絶えて居りますから、大八伯父さん何で死ん
 だのぢや」と手許に近寄り死骸に取付き、思はずワツと泣きました
 る時、死人の鼻より血沙が流れて大八郎の手に掛りました大八「ヤア
 母様、伯父様の鼻から血が出たわい」そのうち中間はこれ聞き付
 けて早速村松へこの事を報せました、郷右衛門はこれ聞いて追取
 刀で駆け付けて参りましたが、これより村松の周旋に依り大八郎を
 御前へ推挙に及ぶと云ふ、大八郎弓術修行のお話しに引き移ります
 るが、例に依つてチヨイと一息……」

第六回

扱て村松郷右衛門は、この事を聞きますると早速自ら來つて檢屍を
送げました。師は六十三歳の老の餘暇を挿切りなされ、誠に御無
念でござりました。この事を名草郡和歌山へ申し遣はし、兎も角遣
らぬ、依つてこの事を名草郡和歌山へ申し遣はし、兎も角遣
の頼み寺へ拜ること仕らう。そこで早速葬式の用意を致し、切て
使者を以て直ぐに和歌山へ通じました。所が紀伊中納言綱誠卿、
いたしまして、玉章、大八郎は深ながらに位牌を携へ、村松の家來
の者に送られて和歌山へ立歸りました。所が紀伊中納言綱誠卿、
の事を聞かすに相成り、最と不調に思召し、兎に角甥大八郎を以て
余の手許へ出すべし、小姓見習として召使ひ得させん、而して大八
郎なる者、故意右衛門の跡目相續の出來る程の手並に相成らば余は
家督を申付くるから、先づ余が手許へ出し置いて苦しからぬとの厚
きお言葉に、玉章は限りなく悦びまして、大八郎を君のお手許へ見
習に差出し、玉章は限りなく悦びまして、大八郎を君のお手許へ見
にや、別段教へもせぬに弓矢を以て聞がれば積古をすることにな

りましたから、紀州の御前も御感心遊はして、故臺右衛門が蔭身に
附添うてこの者に傳へるものか、自然と弓矢の道にも拙からぬとは
末頼もしき者なりと思召して居られました。時にその年の秋のこ
とでございませうが、君は庭前に在つて四邊の景色を御覽になつて居
りました。早や入相と思しき頃、群がる鷹の羽を御覽になつて居
網誠、大八郎、汝の伯父吉見臺右衛門は弓術に取つて隠れなき者
にてありしことは、豈も藩中にて知らぬ者はあるまい、汝も伯父が弓
矢の道を承繼がば、あの鷹の一羽を射落して見よ。ハッ、と答へて大
八郎、平持馴れし弓矢を携へて御前近く駆け付け参り、少時
空をば打眺め、呼吸を圖つてや聲請共放てる弓矢、狙ひ違はず飛び
行く鷹を發矢と射止めました。この有様を御覽遊ばして一羽の鷹は、御前
打ち給ひ綱誠、天晴れ出來した。大八郎、その鷹を助け遣はせ、と仰せ
られました。大八郎、心得ました。と手許に近寄り、矢を抜き取つて翼の
關節の處を三四遍撫でるかと思へば、鷹は忽ち羽叩きをして元來し

田宮新十郎

輕くなつて來ました、そこで七分になりましたが、七分からは言ひませぬ、躍んで八分は自安弓、九分を武勇富弓、一寸を鉾詰り申します、最う十七歳には鉾詰りまで用ゐることになり、した、この世間けてより自安弓を擧げたのは八幡太郎義家公、併し弓は八分よりお用ゐなさいませなんだが陸奥守殿は他の出來ぬことをなさいました、馬上にて八分の弓を馬の平首に押當て、弦をお懸けなすつたと云ふ、これはなかく出來ぬことでございませぬ、近頃は織田信長は武勇富弓をお用ゐになりました、先づ鉾詰りを擧げたものは古來より、西八郎爲朝かこの和佐大八郎より他にはございませぬ、しつて見ればこの人は天性に妙を得た名人でございませぬ、紀州の御前中納言殿は例もながら御感賞でございませぬ、併し鉾詰りを以て、悉くなく通し矢が出來るや否やを試さんが爲め、十七歳の暮れに虎伏山竹垣の城内の廣庭に於て左右に幕張りをなし、弓勢六十六間の處に的を設へ、月夜を見込んで大八郎に一晝夜の闘通し矢をさせました

田宮新十郎

空へと駆け行きました、益々御前は御感賞あり、綱誠、天晴なるぞ大八郎、今より弓術は余が許すに依て、誰れなりと望みの者を師と致して一心に弓矢の道を學べよと仰せられ、これよりは文武兩道を學ぶに大八郎にお學ばせ遊ばせました、所が追々上達いたし、元來大なる質の大八郎でございませぬ、十三歳から十四歳へ掛けて稽古いたしませぬ、最う十四の年には普通一様の弓では輕うございませぬ、四十分五厘を、能く大弓なると云ふことは血氣のお方はお好みなすつてお遣りなさることとございませぬ、四十分五厘と云ふ弓になりませぬ、二百本三百本と四十分五厘でお擧げなさいませぬ、何程大弓自慢のお方でも、然るに大八郎は最う十四歳の秋には四十分五厘の弓が輕うなりませぬ、然るに大八郎は最う十四歳の春には五分が輕うなりませぬ、三月ばかりにして六分になり、その年の暮れには六分五厘を用ゐ、十六歳の春には最う六分五厘が

ゆゑ、死ねとの謎と思ふたのでございませう、能うこの判断違ひと云ふことにはあるものでございまして、併し日も迫つて参りますれば御名代及び一二名の附屬の者共京都へ赴きました、忝くも將軍家御名代は疾くは京都へ出張りに相成つて居りました、京都の者は今日よ明日よとこの前代未聞の通し矢を見物せんものどその日の来るを相待ち居ります、時に卯月の二十六日の早天より翌る二十七日の明方まで一晝夜の間の通し矢でございませう、尤も夜は炎々といふ火を焚かねばなりませんから、三十三間堂の傍には篝火の用意、且つ願ひ書には「紀伊殿臣下和佐大八郎儀當御寺内に於て通矢致度此段御届け申上げ候、妙法院御宮内諸大夫松井右近殿」とございませう、併し徳川三家の御威勢と云ふものはなかく強いのので、妙法院の御宮へ願ふのでも殿と云ふことは記しませぬ、他の大名では然うは行きませぬ、然るに茲に大八郎の母の玉章でございませう、併大八郎が恙なくこの度の通し矢相勤むるやうと、夫藏人が紀念の一刀、志津三郎兼氏を携へ、跡を慕うて密かに京都へ上り、三十三

間堂の堂守の平六と云ふに頼み、この堂の内の一番大きな千手観音の御像の裏手の扉のうちに身を潜め、若や伴大八郎がこの度の通し矢を射損することのあらば、亡兄吉見臺右衛門に代り、一刀の下に斬り捨てんと、志津三郎兼氏の一刀を抜き放ち、一晝夜の間の不動尊と出掛けました、女の一心と云ふものはなかく容易ならぬものでございませう、然るに當日も刻限と相成れば、將軍御名代として越前の國は大野郡府中の城主二萬七千七十餘石井能登守利房殿、京都の所司代常陸の國は新治郡土浦の城主九萬五千石土屋相模守殿、御名代として一色舍人清房殿、その他兩明奉行、且つは和歌山の大主紀伊綱誠卿の御名代として水野日向守殿、何れも程よき處にお控へてございませう、又三十三間堂北東角の處には文臺を据ゑて妙法院の諸大夫松井右近殿出張でございませう、これは當矢と落矢とを記すお役目、南面より北面を對いて通し矢を致す都合でございませうから、北の方には的を据ゑ、梵天を携へて矢送り二人これはなかく、苦い役でございませう、弦の勢ひを以て一遍に飛ば

は常日數萬の見物のうちへ投げ、これを拾うなら眞の鹿除でござ
います、天降武士が心を籠めたる、弓矢八幡照覽の矢と云ふ位
た白羽の矢をば多く祀れば家が潰れます、何と産が傾れるであ
は兎角矢場の娘を的として狙ひますから、これは産が傾れるであ
ませう、餘計なことを一口申すなどお叱りのないやうに願ひます
斯く致してその後で矢が出るのでございませう、十分竹を撰み、火に
通す楊弓場にあるやうな矢とは違ひます、十分竹を撰み、火に
掛けて油をスツカリ抜き取りありませう、随分太い息を掛けた
ら二間ばかりは弦を掛けないでも飛ぶ位なるから、随分太い息を掛けた
その位な矢をば用ゐぬことにはなから、萬本なと云ふ矢は到底
通るものな矢をば用ゐぬことにはなから、萬本なと云ふ矢は到底
るからと云つて、一時にその矢を持つて出るものではございませ
ん、最初は二百五十立持つて出ます、太鼓が備へ附けてございませ
ん、

せらる矢と、人間が走つて持つて來ると同時に行かねばならぬ位
な忙い役、マア目今の漁車の先引より繁忙い役でございませ
ん、切て愈々刻限となりすれば、大八郎はその場へ出で、御一同へ御
挨拶を終り、一寸鐘詰りの弓を携へ、三十三間堂の堂裏の観の村に
弓を突き付けて、弦を懸けます、弦音高く十分懸りますと弓小
手を穿めて用意を致し、身構へて致す處へ白羽の矢を七本臺の上
載せて持つて参ります、これへ押し頂いて第一本の矢を七本臺の上
いで弦に掛けます、これは指にて矢尻を押へ、食指と中指の二
本を以て押へて、只の方を向いて矢尻を掛けるのみにて、放つ
ではございませぬ、心の籠めてウソと一息入れましたるこの一矢は
恐れ多くも萬乗の君様の御寢所の處へお祀りになりまして悪魔降伏
の矢と致されまする、第二本の矢は京都の所司代御名代へこれを渡さ
代へ渡されまする、三本の矢は親あれば親へ納め、五本目●矢は己れ
れまする、四本目の矢は我が親あれば親へ納め、五本目●矢は己れ
の主君へ納め、六本目の矢は我が親あれば親へ納め、七本目の矢

然るに大八郎、狙ひ定めて二百五十立位ゐるは見て居るうちでござい
まする、ドン、ドン、ドンと鳴り詰りで、最う當矢ども落矢ども云
はないでも、太鼓と鐘の音で分るのでございませう、數萬の見物は
ヤンヤと聲を揚げて見て居りまする、實に矢送りには眼から火の出る
ほど忙しいこととございませう、そこで二百五十立が濟むと又跡へ
二百五十立、同じくこれも通りましたから五百本當つたのでござい
まする、そこでその跡へ五百立持つて出ましたが、恙なく通りまし
た、その跡へ千立持つて出ましたがこれ亦通りました、すると見物
はボチ／＼小言を言ひ始めました、〇、何うでございませう、最う徐々
歸りませうか、斯うドン／＼と堤防が壊れたやうに太鼓の
音ばかり聞いて居まする頭痛がして來ますから……
問にはチャント鐘の音も聞えんど色氣がない」と何うも人と云ふも
のは不事を悦んで好いことは悦ばぬもの、併し最う少しと云つて居
まするうち、三千立の矢が参りました時、最初の矢を何う外しました
たか忽ちチャント鐘が鳴りました、すると「ヤ、親玉」と見物の

中からは騒ぎ立てまする、然うなるは大八郎小手に狂ひが來まして
又二本目の矢も射損じましたものと見てチャント鐘が鳴りました
南無三三立目位ゐるで二本まで落すやうでは今日の通し矢は何うで
あらうと氣を燥ちますると、小手はブル／＼保へ出しました、此は
残念なりと弓小手を脱いで腹掻切らんと致しましたが、何分腕に癢
癢が來て何うするにも相成りませぬ、何としたりば可からうやら
と堪り得ず、滿面土の如くに相成り、無念の切齒をキリ／＼噛み出
しました、御名代の方々もこれを宥める譯にも相成らず、只アツと
この体を御覽になつてお在でなさいませう、この時群がる見物の中
より飛び出した一人の武家、編笠を被り然のみ立派と云ふ姿では
ございませぬが、何處どなくして威のある人、ツカ／＼と大八郎の
手許へ参り、突然持つたる扇面にて大八郎の利腕を發矢とばかりに
打ちますると、小手が痺れて大八郎持つたる弓をガ／＼と其處へ
取落しました、然るに右の武士は大八郎の右の手を捉へて弓小手を
脱かせ自分の小刀の馬針を抜き、大八郎の右の二の腕の處をアツ

突きまするど、何ども云へぬ黒血が甚かに出ました、再び馬針にて
 突きまするど、又候影しき黒血がたまはれた、武士大八郎殿、腕に凝痛
 が参れば斯の如くにして疑病を扱かれよ、お身は天下無類の弓術家
 が参じてこれよりこの三十三間堂の後方にある扉の處を後門の暗所と
 云ふ、この處にて矢頃を外せる心地にて通し矢を致されぬと、向方
 へ思ふやうには通りませぬぞ、この二點に呉れくも心して通し矢
 を致されよ、これを聞いて大八郎、限りなく打悦び大八、ハ、ッ、此
 は悉き御教導に預かり有難う存じます、して御身は何處の何と仰
 せらるゝお方なるや、拙者は紀伊國和歌山の藩、和佐大八郎則遠と
 申す者……武士イヤ、御縁もあらば再お目に掛ることもあらん、雨
 もこれあらん、然らばでござるど、人押分けてそのまゝ此處を出で
 行きまされたが、何となく心あり氣な武士でございませう、この時數
 萬の見物の中に交はつて、今日の結果は如何あらんと眼も放たず見
 物して居りましたは、餘々申上げました水府藩當時振人の田宮新十郎

園高でございませう、ハ、ハ、ハ、心ある氣の今の武士、何處の人にてある
 ならん、オウ然うぢやど、何か心中に肯頭きながら、出で行く武士
 の跡を慕ひ三十三間堂を出でますれば、彼の武士は五條の方へ出掛
 けて行きませうから、見隠れに跡を尾けて行きました、すると以
 前の武士は五條近くの松本屋銀十郎と云ふ宿許へッ道入つて参り
 ますると亭主、これは旦那、お歸りなされまし、甚うお早うございま
 したな、武士イヤ、一寸心急さのことがあるゆゑ戻つて来た亭主、何う
 も三十三間堂は夥い人でございませうな、武士、ム、眼に餘る數萬の
 見物、お前も見に行つたか、亭主、今私にはチヨツと見物しやうと思
 参りませうが、人に押れて何が何やら譯も分りませぬ、それゆゑ只
 今立歸つたのでございませう、武士、ハ、ア然うであらう、亭主、これ
 旦那様方……武士、拙者は幸ひにも朝が早かつたゆゑ、先づ少しの
 間、拜見して参つた、亭主、何うでございませう、武士、何うと云うて強
 ぢや、名人ぢやのウ、亭主、左様でございませうか、田宮、そのうち件の武
 は笑ひながらメツと奥へ通りました、引續いて田宮は宿屋へ道入つ

て参り新十、免して呉れよ若者「へエ」新十「今、お道入りになつたお武
 家に一寸御面會を願ひたいことあつて参つたが、拙者は水滸當時、
 人田宮新十郎と申す者である、この趣きを傳へて呉りやれ若者「へ
 一汁椀……汁椀とは何處様でございます新十「馬鹿なことを申すな
 水滸藩ぢやわい若者「へエ……新十「水滸の家來と申すのぢやわい若者「
 ア左様でございますか、手前方は宿屋でございますからツイ汁椀
 と間違へたのでございます新十「馬鹿なことを申すな若者「それでは
 お奥の旦那様へ取次ぎまするでございませう、少時お待ち下されま
 し」どそのまゝ若い者は奥室へ参り若者「へエ旦那様、武士、何事ぢや
 若者「只今水滸藩だと仰しやいまして田宮新十郎様と云へるお方が
 公に一寸お目に掛りたいことがあるから取次いで呉れと仰しやいま
 すが、如何計らひませう武士「ムウ左様か、何う云ふお方は知らね
 ども、お出でなすつたどあればお目に掛るから、此室へお通し申し
 てお茶菓子の用意をして呉れ若者「畏りましてございませう」起てば程
 なく入り来る田宮、最と叩階に挨拶を致しますると武士「サア、御

遠慮なく其處は端近此方へお進み下され」田宮は其處へ兩手を突き
 新十「只今申上げたる通り、田宮園高と申すは拙者でござる武士「で
 ござるか、言葉に後れて申譯なし、手前は尾州藩の星野勘左衛門茂則
 と申す者でござる新十「何ッ……御貴殿様が星野先生と、勘左如何に
 も、して貴殿には何ゆゑ然まで驚き召さるや新十「然ればでござりま
 する、イヤ誠に先生は武士の中の武士、侍の中の侍とも云ふべきお
 方、ハ、ッ恐れ入つたることござりまする勘左「其は又何ゆゑ左様
 仰せ下さるか」と星野は笑を含んで尋ねますると新十「語るも最と
 かしながら、ア我等は拙い者でござる、田宮新十郎などゝは天地雲
 泥の相違、其許様を星野氏と承るからは、手前はか語り申さねばな
 らぬことがござる勘左「ム、ウ、とは何う云ふことござるか承らん
 新十「然ればでござりまする、その仔細と申すは……」と行儀正して新
 十郎、星野に對つて述べ出しますその次第は、如何なることで
 ございませうか、其は一息いたして申上げませう。

田宮新十郎

第七回

この時田宮新十郎が膝を進めて申しますには、新十郎の度承るどころ、三十三間堂の通し矢と云へるものは、畢竟貴所様の兩度までの通し矢に就き、この和佐大八郎の伯父に當る吉見と云へる者、當京の都の紀州屋敷に於て切腹いたせしゆゑ、伯父の耻辱を雪がん爲り、斯く仰々しく將軍家の御名代まで仰ぎ、前代未聞の通し矢をして御貴殿の裾を掻んとする彼れが所存、して見れば、貴所様の爲りには當の敵なる和佐大八郎、その者が不覺を取れば、好き氣味なりと笑うて居るが人情、然るに其許は如何なる御用あつてこの京都へお上であらしかは知らねども、當の敵たるその者に弓術の極意を授け、通し矢の出来るやうに傳へらるゝとは、普通ならざる大量の御仁、誠に新十郎驚き入つたることにござりまする、これを聞いて、莞爾として星野は打笑ひ、勘左ア何様、失禮ながら御貴殿はお何歳でござるな、新十郎未だ三十三路の阪も越ぬざる拙者……勘左左様でござらう、手前

田宮新十郎

も其許の年齢には矢張りその氣のあればこそ、初めて通し矢を致したは二十一歳、二度目の通し矢は二十八歳の時、血氣に逸る心より紀州吉見の門人共、我が顔面を取巻きて、堂々と額を揚げしは、必定我れに敵對ふ心底ならん、ならば来いと怒りを含み、是に二度目の通し矢を致し、仰々しくも額面を掲げて本國へ立歸りましてござる、其はこれ二十八歳のこと、本年星野は四十五歳、首を傾け過ぎ來し方を思ひ廻らせば、イヤ誠に大人氣なき所存でござつた、然るにこの度京都に於て、前代未聞の通し矢ありと承知いたしたゆゑ上へは病氣届けをなして、百日の暇を乞ひ、三丹州へ養生勞々入湯いたした旨を申し出で、この京都へ來つて無益に日を費して滞在の上、今日通し矢を見物に出でたることござる、然るに見受くる所、天晴なる大八郎、彼れ往古より珍しき鉾詰りの弓を用ゐる腕前此は鎮西八郎爲朝の昔、當人の用ゐしのみにして、未だ鉾詰りの弓を用ゐる者なし、誠に大八郎は弓術に取つては珍しき達人なれど、彼れは三十三間堂に於て通し矢をする秘密を知らず、我流を以てなせ

しものとは云へ、二千立まで一本の空矢なく、この者に我が知る所の法を傳へなば、恐らく日本第一の弓術家、我れは畢竟幼きうち所宗の僧侶に從ひ、腕の凝癒を取ることを學びしゆゑ、腕の疲勞と云ふことを知らず、思ふ儘通し矢をすることを得て居るから、何れ通し矢を致さうとも我が學んだるだけの術は行へることとさる然るに大八郎を知らずして斯ることを致すはこれ一の名人なり今日日本に往古の鎮西八郎にも劣らざる弓術家の、三家の一の紀州藩に出しとあらば、高麗、百濟に聞ゆるも日本名譽、かるが故に腕の凝癒を抜くことを教へたり、萬一あのまゝ捨て置く時は後日尾州と紀州の間不和を生ずることにも至らん、然ある時は僅か臣等の威勢争ひよりして、徳川御血縁なる三家のうち和を缺く道理、依て態々この京都へ上つて傳へたのでござる、田宮はハツと膝を打ちて心なし新十郎誠や其計の思召し驚き入つたることとさる、我が家はそれを知らずして、この度中國岩國へ参り、吉川監物經倫殿の家臣にて國次惣左衛門と云へる仁の許へ中間奉公に住み込み、習ひ

二指、鎧は刀鎧より大きく、これ以て自由自在に、柄は一握りどるどきは鎧を以て打落し、長柄の物を以て参るときは亂槍巻取りと云ふもの掛け、手許へ近寄つては自由自在に斬り入ると云ふ古今便利の劍術にて、我等は漸うこれを學んで立歸る際なれば、彼れ相州の御威勢を以て三十三問堂に通し矢をさす上は、我れも主家水府の御威勢を頭に戴き、再び和佐に遠矢をさせ、我れその矢表に立つて和佐の矢尖を我が惣刀流の太刀を以て拂ひ、學びし武術の奥義を試みたいと存じて滞在仕り、今日その場へ参つて見物いたしたとでござる、然るに御貴殿様の親切、腹の凝癒を抜くまでを傳へられしは如何なる人にてこれあらんと、背後を慕うて参ればこの始末實に敬服の他なく、我れ今日まで種々の人に會うたと云ふ程のことはござらぬが、四五の日に交際を致せしとは云へど、未だ斯る心のお方に會はず、お身様如き人を一生涯我が兄たらんことを願ひたい、何卒この儀御承知下し置かれたい勘左イヤ、それは四海兄弟

弟ども申すなれば、別段契約は致さずとも、同じ三家の藩士の我々
 陸じう致すは無論のこと、我れお身の兄たらんなど、は恐れ入つた
 ることでもござる新十、此は怪しからぬ仰せなり、我が願ふ所は一朝一
 タの職事にあらず、桃園に義を結びし三勇士に倣ひ、死ぬ日を同じ
 くするの兄弟と相成りたい勘左、其は貴殿は何處までも……
 新十如何にも……時に星野は田宮の面体に眼を着けて、ツツと眺めて
 居りました、が、満面に誠實現はれ、何さま折入つての様子に見ゆま
 するから勘左、然るで思ひ詰りらるゝことならば、不肖なれども勘左
 衛門、仰せに任して其許のお言葉に従はん新十、此は忝う存じまする
 是にて冷酒を取寄せて互に腕の血を絞り、兄弟の盃を致しました
 勘左して田宮、お身はこれより何處へ参らるゝや新十、些と考うる處
 もあれば、和佐の跡を慕ひ名草郡和歌山へ赴きたう存じまする勘左
 其は其許の意に任す新十、又兄上には如何いたされます勘左、我れは一
 先づ名古屋へ引取り申す、又そのうち江戸表にて再會することもご
 ざらうから、先づそれまでは惜しき袂を別ち申さん新十、左様ござら

ば兄者人、勘左、田宮、機嫌よく身を過たぬやう参らつしやれ、と是に
 て盡きぬ話しに日を暮し、點燈をるに相成つて、田宮は辭して宿許へ立
 歸りました、所が此方は大八郎、恙なく通し矢を致し、翌二十七日
 の早天に至つて、御名代及び一同の方々に御挨拶を致して引取るこ
 に相成りました、今回大八郎が通し矢を致しました、矢數は、總數
 一萬四千五十三本のうち八千三百三十三本通りました、これ星野が二
 度目の通し矢より百三十三本勝利でございます、先づ平家の昔よ
 り貞享四年まで、間にこれ位な人はございませぬ、先づ平家の昔よ
 かの後世に文化の十年壬酉四月、紀州藩加島五兵衛の門人、野田與右
 衛門の次男、瀧本正朔と云へるは僅か十一歳の少年でございます、が
 總數一萬本のうち通し矢九千九百六十本と云ふ額面が矢張り三十三間
 堂に奉つてありまする、これは八百年の往古より今明治の三十三間
 までこの者の右に出づる弓術家はございませぬ、鎮西八郎は草葉の
 花で咲いて星野勘左衛門も冥途で腰を脱したさうでございます、
 何と天晴しい者もあればあるものではございませぬか、密柑ばかり

どの矢表に立たせん、帯刀、件々参るべし」どの仰せでございませぬ、何さまの本
 の矢表は此は少しく上の思召し違ひとは思ひましたなれど、敢て主公を
 安藤は此は通りにして遣はせどの仰せでございませぬ、敢て主公を
 人の望み通りにもなし、又先方は恨人者どのことでありませぬ、敢て主公を
 諫めることもなし、又先方は恨人者どのことでありませぬ、敢て主公を
 水府へ差支へもあらず、又先方は恨人者どのことでありませぬ、敢て主公を
 趣きを傳へますと、田宮は大きに悦びまして、直ぐに立歸つてこの
 ります、此方はお上より和佐へその由を傳へてその翌日を相待ち居
 ました、然るに翌日と相成りませすれば、正辰刻に至つて安藤帯刀殿
 新十郎を召伴れて登城いたされました、扱つても御前へ出でませれば
 紀伊家の歴史々々、水野土佐守殿を首り、水野日向守、久野丹波守、
 朝比奈舍人、伊達源兵衛等、何れも紀州家有名の方々、星の如くに
 居並んで居られませす、時に安藤に從ひ出でましたる田宮新十郎、
 行儀正しく御前へ御挨拶申上げました、綱誠水府の家來、浜人田宮新
 十郎とやら、望みに任せて矢取をば申付け、併し眞の鎌を以て對

はせるから左様心得よ」これを承つて新十郎、失策つたど心中大い
 に驚きました、と云ふのは他でもございませぬ、これが圖らず修行
 中にでも當地へ参りお上のお見出しに預かり、身が家來の和佐大八
 郎の矢表に立つて矢取をして見よとの仰せに依つて致しませぬことな
 れば、眞の矢鋒を以て對ふとあつても、手前は未だ惣刀流の腰の物
 を調へませぬから、何卒稽古矢にてお對ひ下されたいとも云へませ
 るが、此方から望んで願ひ出でたことゆゑ、謝絶する譯にもなりませ
 ん、新十郎も大きに當惑いたし、ア！出る抗は打たるゝの例し、到
 底鋒詰りの弓を自由に當るべき和佐が眞の矢尖を斯様な手細工の木
 刀にて拂ふことは思ひも寄らぬこと、我れ今日まで惣刀流の極意を
 學ばんと、晝夜を別たず修行をなせしが、今や我が一命もこの竹垣
 城の庭前に落すことか、ア情けなきことが出せり、一時は歎きま
 した、最うこれまで観念なし、お上よりの御沙汰に依つてその矢
 表に當ることに成りませぬ、観念なし、お上よりの御沙汰に依つてその矢
 携へ、右手には雁股、綿貫の矢を二本携へて徐々に出でまして、是に

田宮新十郎

も實もある武士なり、我れども紀州城内のこの庭前に於て落命いたしたくはない、願はくば一命を免れて一先づ江戸表へ立歸り、主君光圀卿にお目通りを致し、中國以來の物語りを致したいから、助けて呉れるものなれば一命を免れたいと思ひ、木刀をヤリ、ぐと上へ上げました、すると和佐も矢筈をヤリ、ぐと下げて鐵を上げ、飽くまでも木刀の鏢際之處へ狙ひを附けます様子、ヤリ、持上げヤリ、持上げ、新十郎は遂に耳の邊まで柄を上げて了ひ、遂に頭より上の處へ柄を持上げました、これで宜からうと思ひますから、十分田宮は和佐の矢尖に眼を着けて居りますと、矢張り先方は鏢際の處を狙うて居ります、愈々持つてこの人は我が命を助けて呉れるのかど、そこで十分身体を固めました、この時十分狙ひを定め、雁股矢、新十郎が携へたる樞の木にて拵へたる木刀を鏢際より射切り、餘る矢は鏢際の松の幹へ、發矢と立つたるその有様、實に驚いたる弓勢、矢力は、最前より瞬もせず御前は見て居られましたが、木刀

田宮新十郎

双方挨拶を致しました、時刻移れば庭前に來り、間敷三十有餘間を距つて、新十郎は一本の松の下に木刀を携へて突立ちました、大八郎は弓に矢を刺へて新十郎に對つて狙ひを附けました、何方劣らぬ名人と名入、是に矢頃と云ふことをば新十郎の方で見て取ります、これが出来せぬければ本當の名入とは云へません、先方の矢尖は我が身体は何處を狙うて居ると云ふことが分りません、通れば眞實の名人とは云へません、素より劍術は毎々申上げます通り、一眼二早即と申しまして、一に先方に目を着ける二には早即、扱ても新十郎は木劍を取つて位取りを致し、身体を固めて矢尖にヤツと目を着けました、所が和佐の狙うて居りますのは、咽喉元、或ひは胸と云ふやうな急所ではございせん、兎角田宮の携へて居ります木刀の鏢際を望んで目を着けて居りますから、新十郎は心中にハ、ナ、この者未だ二十歳に満たざる若年者なれど、有繫弓術は古今の名人だけありて、我が一命を奪はれないと見ゆる、雁股矢を以て我が木刀を鏢元より射落して一命を助けんと云ふ心底ならん、花

から、己ひを得ず梅の枝を伐つてこれを腋にしたのでございませう
 依つて今に生田の森にある森を腋の梅と申します、何と講釋師は物
 を識つたものでございませうがな、二本の矢を二本とも放いて了ふ
 と云ふは誠に武術家の耻辱でございませう、入らぬ矢なら何故持つ
 て出ると云ふお疑ひもございませうが、ものゝ注意と云ふのは此點
 でございませう、丁度刀に大小のあるやうなものでございませう、併
 しこれ程強い矢を射かけられ木刀を握りて小手を動かさぬと云ふの
 もなかく、大したもので、これ程堅き櫂の木刀を鏑際より射切つて
 餘る矢が松の木に立つたと云ふのも不思議の弓術、右に依つて大守綱
 誠郷も非常に御賞賛あつたのでございませう、今は打解け双方に御
 酒など下し置かれ、長く和歌山に滞在なし、和歌の浦、紀三井寺等
 も見物して、その上何處へなりと行くが可いとの仰せ、大きに御機
 嫌の体にございませう、そこで新十郎は君に厚く御禮を申上げ、和
 佐にも別れ、御一同の方々にお暇を申して安藤殿に從ひ屋敷へ立歸
 りました、所が熟々思ひますには、明朝は早天に一應和佐殿の許へ

の鶴より上を射切りそのまゝ松に立つはと勢ひ込んだる和佐の矢尖
 を、露聊かも小手狂はず、柄を握つて突立つたるは、凡人ならざる
 古今の達人、又斯る木刀を射切つたる矢の松に立つと云ふは、これ
 亦比類稀なる弓術の達人、射たりや受けたりや田宮、和佐、兩人と
 も天下無類の名人なるぞと、思はず御前は打解けて扇面上げてお賞
 め遊ばしました、大体矢と云ふものは然う數多試しには持つて出る
 ものではございませんさうで、雁股は初發に遣ひ、戦場馬場では敵
 の首級でも射切るべきもの、それが外れました時には綿貫を以て胸
 元を狙ひます、故に試しには二本に止まるもの、これ程の名人が
 二本の矢を二本ながら放くやうなことは耻辱でございませう、又矢
 と云ふものは素より二十四本立が定法で、そのうち二十三本を以て
 二十四人を射殺したと云ふは、八幡太郎、義經、織田信長、この三
 人よりございませなんだ、何うしても二十四本あれば一本は腋矢と
 申して残さねばならぬもの、然るに梶原源太景季は、生田森の合戦
 に、武藏守知明に對ひ、二十四本の矢を我れを忘れて射盡りました

扶掖に行かねばならぬと田宮は和佐の義心を心中感じて居ります。稀なる武術の達人、斯る人に會ひながらこのまゝ別れるも最と殘念に依りて明朝は安藤殿のお屋敷へ参つてお訪ね申さうと、何方も名入同士です。同様に起き出で同じやうな了簡から、翌朝になりますると刻限違はず同時に起き出で同じやうな頃から出掛けましたから、足數も同じやうに歩いたものと見せまして、途中でセリと出會ひました。大八、其處へお出でであるは田宮氏ではござらぬか。新十、ヤア誠に和佐殿、何處へお出でになりまする。大八、拙者は貴殿をお訪ね申さんと、安藤殿の心屋敷まで参る途次でござりまする。新十、其は又何の御用向あつて大八、實は其許にお禮を申さんと存じまして……新十、これはしたり、拙者は亦其許のお屋敷へ参つてお禮を述べんと、只今出掛ける所です。ざりませす。大八、其は恐れ入つた。其許様ゆゑ、拙者は少しく御所存の程も承りたければ、先づ年長けたる其許様ゆゑ、貴殿は畢竟安藤殿方にが順なれど、手前は頂いたる屋敷のある者、貴殿は畢竟安藤殿方に

滞在せらるゝ旅中のことゆゑ、勝手がまじきことながら、拙者の屋敷へ對けてお越し下された。新十、然らば仰せに從ひ左様仕らう。これより新十郎は和佐と同道の上出て参りました。大八、先づお上り下され。と一室に田宮を通し、茶菓子などの用意をなし、又それぐ酒肴をば調へさせました。田宮は兩手を突いて和佐に對ひ新十、切て和佐氏、貴殿昨日この田宮に對し色を持たして下されし段、誠に以て忝う存じまする。御身の矢鋒を以て我が一命を落さるゝは、實に掌中のもの自由にするに等しきことなるに……大八、これはしたり。何を仰せられまするや、貴殿こそ、及ばずながらこの和佐が、鋒詰りの弓に雁股の矢を以て其許様の木刀を射切りました。が、小手も狂はす。然れど、柄を握つて突立ち居られし程の貴殿の腕並なれば、我が矢を打落さん。は、最と易きこと、然るを若年の拙者に華を持たし射切らせ。て下されしは、この上もなき身の面目、これを謝せず。に居られませうや。新十、何さく、然にあらず、貴殿こそ我が一命を斷つは最と易きを、お助け下されしその御厚志、譬うるに物なく忝う存じませす。

る」と互に勇に誇らず武に慢せず、實に心ある名人兩名、大八併し拙者は未だ十八歳、其許様は早や三十路にもお近き様子、不肖ねどもこの大八を以後は弟と思召し下されたい、新十貴下程の方を以て、舎弟と致す我れに力なし、この儀は折角ながら御免蒙りたし、言へどもなかく、和佐は承知いたしました、飽くまでも募つて申入れますから、新十郎は熱々考へました、これ程の者と義兄弟の縁を結ぶは、我等に取つても幸ひのことと思ひましたから、新十然まで仰せ下さることもならば、今は派人中の新十郎、主家へ立歸り、水府の藩士と改まつたる上、後日江府に於て再會の節、義兄弟の盃を仕らん、大八「否々然にあらす、其許に過失あつて浪人いたされた方とは決して思ひません、何か仔細のあることならん、是非ともこの場を盃をに任せ、身不肖ながら兄弟の約を結び申さん」と是にて冷酒を以て盃を致しました、矢張り血を吸り合うたのでございませぬ、この時分の兄弟分と云ふのは、熊の油賣りのやうに直ぐ腕を切つて血を

吸り合つたのでございませぬ、これこそ兄弟の契約でございませぬ、大分一口輩の社會とは違ひませぬ、一杯飲みに行つて其の勘定を拂うたら兄貴になる、と云ふやうな易いものではございませぬ、大八「扱て斯くなれば貴兄は旅中のこと、安藤殿のお屋敷に御滞在も何とやら窮屈ならん、別段見る處はなき當地なれど、二三の名所へも御案内いたしたければ、手前方面にて御滞在これあるやう……これに依て田宮は安藤殿方へは禮を述べて暇を告げ和佐の屋敷へ引取りました、尤も大八郎は母親と二人にて餘は家來のことゆゑ、安藤殿方に居るよりは田宮も氣樂でございませぬ、依つてツイ今日は立たう明日は立たうと思ひながら暫らく滞在いたしました、所が一日大八郎は「兄弟者人、御覽下され、新十ハ、ア何でござるな、大八この顔面を三十三間堂へ納めやうと存じます、新十「ドレ……」と田宮は見ると楓縁にして中は杉の糸目、金物は残らず金着でございませぬ、中央に矢敷を記し、和佐大八郎則違、十八歳と云ふことを記してございませぬ、肩には紀州藩云々と記してありませぬ、アツと見詰め

て居りましたが新十如何に和佐、お身この額を納めなされるは可いが尤もこの新十郎、其許と兄弟の約を結ばねば何事も申さぬ、結構な額面、お納りなされと申せば普通でござる、が、其許と斯く兄弟の盃を致し、うへは、お身の耻辱は拙者の耻辱、知らぬことなら是非もないことなれど、存じて居ながら告げざるも不本意、一應其許に申し置く、御身去る四月二十六日より翌二十七日の明方へ掛け、前代未聞の通し矢を致されし際、二千立までは恙なく通りしに三千立目に至つて矢が二本續いて落ちたであらう、大八イヤお恥かしいことござりまする、兄上にも御覽ありしか新十實は手前も前代未聞の通し矢と承りしゆゑ、京都に滞在して見物に出掛けました、その時貴殿は弓小手を脱いで、腹掻切つて相果てんと致されし折から、群がる見物の中より割つて出で、お身に後門の暗所に弓を外せること並びに胸の疑癩を抜くことを教へた人がござらう、あれは何處の人か御存じあるか大八ハ、ハ、ハ、ハ、残念ながら姓名を問ふべき暇もなく、その儘お別れ申したことをゆゑに、一向何處の御仁とも相分りません

新十左様でござらうがな、若しその人の目にこの額が觸れなば何と見らるゝでござらう大八ハ、ハ、ハ、ハ、新十併し其許は畢竟伯父なる言見蓋右衛門殿の遺志を承継ぎ、星野勘左衛門より優りし通し矢をなし言は、恥辱を雪がれたのでござらう大八如何にも……新十然るにその通し矢の秘密を傳へられし人、我れその時跡を慕うて面會せしがあの御仁こそ尾州の藩士、星野勘左衛門茂則殿でござるぞ大八ハ、ハ、ハ、ハ、……と和佐は喚驚いたしました新十實は拙者も跡を慕うて宿許へ罷り越し、星野氏の心中を聞いて驚き入つたること、お身に語るは初めてなれど、我れはその時星野氏とは兄弟の約を結び、然して後當地へ罷り越ししたるものでござる、然るに今又お身と兄弟の約を致せし上は、取りも直さず星野氏とは三人兄弟、なれど星野氏はお身を知らず、お身は今我れの語るを聞いて初めて承知いたされたのでござらう大八何様……新十この額面を若し星野氏が見て、笑ふ笑ふはぬは兎に角に、貴殿は良心に恥づる處はこれなきや、其許と斯く善を結んだる縁に依つて、此方より注意いたし置くことでござる大八ハ、

、ツ、能く仰せ下されました兄者人、新様な額をば自慢らしく、納げんとなせしはこの身の誤り、其許なくば何のやうな恥辱を受くるやも圖り難い處でござつた、誠に忝う存じまする」と何思ひけんカ、と起つて木を割りまする斧を携へて参り、その額面を寸々に打碎き、火中に投じて了ひました、なかく、和佐も活潑な男でございまする、大八、この上は兄者人、何うしたら宜しうござりませうか、新十、左様、先づ拙者の考へでは、矢數だけを記した極く粗相なる額を納げて置かるゝが宜しうござらう、大八、左様なれば弓に因み、神功皇后三韓征伐の圖を描し、武内宿禰が應神天皇を抱き奉るの圖を描かせては如何でござりませう、新十、それは至極宜しからん」とあつて是にて早速畫工に申付けまして最と粗相なる額面を調べ、矢數と姓名を記し、諱さへも記さずして三十三間堂へ納めました、これ今に存れる額面でござりまする、切て是れより新十郎は後日を約して一先づ紀州和歌山を出立いたし、日數重ねて江戸表へ立歸りました、が、六年振りに親子の對面、これより殿中脱試しと云ふお話しに引

第八回

移りまするが、一息いたして次回に……。

扱て新十郎は紀伊國を出立いたしてより、別段道中これと云ふお話しもござりませず、急ぎ江戸表へ立歸つて参りまする、久し振りにて將軍家のお膝下、何れを見ても旗下の方々立派やかなる武士の往來、長らくの間中國又は南海と流浪うて居つたが江戸へ戻れば又格別である、目に見るもの物珍しき心地いたして、歸て小石川の富阪御門手前へ掛つて参りましたが、門前をウロウロ致して居りまする、お目附所の番人はこの事を訴へ、番人「お目附様へ申上げます、〇、何事や番人、只今田宮新十郎様に能く似た御仁が表門前をウロウロして居られます、〇、そんなことがあるか、田宮が何しにウロウロ戻つて来るものか番人「イエ、それでも居られます、〇、……」と云ふのでお目附は門前へ来て見ますると、果して田宮が迂路突いて居りますから、これは大變なことだ、新十郎殿はその位わのこと

田宮新十郎

所の御方なれば、何か臨機應變の處置をなされたに違ひないから、
 迂潤田宮を捕へて詰らぬことを云つて我々勝手なことをした時は、
 後日何のやうなお咎めを受けんも圖り難いから、先づ能い加減にし
 て置く方が可からう。○何様、その邊も一理あること、これは一應
 上へ對けて伺つて見れば何うでござりませうか、主水、それは有理で
 ざるが、先づ本人が門前に迂路突いて居るうちは捨て、置いて、
 入らうと致せばその時に伺へば宜しいではござらぬか。○成程、そ
 れも然うでござるな。言つて居るうち、ツカ／＼と新十郎は御門へ
 掛つて参り、新十郎宮新十郎只今立歸りましてござります、父寛八郎
 の長屋へ通りまする主水、待たつしやれ、貴殿は豫て御勘當の身の上
 ではござらぬか、新十郎、左様でござります、我々一存にてお通し申すこと
 せられては些と都合でござらう、我々一存にてお通し申すこと
 相成らぬから、一應上へ伺ふでござらう、新十郎、それは御勝手に致され
 たい、主水、それなれば少時お待ちなさい、新十郎、委細承知いたしました
 ところで待たせて置いて早くお目附より上へ伺ひます、申上げます

田宮新十郎

を辨へぬ人ではあるまい、當か館の法として、一旦涙人したる者が
 門前を迂路突いた時は見當り次第斬つて了ふと云ふのが御當家の法
 である、何うも不都合であると思ひながら、切てその事をお目附頭
 へ相談に及びますると、ア待たつしやれと止めたのはお目附頭の
 澤主水と云ふ人でございます、主水、我等が中小姓として主公のお手
 許近く仕へて居つた時、丁度新十郎殿はお暇になつたことであつた
 が、その後と云ふものは御前には暑くなる、のウ澤、新十郎は何
 うして居るであらう、若し暑さにも冒されて病ひはすまいかと
 仰せられたから、恐れながら田宮はお暇になつたのではござりませぬ
 かと申し上げると、オ、然うぢや、彼れは憎い奴ぢやと仰せられる、
 又寒さの頃に相成れば、田宮はこの寒空に冷ね込んで病ひはすまい
 かと仰せられるから、恐れながら申し上げると、オ、然うぢや、憎い奴ぢやと仰
 ではござりませぬかと申し上げると、オ、然うぢや、憎い奴ぢやと仰
 せられたが、憎いものなら思ひ出されさうな筈はない、可愛ければ
 こゝろ思ひ出さぬさる、何分當か館は古今の御明君にして、あゝ云ふ

までもございませんが、お目附となりますると、他人を待たず上へ伺へるものでございませぬ、斯くと光圀期に申上げますと、光圀何、新十郎が戻つたとな、主水、御意にござりまする、光圀「オ、左様か、無事に戻つたか、主水、ハッ……」光圀「イヤ、彼れは憎い奴ぢや」所で澤はこれに愈々駈引な話した、能う新十郎を咎めて彼れ言はなんだことだと思ひながら、主水「如何計らひませう、光圀、ム、憎むべき奴であるなれど、彼れに父、寛八郎と云ふ者あり、至つて潔自なる者なれば、正敷不届なる新十郎をこの儘では捨て置くまい、マアこれは通して見るが可からうぞ、主水、委細承知仕りました」そこで澤は御前を退つて目附所へ参りますと、〇「如何でござりましたな、主水、イヤ早や拙者の申しした通りの大駈引、既のことに我々も失策を致すこととてござつた、何うも怪しい話しやござる、〇「然らば何う仕りませう、主水、マア何は兎もあれお通し召され、〇「何様……」田宮氏お通りあれ、新十でござりまするか、然らば御免……」そのまゝ、メイと邸内へ通り久し振りにて父の長屋へ立戻り、玄關へ掛つて「誰を居らぬか」

と聲を掛けますと、この給人と云ふものは折々代るものでございまして、お大名方とは事異り、私に雇く所の用人、給人と云ふものは折々代りますから、ハテなど給人は不思議に思ひました、御練者がお出でになつても、玄關から誰を居らぬかと云ふやうな失禮な言葉と云ふものはあるものでない、恐ろしい野放途な人もあるものと、思ひながら、ツカ、玄關へ出て参つて眺めますと、日に焦けた真黒な男が、左の手に笠を提げ、右の手に袋に入れた短やかなる木刀を携へて突立つて居りますから、給人「ア、何方様でござりまするか、新十、寛八郎殿は御在宿か、給人「御意にござります、新十、新十、只今立歸つた、取次いで呉れ、給人「ハッ……」と申しました、前申します通り、新十郎の江戸を出る時分からの家來とは違ひますから知りませぬ、不審に思ひながら、給人は起つて奥室へ参りますと、寛八郎は一生懸命に竹刀削りをして居ります、この武術家と云ふものではございませぬ、尤も流義に依つて多少大小はございませぬが、兎も角自分の

手で一度竹をば削り直し、鋸を嵌め先革を嵌めて空振りど云ふものをして見るのでございませう、それで狂ひがございませうと直ぐにその狂ひを直し、何遍でも先革を嵌めたり鋸を嵌めたりして試すのでございませう、寛八郎は一生懸命に竹刀削りをして居ります處へ給人且那様へ申し上げませう、新十郎様と仰しやるお方がお歸りになりませした寛八何、新十郎……ム、ウ……「言ひつゝ夢中になつて竹刀削りをして居られます給人如何計らひませう寛八エ、し、喧し

を傾けて考へて居られます、嬢さまは鉄を持つてこれも頻りに母親と相談をして居られます給人へ一申上げませう、新十郎様と仰しやるがお歸りになりませした給人「こりやア云ひながら手に持てる尺にてボカリ頭を打たれました給人「こりやア困つた」この折り又玄關では頭りに大聲にて「何うちや」と催促に及びませう、こりやア到底何うもならぬ、且那様へ最う一通申上げて見やうと、今度はお給人も考へませして、竹刀で殿たうにも届かぬやうに一間は此方の方へ手を突きませして、破鐘を撞くやうな聲を出して給人「新十郎様只今立歸りませしてござる……寛八エ、ッ……エ、イ、吃驚したッ」と云ふ途端竹刀を斜に切り落して了ひませした、この聲を聞いて奥様は思はず手に持つて居られました所の反物をお落し遊ばす、嬢さまは鉄にてアヤキ、と見當なしに裁つて了ひませした、然るに何思ひけん寛八殿は忽ち玄關へ駆け付けて参り寛八「ヤア不持なる悴、能くも阿容く立歸つたな、父の鎧尖受けて見よ」と長押しに架けたる鎧追取つて身捕へに及びませした、驚いたのは奥様

の欄 お嬢さまのお安のございませう。やす母様、久し振りでか
 歸りになりしお兄様を、槍を以て突かうとは、父様も餘りと申せば
 お胸に致され方…… 柵、これ、安や、和女は父上の眼に入つて
 も痛うないことゆゑ、若し新十郎が危いと見たならば和女は父上の
 手に縋り付きや、妾は後より槍の柄を持つて引張るは…… やす
 心得ました」と二人はウロウロして居ります。女風情の手許へも寄れ
 て田宮寛八郎邊が槍を携へて携へますれば、この位な事をされる
 るものでございませぬ、そのうち新十郎もこの位な事をされる
 は覺悟の上でございませぬ、袋より豫て和佐の許に於て再び拵へ
 直したる木刀、岩國で拵へましたのよりは一層恰好よく出来て居る
 懸刀流の木刀を以てヒツリと携へて附けました。寛八、汝れ新十郎小
 な舉動この槍尖が受けられるなら受けて見よ」と千段より唸るを、
 右に、穂尖より風を捲くかど怪しむばかり、父が繰り出す槍尖を、
 右に、穂尖より風を捲くかど怪しむばかり、父が繰り出す槍尖を、
 に、父の手許へ寄るかと思へば、懸刀流の極意の一ツ、大鳴一聲請共

尺三寸の木刀を以て、槍の柄の半程を打ちました。有繫の寛八郎も小
 手、腕、ガッパ槍をば投げ出しました。寛八、天晴出来した新十、これ
 を父上亂槍巻取り…… 寛八、ム、出来した。この時母親と妹の兩人
 は、柵、新十郎、やすお兄様、飛込んでお父上を…… 指で打つことを
 教へます。寛八、コリヤッ、他愛もないことを申すな、不埒な奴だ、
 父親を打つことを教へる奴があるか、コリヤお安、兄が戻つて居る
 ではないか、長旅をして参つたのだからその衣類も垢染んで居るで
 あらう、早く兄の衣類を持って来て遣れ、給人に申付けて料理をば取寄
 湯から上つたら安、髪を結うて遣れ、給人に申付けて料理をば取寄
 せて遣れ、柵、旦那様、尊公お氣でも違ひましたか。寛八、馬鹿を申せ、
 氣が違うて何うなるものか、上下を持って上下を、我れはこれより直
 様お上へこの趣きを申上げん、コレ洗足水を取つて遣らぬか、誰れ
 か居らぬか、するど家來は洗足水を持つて参ります。寛八、新十郎、
 身繕ひを致し置け、新十、心得ましてござります。寛八、何時上から御沙
 汰があるかも知れぬゆゑ…… 新十、玄細承知いたしましてござります

る、そこで寛八郎は頭を振り立て、嬉しさに首が先になつてその
 割に足が運びません、直ちに御殿へ出仕をなし、光圀卿の御前へ出
 で、両手を突いて恭しく寛八ハ、ッ申上げます、光圀オ、待ち兼ね
 た寛八郎、新十郎のこのか寛八ハ、ッ、恐れ入りましてござります
 る光圀何うぢや、無事に戻つて嬉しからうな……イヤ、憎い奴で
 あるわい、普通では其方も承知は致すまい、お側衆は何れも稀代な
 顔をして見て居ります、断引の強い主人と家來、親爺二人が妙な
 話しをする、いと思つて居ります、寛八仰せまでもござりません、
 憎むべき所の新十郎、槍玉に上げて呉れんものと、年は老つても田
 宮寛八郎……光圀ハ、寛八、汝れ新十郎、この槍尖を受けて見よ
 と、繰り出したるその槍尖……光圀ハ、鋭き其方が槍尖を如何い
 たした寛八、桶子に等しき木刀にて……光圀見事打つたか寛八、右よ左
 と飛鳥の如く、手前の槍をば躲して居りましたが、ヤッど一膳諸共
 に、槍の柄の半程を發矢と打たれました、すると私小手痺れ、思は
 ず槍を取落しましてござります、光圀オ、新十郎が落したか、出

した、健氣なる奴ぢや、笑を含んで光圀卿、夢中になつてお話し
 うち、不圖氣が着いて御覽になりませると、數多のお側衆が居並ん
 で居りますから光圀オ、憎い奴ぢや、併し腕並は出来たと見ゆる、
 併し本人は何と申して居る、不埒なことを致して屋敷を出で、今日
 まで何處を流浪うて居つたと申し居る、寛八、全くお上より御勘當を受
 けまして當地を立退き、周防岩國吉川家の藩士國次惣左衛門と云へ
 る者、惣身惣刀流と云ふ武術を多年辛苦の末編み出し、したる比類
 稀なる術と云ふことを承はり、何卒この流義を學ばんものと肺肝を
 碎き、漸うその許へ中間奉公に住み込み、辛苦を致して習ひ覺はて
 立歸つたと申し居ります、光圀ハ、憎むべき奴とは
 言ひながら、それまで武術に心を寄せ、一心籠めて一流を辨へて立
 歸つた、あるなれば、憎い中にも亦一ツの取所あり、依つて早々目通
 り許す、彼の手並を見たらうへにて、愈々然ある武術に優れて居る
 彼らに、最早汝も老休のことゆゑ、併し余が心に叶はねば勘當は免さぬぞ

寛八御有、理なることござりまする、御前の仰せなくともこの寛八郎が承知いたしません、光圀、然うであらう、然らば同道いたして参れ、寛八「心得ました」と、寛八郎は長屋へ立歸つて参りまして、寛八「ア、悴、同道しやう」と、そのうち新十郎は身支度を致し、父諸共御前へ罷り出でました、久々歸りし新十郎、光圀も飛び立つ程に思召して、心中にはお悦びでございまするが、苦り切つたる顔を致され、光圀「新十郎、家法を犯して勘當を受け、今日までの間、勝手なことを致し居りしは不埒なれど、比類稀なる武術を學び、その奥義を極めて歸りしとあるゆゑ、先づ一應は目通りを許す、併し惣身惣刀流とやら申すその流義にて何か異りしことあらば、余が目通りに於てその奥儀を見せよ、新十、ハ、ッ、委細承知仕りましてござりまする、光圀何う云ふことを余に見せて呉れるか、新十、これに携へ参りましたるこの木刀……、光圀、ム、稀代な木刀ぢやのウ、新十、即ちこれは總て刀身は一尺三寸、柄は一握りと二指……、光圀、なる程、鑄は太剣の鑄より大きく致し、餘程異つた所の木刀ぢやのウ、これで何うする、新十、申上

げましたる如く、一尺三寸の刀身に、自由自在に敵を拂ひ、光圀何さま、新十、又長器を持つて参るときは、亂槍巻取りと云ふ一手を用ひまする、光圀、ム、して飛道具にて参るときは……、新十、この鑄を以て矢玉を拂ふが惣刀流第一の極意でござりまする、光圀、此は餘程便利なる所の流義、片手を以ても自由自在に遣へるな、何さま十分考てを着けたものと見ゆる、然らば余が目通りに、その矢取と云ふことを致して見よ、其方の手練に依ては余に所存もあるに依て……、新十、此は有難き仰せ、委細承知仕りましてござりまする、此上はお相手を願ひたう存じまする、そこで弓術優れし者を呼んで早々新十郎の相手をば申付けらるることになりませした、左右するうち追々御家老方も御出仕になり、御前を首め並ぶる重役方の目前にて曠の業なる矢取でございまする、御大藩とは云ひ殊に三家のうち至つて武に長けたる所の水藩でございますから、常陸の水戸に何流と云ふて恐らく武術ではこの流義のないと云ふことのない位、な水戸家でございまする、依つて弓術にも目置流、吉田流等、それ、弓矢の術に長けたる

者は數多あります、そのうち五十人を撰んで召出し、五人づゝを
 十組に別けました、併しこれは此方で腕前さへ出来て居りましたら
 随分遣れるものでございませぬ、何となれば、對ふ人が一人も弓術
 に心得のないものはありませぬ、昔弓矢の道には優れた一流の奥義
 を極めて居る人ばかりでございませぬ、矢頃と云ふものゝ着け處
 が極めて居ります、或ひは目鼻の間を狙ふとか、胸先を狙ふとか
 急所を狙ふものでございませぬ、併し矢は本矢を用ゐるのでは
 ございませぬ、尖に極の瓢箪のやうなものゝ着いてございませぬ、試
 矢でございませぬ、尤も急所へ當れば目を眩すぐらゐのことはござ
 いませうが、一命に關はるものではございませぬ、そこで新十郎は
 例の桶子の如き木劍を以て御前に於て構へを着けました、併しこゝ
 でございませぬ、このうちに一口の如きものが混つて居りましたら
 此度新十郎を遣つて御覽に入れませぬ、何故なれば一口は毫しも弓
 術を學んだことはございませぬ、見當が極まりませぬ、依つて先方
 で受けることが出来ませぬ、けれども百人寄つても二百人寄つても

一流を學んだ人は狙ひが極つて居りますから、それさへ選けたら彼
 げるもの、尤も昔から言ひ傳へてございませぬ、矢は中らぬが當然
 中るは不思議、鐵砲は中るが當然で中らぬが不思議、鐵砲と云ふも
 のはスツと来て中つてドンと音が聞ゆるのでございませぬ、矢と云
 ふものは矢風を含んで矢鳴と云ふものが致しますから、間敷を離れ
 て強弓を放ちますと、ビユウと云ふ矢風を含み、又矢の飛んで
 來るときにはリウと云ふ響が致します、そこで此方に武術さへ出
 來て居りますれば、此度それだけの覺悟をして拂ひ落せるものぢや
 さうでございませぬ、と申し上げますと一口は弓矢の道にも心得が
 あるやうでございませぬ、存じませぬので、總て呼吸を窺つて
 取るものださうでございませぬ、吸く息で矢頃を据ゑて呼ぶ息は放
 つのでございませぬ、これが弓術の眞の呼吸ださうでございませぬ
 そりやア然うでございませぬ、吸く息で矢は放てませぬ、今や見當を
 据ゑて矢尖を揃へて射手の方々切つて放てば、新十郎は此方に在つ
 て飛び來る矢尖を右左に拂ひ四角八面自由自在に、劍を以て拂ひ落し

まする不思議の腕前、何様と光圀卿も非常に御感心遊ばしましたが、五十立ぐらゐな矢を拂ひ落すは眼を開いて閉ぐまでの間でございませぬ、不思議は只その矢の落る處が、疊半間ばかりの處で、残らず五十本の矢を拂ひ落しました光圀天晴出來した、只今より勘當を免す寛八郎、今日より改めて余が勘當を免して遣はすから其方も許せ寛八ハ、ッ、器用存じ奉ります光圀屋敷を抜け出で、數年の間、主家へ對して不埒を働さし様なれど、一流の奥義を極めて立歸りしは神妙の至り、今より田宮家を相續いたせ編士ハ、ッ、此は忝き君の仰せ、新十郎に家督御許し下されませぬれば、一應お上へお願ひ申したいことがござります光圀ム、ウ、其は何事である新十ハ、ッ、委細はこれを御上覽願ひ奉りますと懐中より紫縮緬の服紗に巻いたる一卷を取出し、光圀卿の御前へ差出しました光圀ム、ウ、此れは……新十國次惣左衛門、心を籠めて編み出したましたる惣刀流の極意の一卷、光圀然らばそれを汝に許したのか新十婿岳父と後に呼ぶ、引出と致して我々に傳へ呉れたるものにござります光圀ム、

ウ、婿岳父とは……新十實は國次の娘さみ女と申す者これあり、主家へ歸參のその後、必ず手前に貰ひ呉れよと、惣左衛門殿より強しての頼み……光圀して水戸の家來と云ふことを語りしや新十、その儀は決して申しません光圀ム、……新十、先方より強して尋ねも仕りませず光圀然らば汝を然るべき武士と察したのぢやな、有繋は一流を編み出せし國次惣左衛門、天晴な者である、それ程の者の娘なれば、汝が妻に迎ふるも不都合はあるまい、併し縁談の儀は此方も強ひては勧め難し、寛八郎、其方は何うぢや寛八ハ、ッ、多年憂眼難を致し、寢食を忘れて一流を編み出されし國次惣左衛門殿、未熟の悴に極意の巻までも許し、娘を貰うて呉れよと申されるは、身不有なる寛八郎が悴新十郎に見所ありと思はるればこそ、主名も親の名も語らざる者に娘を嫁に持つて呉れよとは、誠に國次と云へる人は心あるべき武士と存じられませぬ縁談かとお上よりお許し下し置かば余もその儀には彼是れは申さぬ新十左様ござりますれば、私に改

めてお暇を頂き、君女を迎へに参りたうござりまする光圀、イヤその
 儀なれば妻を迎へるだけではあるまい、水戸の藩士と名乗るうへは
 余もそれとなく國次に一禮述べさせたい、就ては汝も限なく謝さね
 ばなるまい、第一それが先立つてのことであらう、新十、ハ、ッ、御賢
 察の程恐れ入り奉りませする光圀、然らば汝は彼の地へ参り、一禮述べ
 てその上、娘を迎へんとあらば、水戸の藩士と立派に打拵つて参るが
 可からう、依ちて其節は余も指圖いたすであらう、併し心は急ぐであ
 らうが、今汝に萬一のことがあれば折角難なして見取つたる惣刀
 流も、其方知るみにして他に知るものなければ、只見取つたと云ふ
 のみにて、そのまゝ立派と相成る道理、依ちて以後一年ばかりは見合は
 せて、惣刀切て余が家中のうち五名七名の者にも譲り、又刀銀冶に申付
 けて惣刀流の眞剣をも調へ、而して後立行くことに致せよ、どの御
 意でございませすから、新十郎も主君の仰せ已むことを得ません、そ
 こで水戸の藩中これぞと思ふ方々五七名に惣刀流を指南に及びまし
 た、併しこれは見取らすのではございません、手を取つて致へるの

でございませす、又、吾も人も皆腕並の優れた一流の奥義を極めた
 人ばかりでござりますすから、早うございませす、父寛八郎、及び朝比
 奈彌太郎、安島帯刀、萱野、鈴木など云へる武術に優れし方々が種
 古いたされましたから、茲に一年経たざるうちに惣刀流の極意を覺
 ゆると云ふことになり、その度は水府の家來と云ふ資格にて立派なる乗物に
 お暇を賜はり、雨若黨にて、且つ種々の下され品、自分土産物などを携
 打乗り、江戸表を發足いたしました、周防の岩國に着いたしました、早速小紅屋
 へて七月の中旬に至つて、周防の岩國に着いたしました、早速小紅屋
 爲助の表へ乗物を下させ、若黨一人は屋内へ這入り、○水戸藩の田宮新十
 と云ふは、お前の方か爲助左様でござりまする、爲助は「ヘエッ……」
 郎殿と云へるが、泊りに相成ることである、爲助は「ヘエッ……」
 と云つて驚いて、庭に駆け下り、有合ふ木履を足に掛け、表へ出ると
 立派な乗物が下りて、ございませす、殊に雨若黨でございませすから、
 餘程の御大身であると思ひながら、駕籠の此方へ雨手を突き、爲助有難

うございませう、小紅屋爲助でございませう」と乗物の引戸を
 開けて、程より佩刀を提げて立出でましたる新十郎「爲助、
 無事であるのう爲助ハッ、誰方様でございませう……」と顔を上げ
 て爲助「ヤッ、源助さんカッ」この時刻に附いて居りましたる若黨は
 ○控へろッ新十郎イヤ〜咎めて遣るな、身は先年この地に在りし
 頃源助と申したのぢや ○ハッ……」と云つて若黨は驚きました、
 そのうち新十郎はメツと奥へ通り、以前その身の泊り居りましたる
 室へ案内させました、そのうち家來も追々乗物の仕舞をして内裡へ
 這入りました、程なく爲助は敷物萬端の用意を致し、茶を煎れて持
 つて出でました、程なく爲助は敷物萬端の用意を致し、茶を煎れて持
 かつ、我れ事は先刻若黨より申した通り、水戸の藩士にして田宮新
 十郎、高と申す者である爲助ハッ、恐れ入りましてございませう
 新十郎併し相變らず國次主従の方は機嫌好くして居らるゝかな爲助且
 八日早うございませう……新十郎、何、遅いとは……爲助今七
 何と申す爲助残念な

ことでございませう、敢なく先生には他手に掛り……新十郎、他手に
 掛られたとは……吉川殿の家中にて、隠れもなき武術の先生、暗々
 他手に掛りなるとは思ひも寄らぬこと、して何者の手に掛り
 遊ばして……爲助然ればでございませう、武術秀でし國次先生、御
 壯健でさへお在で遊ばしたなら、縦令如何なる者が参らうとも、三
 八五人の者位に、自由になるべき方ならねど、暗夜の隙は免れ難
 きの例し、御痛はしや先生には、御病中寝んでお在で遊ばす處を、
 舟仏にも隣り屋敷の倉橋兄弟が暗殺に致しました新十郎……
 りやあの倉橋兄弟が……アア残念なことであつた、してその跡
 は何うなつたか爲助主従敵討に出立いたされ、尋公はお姓名さへ分
 りませぬ、只江戸表にて探ねたら萬に一ツ會へぬことはあるまい
 とて、新平さんをお供に作れ、奥標はしめ續さま坊様、主従四名で御
 出立になりませう、新十郎は頭を垂れて嘆息なして遺憾遣る方なく
 「夢にも知つたことなれば、斯く悠々とは致さなかつたものを、思
 へば無念口惜しや、須彌茶海之恩義を受け、我等に對けて武術を授

け下されし國次先生、應ぞ御無念に思召されたであらうと、少時
 は涙に暮れて居りましたが、稍あつて乾度思案を仕直しまして、料
 紙を持って硯を取寄せ、一通の書面を認め、大剣を取寄せて若黨を
 呼び新十郎等はこれより江戸表へ引返し、これなる書面を父寛八郎
 殿へ對けて乾度手渡し致し呉れよ、又この大剣も父上に渡し呉れよ
 都合に依れば新十郎兩三年のうちには江戸表へは立歸らぬやも圖り難
 い、委細はこれなる書面に認めあるゆゑ、御前休宜しくお計らひ呉
 れられよと、呉れくも父上に申上げて呉れよ、今宵は當家にて汝
 等も泊めて遣はしたけれど、心急げば行けるだけ參つて泊るやう致
 し呉れよ、此金を旅費として歸れ、と供の者に乗物を持たせて江戸
 表へ立歸らせ、自分分はこれより爲助方にて食事となし、それより岩
 國の氏神へ對けて參詣なし、神前にあつて誓ひを立てましたは、あ
 はれ神明の冥助これあらば、新十郎が大恩受けし國次が仇、倉橋兄
 弟の者に邂逅ふか、但しは國次主従の者に會ふまでは、夜は疊み
 の上に寝ず、三度の食事も疊の上にて致さず、一心不亂に敵並びに

第九回

國次主従の行方をば相探ねん心底にてこれあれば、何卒神の加護を
 以て、我等の願ひを叶へさせたく給へど祈念を籠り、遂に惣身惣刀
 流の一刀の短やかなるを、鋤を抜いて藁苞の中に入れ、これ所持
 して身は乞食非人と姿を變へ、周防の岩國を出立なし、敵倉橋兄弟
 の所在を探ねに立出でましたが、切てこの國次の家の跡動と云ふは
 如何なることでございませうか、其は一寸息いたして次回に伺ひ
 ませう。

茲にお話し元に戻りまして彼の國次惣左衛門でございませう、この
 人は新十郎の源助が岩國を立つて後、何となく心淋しう暮して居
 られます、別段これ程の武術家ゆゑ、宅に居る者が一人ぐらゐ
 りましたとて、それが爲めに氣煩らひをして病氣が出ると云ふ譯で
 はございませんが、多年の苦心、且つ源助の居りましたる時は末頼
 もしき若者に、この者然るべき所の武士、仔細あつて我が方へ見

取りに参つて居ると云ふことは疾くに承知をして居りましたし、我が娘も、源助が住み込んで半年も経つが経たぬうちに最う思ひ着いて居り、取つて立歸りなされたことと、さういふ間に、惣流の奥義を見よ、その効なく、心地と打臥し、様々に醫を加へると云へば更に新平、儀助に至るまで、在下の氏神に誓ひ、最う一度この世の人にしたいと云ふ、殆んど一年餘りの病氣に、スツカリと瘦せ衰へ、眼は落凹んで、實に見る影もない姿となり、縁の處へ斬平、儀助の兩名にて静と、これから私には奥様お嬢さま坊様の御供を致しまして、御苦勞ぢやの、新平、儀

助、汝が残るか乃公が残るか、儀助、新平、お前それぢやア残つて呉れ、斬平、然うか、それぢやア御苦勞ながら行つて来て呉れ、そこで儀助は三人の主人の供をして、お参詣に出で行きました、跡に残つた新平は、「ドレ、それぢやア儀助の戻るまで、其邊の掃除をして置かう、彼奴も疲勞れて戻つて来るのに、直ぐに用事と云ふのも定めて、苦しからうから、左衛門、好い工合に寝込んで、丁ひました、茲に隣屋敷の倉橋段右衛門、舎弟段蔵の雨人の者、先年彼の源助との間違ひより、門人は一人も来ぬやうになり、誠に知行を買うて居りませぬ、然のみ、目次第もない譯で、これが他の役を兼帯して居りませぬ、然のみ、誠、誠、目なうて居られませぬ、段蔵、兄者、段右、何じや、段蔵、隣りの國次、の方へ門人を皆取られて、何の爲めに我々は知行を買いて居るか、評が分らぬ、無念なことと、段右、イヤ、如何にも其方の云ふ通りぢや、段蔵、これと思へば、隣屋敷の中間源助、彼奴はなか、普通の者

には、依りて、到底この地には居られぬ身上、行き掛けの駄賃に惣左衛門、
 めに思はうて居りませしたる折からでございませすから、不圖舎弟段藏の勤
 りに、依りて、到底この地には居られぬ身上、行き掛けの駄賃に惣左衛門、
 めに思はうて居りませしたる折からでございませすから、不圖舎弟段藏の勤
 りに、依りて、到底この地には居られぬ身上、行き掛けの駄賃に惣左衛門、
 めに思はうて居りませしたる折からでございませすから、不圖舎弟段藏の勤
 りに、依りて、到底この地には居られぬ身上、行き掛けの駄賃に惣左衛門、
 めに思はうて居りませしたる折からでございませすから、不圖舎弟段藏の勤

門をど心得ましたから段左段藏、然らば彼奴の様子を窺うて参れ
 段藏、イヤ如才なく先程堀の間から覗いて見れば、縁の處でスヤク
 熟く寝込んで居る様子、段右、それでは今のうちに参つて押片付けて了
 はん、と、甲斐なく、しきも身繕ひ、斬り捨てたなれば、兄弟のもの
 この地を出立しやうと云ふ考へでございませすから、それと参りませして
 致しませして、段右、段藏、参れ、と禪願巻、梯子を持って参りませして
 掛け、兄弟はこれに登つて見越の松に手を掛けて、密と隣りの庭前に
 へ飛び下りませした、神ならぬ身の惣左衛門、何にも知らず能い搦
 に、寝込んで居りませす、機こそ好付けれも、何にも知らず能い搦
 蔵は、援撃に惣左衛門、目掛けて斬り付けませした、アツと叫ぶが、この
 世の別れ、天晴一流の達人なれど、病気の爲めに身休自由にならず
 殊に、寝居る處を斬り付けられたのでございませすから、臺所の掃除を
 く、その場へ息は絶え、果てませした、この物音に新平は、臺所の掃除を
 して居りませした、何事やらんと、駈け付け、様子を見れば、此は如
 何に、朱に染み、たは主人の有様、見遣る彼方に倉橋兄弟、拆てこる

りせせん、サア此点でございまするな、最う一ツ槍術に手練があり
 ましたら、一振り振れば跳ね落ちるのでございまするが、突くだけ
 には妙を得て居りましても槍を遣ふその術を知りませんから何うす
 ることも出来ません新平、エ、イこの野郎、ブル、僕へやアがる
 斯う云ふ時に儀助が居れば好いものを、何をして居るのか、早う戻
 つて最う百文の手傳へば此奴一人だけ逃がす氣遣ひはないものを……
 待て、斯う手に應へては槍を持つて我慢は出来ぬ、この槍を引き
 抜いて尻の穴へ突込んで遣らう、然うしたら此奴を召捕るのは何の造
 槍も貫らう、そのうち儀助も戻つて来れば此奴を引抜きますると
 作もないこと、斯う思ひましたから、グイと槍を引抜きますると
 これを合圖に痛さを地へ、真逆様、己が屋敷へ落ち込みますると、
 兄の段右衛門は苦しむ弟段藏を肩に掛け、そのまゝ雲を霞と逃げ出
 し、また、此方は新平、残念なり失敗つたと思へども、一人にて何
 うする譯にもなりませず、傍を見れば主人の死骸、何としたりば可
 からうやらと右思左考して、途方に暮れて居りまする、所が此方は主

曲者ござんたれど、主人の室の此方にある、長押の槍を取るより早
 く、程見せて呉れんと追駈けました、此方は兩人、何これ位の中
 の程、思ひますれど、何しろ突くことには妙を得て居る新平、手間取
 とは思ひますれど、逃はやくも段右衛門は、庭の松ケ枝に攀ぢ登り、
 つては事面倒と、逃はやくも段右衛門は、少し後れた舎弟段藏、同
 難なく掘起しに逃げました、然うはさせじと追駈けて「汝れ曲
 ち登り、逃げんとするを新平は、然うはさせじと追駈けて「汝れ曲
 者、百文になつたか」と後方より突きました、四文にもなりません
 が段藏の脛肉のどころをグサと突きました、脛の肉をば一寸ばかり
 突き貫いて、餘る槍尖は松の幹へ突立ちました、段藏は身体七分は
 俯向きになり足と脛とは松の樹に纏ひ着けられて了ひました、下
 らは段右衛門「段藏、早く〜」と呼びまする、段藏兄者人、百文流に
 尻を突かれました、段右少々ぐらゐなら振り切つて下りて来い、段藏、涙
 相な、脛の肉をば引断られて地りませすか、ア、痛い〜と身を跪へ
 て苦しんで居りまする、新平は一突き突いたまゝ、何うすることもな

從四名の者は氏神様へ参りましたが、交るゝに草履の鼻緒が断れ
ますゆゑ、心ならずと急いで立歸つて見ればこの有様、餘りのこと
に呆れ果て、涙も出ぬことにございます、一口はそれほど悲しいと思つたこ
とにございませぬが、淨瑠璃の文句には毎々出ることございます
る新平、ヤ儀助、儀助、何ちやい新平、新平、遅かつたわい、儀助、何、遅かつ
たとは……新平、實はこれく、斯様く……儀助、チエー、扱ては逃
したか、残念なことをした新平、サア何分にも百文ぢやわい、汝が來
て二百文になりやア切めて弟段藏は二人して生捕つて遣つたものを
儀助よし來い新平……と儀助も同じく槍追取り、中間二人は隣屋敷
へ出掛けて参りましたが、早や敵段藏、段右衛門は立退きました跡
なれば、藻坂の空と相成りまして何と詮方もなく、兩人は槍と槍
を携へて屋敷へ立戻りました新平、儀助、如何いたしませう、途方に
暮れた奥方松枝、何は然れ新平、儀助、このまゝには相成らぬ御苦
勞ながらこの趣きをお目附所へお届け申して置かねばならぬ、チヤ

ッど参つて検屍を迎へて下され、とありませぬ、そこでこの趣きを
お届けに及びますと、直様検屍の役人がお出張になりまして、見
届けの上は死骸は然るべく野邊の送りをせらるゝが宜からう、我々
は立歸つてこの趣きを主君へ申上げんと、そこで検屍の方々は引き
取られました、涙ながらに國次主従、野邊の送りをするに
ました、葬式を済して後は只お上りの御沙汰を相待ち居ります
る、立退くべしと誠に御沙汰には先づ屋敷を引拂うて何處へなり
五人は一先づ小紅屋爲助方へ引取ることにになりました、誠に爲助も
何うしたら可からうやらと實に途方に暮れまして、この時ばかりは
雀のお竹も能う刺りませなんだな、今更詮方ございませぬば主従
悴怒之助儀成長の後、恙なく仇を報いて本國へ立歸る節は國次惣左
衛門家督申付くるべしとのこと、これは餘程無理なこと、何か助
太刀の者にても遣はすに依つて首尾好く本懐達すべしとでもありませ
のならば上の情けでございます、女二人に未だ頭是なき惣之助

一文奴の新平、儀助、先方は兄弟ながら槍術の指南をする位もの、何うしても敵の討てやう道理はございませぬ、して見れば只最う困らせるとより他ございませぬ、爲助も黙然として、新平、儀助も只呆氣に奪られて居りましたが、松枝は屹度思案を定め、松枝のウ新平、儀助、兩人へエ……松枝、何時までも爲助の宅にも居られず、妾はこれより娘を伴つれ、兎も角も考ふる次第もあれば、些少なれどこの金子をお前等二人に遣はすから、此金を以て何なりとして過して給も、旦那のこの世に在すなれば、お前方二人は中間に稀なる忠義者、如何やうともして彼等二人は末は身の立つやうにして遣らねばならぬと、常々旦那の仰しやつたが、斯う云ふ不幸なことに、女の方で何とすべき力もなく、心の裡を察して給も、雨になり、涙を浮べて仰しやりました、新平、儀助も俱に少時は涙に暮れて居りました、儀助、オ、新平、汝、何うする、新平、乃公か、乃公は些と思ふ仔細もあれど、乃公のことは捨て置け、汝、何うする積りだ儀助、縦令身は粉に砕くとも、敵の所在を探ね出し、御無念をお吐きさ

せ申すが當然、併し新平、汝も知つての通り安藝の海田市に残した一人の老母、最う老年になつて在つしやるゆゑ、一遍會ひたいとは思ふけれども、ツイ、旦那様も御病氣のことゆゑ今日になつたがこれから故國へ歸つて母者の安否を問ひ、氣遣ひないと思つたらその上で又この小紅屋へ出て来て様子を聞き、何處へ、までもお跡を慕うて参ることにしやう、新平、ムウ然うか、そんなら汝、然うするか……モン奥様、貴女はこれから何處へお出でになりますか、存じませぬが、多分これより仇をばお報いなさる心底でございませうから、この新平奴は親もなければ兄弟もなく、只た獨身者でございませぬ、この新平奴は親もなければ兄弟もなく、只た獨身者でございませぬ、何處までもお供を申上げたうございませぬ、松枝、ア、能う云うて給つた、忝い、そんなら儀助、お前は親のある身ゆゑ、一寸も早う故郷の海田市へ歸つて給も、儀助、ヘエ、誠に奥様、道なりませぬ、でも、それぢやア暇を頂きます、併しこのお金子は私は能う頂きませぬ、松枝、イエ、持つて行つて下され、儀助、何う致しまして、貯めて置きましたか、給金、この間故國へ十兩送つて遣りませぬ、尙

だ五兩や七兩はござりますから、決してお心配のないやうに、刃に
 これから旅へお出ましになりませしたら一文の錢でも大切にござりま
 すから……松枝、誠に前は忠義な者、妾も嬉しう思ふわいのウ、備助
 へ、イ何を仰しやります、平常から旦那様なり貴女様、取るに足ら
 ざる一文奴を目を掛けて下されませした御恩報しも仕りませせず、お別
 れ申す私の心中、お察しなされて下されまし、左様なればこれにて
 お暇申しまする、是にて備助は一同の者に別れを告げ、安藝の海田
 市へと立歸りませした、跡に新平は「扱て奥様、貴女はこの新平がお
 察し申しませしたる通り、仇討をなさる御了備でござりませう、松枝、如
 何にも其方の言ふ通り、縦令屏弱い腕とは云へ、敵倉橋兄弟を討た
 いで措かうや、新平、左様ならこれより源助様の許を探ね、助太刀をお
 頼み申すと斯う致しては如何でござりませう、この時爲助は側に座
 り、最前よりの様子やアツと聞いて居りませした、爲助、何さ新平と
 んの言ふ所は大槪私の所存とは違ひないが、その源助様ぢやて、あ
 のお方の所在が知れて助太刀をして貰うだら、そりやア敵を討つて

どは手の中のもの自由にするも同じこと、なれどもその源助様は
 江戸の方とは分つて居れど、氏名は何と仰しやるやら、何と云ふ處
 やら分りませせん、話しに聞けば江戸の芝には町名さへ、源助町と云
 ふのがあるさうだか、八百八町の大江戸は將軍様のお膝下、源助と
 云ふ武家と聞いた所で、此奴ア新平とん、些と知れ難くからうと思
 ふがその邊は……新平、サア爲助さん、然う云やア然うだが、成はど
 源助と云ふ名で探ねては分るまいが、惣身惣刀流を遣ひなせる源助
 様と探ねたら、日本であの人一人よりあるまい爲助、イヤ成程、そり
 やアそれと違ひない、流名を以て探ねる日になれば、それからそれ
 と武藝者を便つて行けば分らぬことにはありませまい、こりやア新平
 さん、好い所へ氣が着いた新平、何と奥様、然うではござりませんか
 松枝、何さ新平の言ふ所至極有理、然ればこれより江戸表へ罷り越
 し、源助のを探ねるより致方はあるまい、是は主従は出立と
 云ふことに極まりませして、そこへに旅の用意を致しまして、斯く
 てその翌日と相成れば、切て其處までお見送り申しませうと、爲助

は惣之助の手を引いて、遂に當地を發足することになりましたが、
 總て安藝と周防の國境、小瀬川四十八阪と云ふ處へ掛つて参りまし
 た、何時まで送つて貰うても際限のないこと、これにて別れることに致
 さう、お前も宅には用の多い身上、少くも早う歸つて下され、爲助
 様、何處までもお供を致したうはござりますれど、御承知の通り、客
 屋の私、それでは誠に相済みません、がこれにてお別れ申します
 松枝、サア、遠慮なう引取つて下され、爲助、新平とんや、何彼の事は
 宜しくお頼み申します、新平、イヤ、必ず心配なされませぬ、爲助さん、
 何處までも私が氣を着けてお供を致しますから……、爲助、それでは坊
 さま、奥さま嬢さま、御機嫌好う……、と遂に此處にて袂を別つことに
 なりました、爲助は「ア、ア、お氣の毒千萬なことぢや、且つ源助とん
 望みお逃げなすつて一日も早うお歸り下されば可い、が、且つ源助とん
 の所在が早く知れば可い、が、ア、と案じながら、宅へ戻つて参りま
 した、然るにこれより日ならず致して源助は立派に打扮つて岩國へ

出て参りましたから、前申上げましたる如く、爲助は新十郎に歎いた
 次第でござりまする、切ても此方は國次主従、泊りを重ねて大阪へ
 對けて出て参りましたが、一兩日滞在なし、それより江戸表へ、と志
 し、路を急いで遣つて参りました、が、東海道を行きたいは希望で
 さいます、新平の案じましたのは、東海道を行つて萬一倉橋兄
 弟の者に會ひました時は、返り撃にならん、馬籠の驛、依つてこれ
 は路を一つ變へて、一度も通つたことにはなけれ、本曾の旅は九十九
 驛、淋しい街道と聞いて居るから、これを行けば氣遣ひなからうと
 思ひました、これは新平が餘り思ひ過したのでござりまする、所が
 段々と路を進みまして、馬籠の驛へ掛つて参ります、までは別段、こ
 れと云ふ變つたお話しもござりませぬ、馬籠の驛の長桔屋五兵衛と
 云ふ宿許へ泊りました、明日は馬籠峠と云ふを越さねばならぬの
 でござりまする、松枝、のウ新平や新平へ、奥様、何事でもござります
 松枝、明日は峠があるさうぢや、のウ新平へ、私、今そのやうな事
 を聞きました、が……、松枝、それでは妾も大分足も疲勞れましたから、

事そのこと明日一日は當家で逗留して、少し身体を休めたくは
 を越すことにしては何うであらう新平、何さま、それがお宜しうござ
 りませう松枝、それではお前も今晩は一盞飲んで緩容寝んで下され
 新平、イエ、私には道中の間は御酒は頂きたうはござりません松枝、イ
 エ、然うでない、何彼に就けてお前は遠慮深い、疲勞休めに一盞
 喫べて寝て下され新平、左様でござりまするか、有難う存じまする、
 併し奥様、長の旅路のこの道中、應どお疲勞れなすつたでござりま
 せう、お足に焼酎でも吹いてこの奴めが些とお擦り申しませうか
 松枝、イエ、それ程までには疲勞はしません新平、左様なれば今晩は
 お許しを蒙つて一盞頂ませう、そこで食事の際一杯飲んで主従室
 を隔で、枕に就くことになりました、何思ひけん惣之助は、ツカ
 くと新平の寢床へ出て参り惣之助、新平や、坊は此處で一所に寝たい
 新平、これはお坊さま何を仰しやいませ、貴方お母さまの處へお出
 でなさいませんければ、この新平は周防の岩國へ歸りますぞ、と
 申しませんと惣之助は、「堪忍ぢや、それでは坊は母様の處へ……」と

のまゝ惣之助は紙門を開けて母親の方へ参りました、新平、下郎の
 新平を慕ひませすも、能く、主従の縁の深きこと、後に思ひ當る
 こととございませす、扱てその翌日新平は目を覺し新平、オ、マア返
 留なさると聞いたゆゑ恐ろしく寝過して奥様に失禮を致した……へ
 エ、奥様、今日は御逗留と承りましたゆゑ、この奴めも大層寝過しま
 してござりませす、お變りはござりませんか、と問の紙門を開けて
 見れば此は如何に、松枝どのの手拭にて顔巻をなされ、顔色は眞蒼
 どなつて大層苦しい様子でございませすから新平、オ、ッ……こりやマ
 ア奥様何うなすつたのでございませす松枝、新平や、何うしたか宛然身
 体は水を浴るやうな心地がして、顛りに身体が痛んで身を起すこと
 もなりません新平、エ、ッ……ヤ、お待ち遊ばしませ、それはなかく
 捨て置いては宜しうござりません、とそこで新平はこの趣きを宿の
 主人にも申し入れ、早々醫者を迎へて治療を受けることになりませ
 する、醫者の申しませすには、「これは別段劇いことはござりません
 旅のお疲勞が出たのでございませすから、一兩日御逗留なすつて立掛

けて薬を召服ればお疲勞も忘れられ、然すれば以前の通りでござり
ます、御心配には及びません」と手軽く申して薬を置いて醫者は
引取りました、そこで新平はお君諸共藥煎じなごを致して看病いた
すこととございます、然るにお君は限りなく心配いたしましたして、
亭主の五兵衛と相談のうへ、程遠からぬ處に當國諏訪明神の支社が
ございます、これへ參詣なして願を掛け、一刻も早う母様の御病
氣をお癒し下されませうと、惣之助を伴れて口參を致しました
が、遂にこの處に七日ばかり逗留いたしませうと、漸う松枝色の
病氣は全快と云ふことになりました、新平へ誠意にこの上もない結核な
でお身体は普通になりました、新平へ誠意にこの上もない結核な
とでござります、さみ、それで妾はこれから惣之助を伴れてお參詣
に行つて來ますから、お前は跡に残つて明日は出立せねばならぬか
ら、それ、用意をして置いて下され、新平心得ましてござります、
そこで同朋打連立つて諏訪の支社へ參詣に出掛けました、驛を離れ
て二三町、土手路傳ひに參ります折しも、三名連れの無頼漢、話

しをしながら遣つて参りました、今お君の前まで参りますと、
立止まりながら、〇「モ、如さん、何處へお出でなさいませ、さみ、コレ
くお前方、戲事をするど爲にならぬぞ、〇「ハ、ハ、ハ、屋敷娘たな、
信濃の谷にやア珍しい美形、言葉の様子ぢやア遠國の者、殊に繁華
の地の女ぢやアない、併し頗る美しい容姿、サアさて、言はず
に乃公等の云ふ事を聞きなさい」と突然お君の手を取つて引寄せん
どする、惣之助は姉を捕へて淫がましき舉動に及ばんと致すを見て、
ぬぞ、惣之助は姉を捕へて淫がましき舉動に及ばんと致すを見て、
忽ち佩刀の柄に手を掛けて惣之助に、戲事をすると斬つて了ふぞ
〇「ハ、ハ、ハ、何を吐すかこの小倅奴、妨害さらすな」と足を上げ
て一人の曲者、惣之助の胸元を確と蹴ますれば、憐れや惣之助は土
手より下へ轉がり落ちました、これを見るよりお君は驚き「コレは
之助、怪我をして拾んなや」とその方に氣を奪られ此方を振り向く
途端、一人の曲者後方へ廻り、確乎とお君を抱きめました、お君
は振り解いて逃げんとすれど、屏弱き女の何うすることもありません

左に右するうち二人の曲者、右より左より立寄つて、矢度にお君をば抱き上げ一目散に走り出しました、土手の下から惣之助はこの体を見つて惣之助お姉さまを返せ、お姉さまのウー……呼べよ叫べよ子供供の悲しさ、急には土手へ攀ち登れず、下は軟かなる泥土でございませすから、思ふやうに上ることも出来ません、惣之助は漸う草の根を捉へ、土手を攀ちて上へ上つて参りましたが、早姉の姿は皆くれ見ゆません、子供のことなら何とする工夫も着かず、只茫然と土手に突立つて呆氣に奪られて居ります、所が宿許では餘り歸りが晩うございませすから、新平は實に氣が氣でなりました、新平奥様、嬢さまは例も倍もお掛りなすつて今にお歸りがございません、依て下郎は一應見て参りませう、松枝、それは御苦勞ぢやのウー、そこで新平は主より頂いたる紀念の一刀を佩用へ、一目散に路を急ぎ、土手へ掛つて方向を見れば此は如何に、泥塗れになつて突立つて居るは惣之助、新平、ヤアツ、坊様でござりませすか、惣之助、お姉さまは餘所の奴が擔いで走り居つ姉上さまは何うなされました、惣之助、お姉さまは餘所の奴が擔いで走り居つ

たわい新平、エ、ツ……チエーッ夫策つた、蟲が知らすか心ならず思つて居りましたが、今一足早くば暗々お姉さまを他手に渡しはせぬものを、してお坊様、悪者は何方へお姉上様を擔いで参りました、惣之助、この路を真直にあの畔路を行き居つたわい、新平、ヘエ、左様でござりましたか、それではお坊様、貴方はこれから一筋路の馬籠の驛、行燈の印しは桔梗屋五兵衛、最う貴方もその位いなことは能くお読みなさいませう、から獨りでお歸りなされませ、又お母さまにはこの新平の歸りますすまでは何事も仰しやりますなや、惣之助、よし、新平、氣を着けてお出でなされまし、新平はこれからお姉上様の跡を慕ひ、取戻して参りますから……と、言ひました、イヤ、今跡を逐ふたところが半時後居るとして見れば、勝手も知りぬこの街道、分りさうなことはなし、斯う云ふ矢先に又坊様に萬一粗相があつてはならぬ、殊に御發明なお嬢さまゆゑ、縫合如何なる者の手に扱つてはならぬ、所が、自由におなりなされませ、お嬢さまよりは大五百石の跡をお襲ぎなされ、この坊様、勿体ないがお嬢さまよりは大

事のお方、こりやア宿許へ立歸り、桔梗屋五兵衛を頼むのが第一なりと氣が着きましたから、そこで新平は惣之助を伴れ、そのまゝ宿許へ戻つて参りました。新平、時に御亭主、亭主へエ、新平、實は今これ、
 〱 斯様な譯で……亭主、エ、フ……それはマア大變なことでござりますナ、新平、それに就いて何とか工夫はあるまいか、亭主、イヤ、宜しうございます、それでは奥様ども御相談の上、何とか工夫を致しませうから……」そこで兩名は奥へ参り、この事を新平より話し、亭主の五兵衛よりも相談いたしますと、奥方松枝どのの氣も狂はんばかりのお驚き、少時は途方に暮れてお出で遊ばしましたが松枝、何とか亭主、工夫はあるまいか、亭主、先づ在下の番人にでも頼んで八方へ手分をして取調べるのが第一でござりますから、私はこれから直ぐ番人の方へ申込ませう、松枝、それでは御苦勞ながら、金子の入るのは願ひませぬから、何卒早う探して下さるやう……」とあります、そこで早速番人の手を以て取調べさせました、三里四方ぐらゐるは半日経たずに、その日のうちに調べて呉れましたが一向知れませんが、

方は新平でござります、新平、奥様、何ういたしたものでござりませう、松枝、斯ういふ時には女の妾、何と思案のしやうもない、新平、お前は男子のことでゆゑに、亭主、然るべきやう相談して給も、新平、左様なら私の考へだけを亭主と相談いたしませう……」時に御亭主、亭主へエ、新平、アツと此處で待つて居た所が何知れるか分らぬ、私等は心急ぐ身の上ゆゑ、これから江戸へ對けて奥様と坊様のお供をして行きませうがな、その尋ねて行く先方の處も分らず、又お屋敷も確とは知れぬ、何れ先方へ行つたら三日と五日は探さねばならぬが、探ね當つたらそれを廻して探さして居ることゆゑ、明日にも嫌さあゝして番人に手を廻して探さして居ることゆゑ、明日にも嫌さあゝして預かつて置いては下さるまいか、何程入費が入るとてもそれは當方で勘定を致すから……」亭主、エ、イヤ、畏りましてござります、新平、その上此方から遣した手紙が着したら、使を以て迎ひに来てと云ふものか、但しはお前の方から確かな者にでも送らして届けて

呉れるものか、それはその時のことにしやう亭主「イヤ、委細承知い
たしましてございませう新平「そんなら然う云ふ事にして一日も早く江
戸表へ行きたいから明日出立しやうと思ふ、就ては醫者の薬禮、且
つ明日立つまでの宿料萬端、何卒勘定をして下され亭主「委細承知い
たしました、何と申して宜しいやら、お氣の毒さなことでござい
ます新平「何うも私の方も右思左考して實に途方に暮れました亭主「イ
ヤ、御有理でございませう新平「何と奥様、それより他に致方はござり
ますまい松枝「如何にもお前の言ふ通り、それでは新平、お前に渡し
てある册巻からお金子を出してそれ、支拂をして下され新平「畏り
ました」そこで醫者の薬禮その他當家の支拂を済せました、その
翌日に相成りますと、馬籠の驛の桔梗屋五兵衛方を出立に及びま
したが、愈々これより馬籠峠の返り撃、忠僕新平血の涙と云ふお話
に引き移ります。

第十回

扱ても國次主従は馬籠の驛を立ちまして、新平は兩搭を擔ぎ、右の
手に惣之助の手を引き、奥方松枝は杖を突きながら、峠へ對けて掛
つて参りました、懸て路の十四五町も登つたかと思ひますと、又
もや顔に皺を寄せ、宛も苦しげなる奥方の様子新平「奥様、又痛みま
すかな松枝「ヤア新平、何うしたものでかッッ、お腹が痛んでなりま
せん新平「それは困りましたな、お待ち遊ばせや、大阪で坊様はお越
持ゆゑ奇應丸と云ふ丸薬は求めて参りましたが、貴女のお癪氣のこ
どにはツイ氣が着きませなんだ、マア兎も角もこの峠の絶頂まで参
りましたら、宿もござりませうし茶店もありませうから、それまで
お出でなされて緩容お寝み遊ばしませ、先づそれまでは斯うなすつ
てお出でになるが宜しうござりませう、少時お待ち遊ばせや」と兩
搭を下して傍の木を枝を一刀にて伐り拂ひ、尖の細き處を又伐り拂
ひまして新平「ヤア、奥様、この木の枝は真直でござりますから、こ
れを杖にして二本杖にてお登りなされませ、然すれば少しはお樂で
もござりませう、兎も角も峠まで御辛抱を願ひまする松枝「ホッ、こ

へ登つて参りませうと、此は開も如何に、店も何にもございません
 新平「ア、困つたな……なる程、それも然うかい、東海道は年々歳々
 武家の往來の絶に間なけれど、この木曾街道は時季があつて、間に
 は武家方の通行はないから、それに應じて商人も通るまいし、なる
 程店なんぞこんな處へ出して居ても飯が喰へないから、それで何に
 もないのど見ゆる、奥様、斯う遊ばしませ、此處で貴女は斯うお腹
 みなさつて、私の指はまひしでござりますから、些とお押へ申しま
 したら又少しは治まりも致しませう、坊様や惣之新平や、何ぢや
 新平「貴方は其邊で遊んでお在で遊ばせ、お怪我をなすつてはなりま
 せんぞ、新平はお母様のお腹を些とお按り申しませうから……惣之
 然うか」と言つて惣之助は、四邊を見れば廣々と致しその景色言は
 ん方なく、子供心の嬉しげに、彼方を眺め此方を眺め、飛び來る小
 鳥なぞを見ては喜んで居ります、新平は兩指から大きな風呂敷を
 出し、これを二ツに折つて大地に敷き、衣類を丸めて枕となし、奥

方を仰向けに寝かして痛み處を押へます、松枝「新平、誠に快い心地
 でありませう、新平「此處でござりませうがな、奥様、松枝「そこへ
 ツと差込んでならぬわいの、新平「イヤ、御無理もござりませう、然
 もなうてさへ御心配の所へ、嫌様のこの度の仕合せ、併し「ア何事
 もお氣にお掛け遊ばすな、程なく江戸へ参つて源助様の所在を探ね
 飽くまでも源助様を探ね當りませう、敵は言ふも更なりお嬢さまのことも、
 もござりませんから、何事もお案じなされませぬやう……氣を慰め
 て接りながら不圖向方を打見遣りませうと、麓の方に田家疎に百軒
 餘りも見ゆませう、新平「ア、村落か驛かは知らねども、あれだけ人家
 のある處なら、萬更薬を賣る家の一軒ぐらゐはないことばあるまい
 奥様は、新平は向方に見ゆる村へ参り、兎も角薬を探ねて参ります
 れば、貴女は此處にて……コウツと何うしたら宜からう……オウ然
 うぢや、貴女のこの懐剣を斯うお持ち遊ばして、奴めはこの帯の上
 縮で斯うして後方から前へ持けて痛む處をヤツと斯う絞めませうぢ

や「奥方はグツと身を縮めて堪へながら松枝「ホッ」に新平「これは能
う締つた、これで大きに凌げます新平「そこで雄尾の處へこの懐劍の
柄を當がひまして、この鞘をば兩搭の棒へ斯う生がひ、ソレ奥様、
痛みましたらこの兩搭の棒を力に任してグツとお持ち遊ばします
と、少しは痛む處が治まりませうがな松枝「ホッ」にこれは好い工夫
やのウ、斯うしたら新平、少時は辛抱して居られます新平坊様、
若しお母様がお痛みなされましたら、後方へ来てお背中なりと接つ
てお進げ遊ばせや、惣之、新平は何處へ行くのぢや新平「新平奴はあの麓
に見ゆる在所まで参り、薬を求めて参りますから……惣之、早う歸
つて呉れよ新平「へエ、直きに戻つて参ります、そんなら奥様、
少時御辛抱遊ばしませ松枝「新平、其方が側に居らぬと心淋しう思ふ
ゆゑ、何卒早う戻つて給れや新平「へエ、直ぐ歸つて参ります」
と佩刀の柄を引握り、三度笑を被り、そのまゝ新平は畳を堪へて
一散に、麓へ指して駆けて参りました、此方は宛然灸を堪へる如く
棒を提へて痛み處を懐劍の柄にて押し、風呂敷の上に座して辛抱し

て居ります、折から向ふの方より二人逆の處無僧、サッ／＼登つ
て参りました、甲「何と清風殿、暑いことではござりませんか、乙「如
何にも清月、来る年も来る年も暑さかなとやらで、堪らぬな、甲「ヤ
ア見さつしやい、何うやら向方に婦人が俯向いて居るやうな様子
乙「ホ、ウ、横顔を見れば何となく輝かな婦人ぢや、甲「サア何うや
ら容姿の美しい婦人、旅の憂はらしに何うでござる、一ッ弄んで遣つ
ては……乙「清月、其方は折々妙なことを申す奴ぢや、が、これも
又一層面白からん、幸ひ四邊に人も居らねば……甲「兎も角参りま
せう」とツカ／＼と側へ参り、甲「コレお女中、何處ぞ痛むかな」松
枝は俯向きながら松枝「持病の瘧氣が差起り、非常に迷惑いたして居
ります、甲「それは定めてお困りならん、我々は御夢想の鏡を所持
して居るから、それにて瘧を治めて進せやう、少しの間辛抱あれ」
とグツと後方から引抱へ、懐中へ手を差入れ、既に淫がましきこと
に及ばんとする途端の表裏、松枝は驚き飛び退きさま、天笠の内な
る顔を眺め、松枝「ヤ、ツ、其方は敵の倉橋段藏……段藏「何ッ……」扱て

田宮新十郎

へ、イケ面倒と力に任せて惣之助を蹴倒しますれば、屏弱い子供の
 惣之助、思はず木の根に躓いて、傍の谷間へ轉がり落ちました、こ
 れを見るより母の松枝「ヤレ惣之助、危いぞや、木の根を捉へて怪
 我して給るなや」と燥る處を附け込んで、ヤツと一聲諸共に、忽ち
 倉橋段右衛門、松枝の乳の下グサと突けば、急所の痛手に堪り兼ね
 アツと言ひさま倒るゝ向方、右の手に笠を捉へ、左の手には鋸下を
 振り、駆けて参つた一人の奴、段蔵、清風殿、段右、何だ清月、段蔵、何うやら
 向方より来る奴は百文流の連中らしい、見附けられては一大事、若
 し源助にでもありもせば、我々二人では到底敵はぬ、お逃げあれ
 段右、オウ合點だ」とそのまゝ、二人は早くも馬籠の方へ逃げ出しまし
 た、左様なことゝは露知らず、薬を求めて毒蛇に出遭ふとはこの事
 でございませうか、新平、マア、奥様、好い盤梅に陀羅尼助を買ひ求
 めて参りませう、癒には第一、これを召服りませう、新平、マア、ッ……
 治まりませう、漸う側へ來つて見ればこの有様、新平、マア、ッ……
 こりやア何うなつた無残の御最期、チエーッ奥様のいのウ、何奴が

田宮新十郎

は汝ア國次の女房松枝であつたか、松枝、夫の敵其處動くな、云ふより
 早く病氣も忘れて立上り、持つたる懐劍抜く手も見せず、段蔵に斬つ
 て掛れば、思ひ懸けなきことなれば、受損したる段蔵は、眉間に少
 々の傷を蒙り、後の方へ飛び退る、この時兄の段右衛門、早くも腰
 なる袋のうちより懐劍取出し引き抜いて、段右、國次、惣左衛門の女房松
 枝とあるからには、俱に冥途へ遣つて呉れん」と鋭く斬り込む、太刀鋒
 を女ながらも一生懸命、心得たりと受け止めて、互に争ふ必死の有
 様、この時まで向方の方にて我れを忘れて遊んで居りませしたる惣之
 助、斯くど見るより飛び來り、惣之助、刀流の一刀引き抜き、惣之、マア、汝
 れは隣りて段右衛門、段蔵、父上の敵覺悟せよ」と斬つて掛りまし
 た、段蔵は、流るゝ血汐を押へながら懐劍を以て惣之助と闘はんぞ致
 と、段蔵は、流るゝ血汐を押へながら懐劍を以て惣之助と闘はんぞ致
 しまするが、誠に困つたのは長が利かず、先方は小さく此方は大き
 く、至許ばかりを狙うて参りませすから、殆んど段蔵持て餘し、その
 上、血汐は眼に這入つて頻りに困つて居りませす、折から段蔵不圖者

上げて江戸の地へ参り、晝夜を別たす探ね歩き、源助様に出會ひな
ば、仇を報う時節もあらう、若や國次のお家がこのまゝ立行かぬこ
とならば、奴も諸共この谷底で、命を召させたべ給へ」と忠義に練
へし奴の新平、刀を後方に斜達に廻し、此方の谷間を臨んで、此處は
以の聲を便りに思ひ定めて飛び込みました、忠義の徳にや、此處は
人も通はぬ谷間だけに、幸ひ命は助かりました、何故なれば、人の
通ふ谷なれば土が固うございますから、ドンと飛び込んだ時に、武術
の心得のないものは必ず前へ倒ります、武術の心得のあるものは
後向けに飛びます、所が新平は槍術の辨へは少し命を落とすやうなこ
はございませぬ、所が新平は槍術の辨へは少し命を落とすやうなこ
術柔術の辨へはございませぬ、なれども此處は又朽つた上に新らし
前に天竺木に木葉が落ち、落ちたのが朽つて又朽つた上に新らし
いのが落ち、突然布目の粗い蒲團を敷いてあるやうな梅式になつ
て居りますから、身体に痛みはございませぬ、然る代り足を深く踏ん
込んで了ひました、向ふを見ると彼は四五間隔たつた處に、惣之

新様なことを致しましたか、重ねくの不幸の段々……又お坊様は
何處へお出でなされたか、アア狭いやうでも五百石、周防の岩國
吉川家の御指南番、國次惣左衛門様のお坊様、廣い處でお遊ばせ申
した例があるゆゑ、在所路の厭ひなく、山の中をば駆け廻つてお在
でなさるのか、イヤお年が行かねば無理はなけぬぞ、こんな事も御
承知なく、何處へアアお出でなすつたのか……お坊さまいのウー
之助様のウー……「忠義に疑つたる奴の一念、一生懸命に金切聲を
立て、と呼び立てますれば、遙かの谷間に方りまして、此處に居るウ
」と云ふ聲が微かに聞かれました、新平ヒヤアッ……扱ては坊様は
間へ轉がり落ちなすつたか、こりや何うしたら宜らうやら、奥様は
この場に在つて無残の御最期、お坊様は斯様な有様、心は二ツ身は
一ツこりや何とせん何うせうぞ、お坊様も佛もない世の中、オウよし、
最上この上は是非がない、死なば主従諸共に、魂魄この土に止まつ
て、敵の奴等兄弟を、祟殺さいで惜くものか、八百萬神昭覽あれ、
奴が微忠を憐れみ給ふことあらば、切て坊様一人だけなりと、助は

助は足を踏込んで腕いて居りましたが惣之、オ、新平か新平坊様、ア
 一ア有難い、首尾好う主従命が助かりました、忝い、併しこれマア
 何うすることもありません、漸うのことに無理から歩んで惣之助
 の側へ来り、坊を上げ抱き上げ、少し固さうな處へ伴れて参りまし
 たが、マア斯うなりますると又上へ登ることを考へねばなりません
 彼處此處を見廻しますると、斜阪になつて何うぞ斯うぞ足掛りの出
 来る所は上は出張つて居りますから、蟲齧や小鳥とは違うて然う
 云ふ處へは行けません、又上の出張つてない處は足掛りがございま
 せん、何とすれば宜からうと思案に暮れて新平は、不圖上の方を
 眺めますれば、一ツの出張つた木の根より、數年搦んだ藤蔓、下の
 方へ天然に垂れて薬玉の如くになつて居ります、手を伸して捉ら
 うと致しまするが、一尺餘り足りません、そこで新平は此度思案を
 なし新平坊様、貴下の足を捉へて新平があゝの藤蔓の垂つて居る處へ
 差上げますから、貴方は藤蔓をお捉へなされませ、それで新平が手
 を放しましたら一生懸命に藤蔓を捉へてお下りなされませや惣之、よ

しく、新平、必ず手を放してはなりません、惣之、オウ承知した新平、土
 さへ固ければ新平が飛び上つて取附きますが、何分この軟かな處
 では足に力を入れることは出来ませんから……素より強力の新平、
 そこで惣之助の兩足を捉へてグイと上へ差上げますと、十分惣之
 助の手に届きました、惣之、新平や、掴んだぞ新平、必ずお手を放しな
 されませるな、そのまゝ新平は手を放しますと、忽ちのうちに藤
 蔓の根は締つて来ますから、ヅル、伸びて惣之助は振下つて来ま
 した、新平、マア占めた、これにて主従は藤梯子、斯うして上れば大
 丈夫、と傍の岩の端へその藤蔓を巻き附けて置き、惣之助をば背に
 負ひ、佩刀は惣之助の背の中へ提緒を以て括し付け、惣之助の上締を
 解いて確乎と連着に背負ひ、頓て岩角に巻き附けてある藤蔓をば解
 き、向方の藤蔓を取つて此方の藤蔓と結び合はせ、一段々結び着
 けては腰を掛け、漸う主従はエソヤヲ辛と五六間上つて参ります
 と、何分二人の身体が重量となりますから、七八間垂下つて参り
 ました、エ、イこれでは死ぬまで上れる氣遣ひはない、と新平は途

方に暮れましたが、漸う日の暮れ方に至りまして上へ攀ち登りました。然るに牙へたる秋の月、新平「アア坊様、疲勞れなすつたござりませう、新平奴も身体が利かぬやうになり、泣くにも泣かれぬことわざりませう、お坊様、この通りお母様は他手に掛つてお果てなされました、お母様を殺したのは誰れか御存じはござりませぬか、惣之「新平や、お母様を斬り居つたのは、隣りの段右衛門、段藏ちやわいの新平、エ、ソツ……重なる遺恨の敵奴が……して何のやうな姿を致して居りました、惣之「虚無僧になつて居つたぞよ新平、ソツそんならこの乃公が、九折坂をば急いで薬を買ひに行く時に、必き定出會うたあの虚無僧、切ては敵兄弟にてありしよな、それと知るなら薬を買ひに行くのではなかつたに……イヤ、縦合この新平が居たとしても、彼奴等二人で来た時には、到底命は助からぬ處であつた、マア、可いわら、仕方がない、坊様、少時お待ち遊ばしませや、新平が暴いことをすると必ず思召します、このまゝ奥様の死骸をこの處へ捨て置きまして、鹿や鳥の餌食とさせます、は勿体至極

もないことゆゑ、奥様、御免遊ばして下されまし」と一刀スラリと抜き放ち、涙ながらに松枝の首を斬り落しました、頓て遺骸は傍の谷間へ投げ込みました、斯て其邊の小松の根をば取落しある懐劍にて土を穿ち、その中へ松枝の首級をば葬り、上より土を掛け、手頃の石を持つて参り、そのうへへ控乎と載せ、兩搭のうちより漆器の懐中水香を取出し、二三町の谷間へ下りて参り、金氣はないかと飲んで見て、頓て水をば汲み取つて参り、新平「ア坊様、貴方も一口召喚れ、お坊様、貴下も御回遊ばしませ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、この世に留まり給は、お坊様の蔭身に添うて、一日も早く源助様のお行方をお知らせなされて下さりませ、斯うして置けば奥様のお首級を、猪狼の來つて掘り出すやうなこともござりませぬ、坊様、今この新平が申すこと、能うお聞き遊ばせや、これから江戸表へ参つて源助様のお行方を探ね、助力になつて頂いて、敵を取つて歸參が叶ひ、貴方も周防の岩國へお歸り遊ばし

た後以前の通りに立派にお家も立つことになり、主公のお供を遊ばして江戸表へお出でなされましたその時は、往き掛は主公のお供で自儘にはなりません、歸途の際にお暇をお貰ひなすつて、この木曾街道をお通りなされ、この松の根に置きあるこの石は貴方の母御の紀念の標し、最うこの新平奴は今年が丁年四十二歳、長う生きたても七八年、若しこの新平が死亡しましたも、必ずお忘れ遊ばさず、此處を母様のお墓所と思召せや、言はれて惣之助、雅心に目に涙、紅葉のやうな手を合はせ、涙ながら念佛を唱へました新平、サアこれから向方は貴方と私と僅た二人の旅の空、併し貴下もお疲勞れなされたのでござりませう、お待ち遊ばせ、斯う致しますから……」と兩搭の前なる品物を後の方へ残らず詰りまして前の方を空と致し、それへ一枚の衣類を敷き、その上へ惣之助を座らせまして新平、斯うして擔いで行きませすれば貴方は其處でお寝みなされた處が氣遣ひな

し、ソレ坊様、これからこの峠を越しませう、どつこいサ」と肩をに入れて擔ぎ上げた新平は、「前はお主の若旦那、後はお主の紀念の荷物、重い荷物の兩搭を、軽い奴の、新平が、ソレ引擔いで行かうか……」と芝居なれば木頭で宜しく幕でござりまする、そのまゝ新平は馬籠の峠を擔ぎ下りましたが、これより遂に江戸を志して急ぎに急ぎ、追々木曾路を後に中仙道へ掛つて参り、遂に七月二十五日に板橋へ着し三河屋忠七と云ふ宿許へ泊りました、所がこれから江戸まで最う二里と聞きましたゆゑ、大きに安塔の思ひをなし、兩搭を宿へ預けますると直ぐ土蔵へ藏ひ込みました、そこで新平は惣之助を伴れて湯に入り、それから續いて夕飯と云ふことになりましたが、その際一盞燗けて貰ひ新平、お坊様や、明日は新平と貴方が兩搭を突き合つて轉がりましては、江へ這入れますぞよ、奴も聞いた許りで見たことはござりませんが、江へ云ふ處は好い處、サア明日は愈々新平と貴方は江戸へ参るのでござりまする、將軍様とて武將のお在で遊ばすお膝下、

子の嬉しげに、好い處と聞いてニヤ／＼笑を含み喜んで居ります。新平「サア貴方も一盞御酒をお喫べなされまし。惣之、新平や、そんな辛いものは坊は厭ぢや新平「イエ／＼、これを召喚りまするとな、疲勞が休まつてグツと寝入れますから……」とそこで惣之助にも盃に半分は酒を飲まし、後の残りも自分が飲みました、尤も金子は奥方より豫て預かつて居りましたから、路用に不自由は聊かもございませぬ。居眠る所の惣之助を、聽て傍の寢床へ入れ、自分も食事を終りますると「ドレ、それで乃公も寝るとしやう」とそこで佩刀を枕頭へ引付けて、供に枕を並べて寝ることになりましたが、直ぐに惣之助は新平の手を枕にしに來ますから、新平は左の手を坊の頭の之へ遣り、抱きかゝへたまゝ寝顔を眺め「ア、ア、能く／＼主従の縁のあるのか、坊ど乃公とは深い中、これを思へば馬籠の驛で、夜半に乃公の寢床へお出でなすつて、新平と寝るのぢやと仰しやつた時、お母様の處へお出でなさらねば新平は周防の岩國へ歸りますと云つたことがあるが、矢張り蟲が知らしたのであつたか思へば／＼

お痛はしや」と新平は幼主の顔を打眺め、涙に暮るゝ折しもあれ、ヤン／＼と新平は起き上り、寢て居る惣之助を揺り起し、枕頭にある惣之助の佩刀、寢衣の上から坊に差させ、己れも一刀佩用へて、突然支へて降ることならず、裏の梯子へ來て見れば、早や泊り客一杯に支へば、自由にならず、斯ては果しと見るうちに、隣りの宅より出た火なれば、早や二階の壁へ火は炎々燃ゆる、南無三大事と新平は裏窓の處を蹴破つて、そのまゝ屋根へ飛んで出で、坊を抱いて裏を見れば、大勢の人々は慌て狼狽さ、土蔵の目塗上をそれ何よど、右往左往に走せ廻る有様、その混雑容易ならざることにございます、悲しいことは新平は、周防の岩國邊に住んで居ましたもの、火事なぞ云ふものは三代前に向方の宅の屋根が燃わたりたものでございます、以前に火事と云ふものがあつたげなと云ふやうなものでございます、から物の用には足りません、然るに新平は一生懸命、斯くては果て

しと惣之助を抱へながら、裏庭の處へ思ひ切つて飛び下りました。惣之助に怪我をさせまいと思ひましたから、惣之助を放した途端、思はず眼突いて石燈籠にて脾胃を打ち、そのうち裏より駆け来る火消の銘々、江戸に近い處なれば、氣轉の利いた者數多あり「コレ泊り客の銘々、怪我をさしてはならぬ、短くつても佩刀を差して居るのは武家の子供に違ひない、ソレ助けろ」と手車で惣之助を助け、漸う三家河屋の裏の廣場へ伴れ出しました。そこで惣之助は何が何うやら譯分らず、ガヤ／＼と彼方へ迂路／＼此方へ迂路／＼して居りましたが、早やそのうちに兩三軒ばかりの類焼にて全く明方に至つて鎮火いたしました、所がそのうちそれ／＼迎ひに来る人もあり、焼け出されたり、火事だ／＼と彼方へ迂路／＼此方へ迂路／＼して居りました。未刻にも相成れば腹は減るし新平の影は見えず、子供心に悲しうなつて参りましたして「新平やーい、新平やーい」と泣き出して悲しうな

居ります、然るに七月二十六日は板橋の愛染宮の縁日でございませうから、これへ参詣の方々と見ね、深編笠の武家三人、何れも帷子の上より蜻蛉の羽根に等しき羽織、夏袴夏足袋、福草履を穿き、大小立派に佩用し、甲御同役、昨夜當處が焼けたものと見えます。乙御意でござる、ア！不憫さうに宿許でござるな、定めて泊り客は困つたでござらう、甲然れば、江戸近い處の者なれば然のみ慌ても致しませぬ、遠國から来て居る者等は周章狼狽したことでござらうが、不憫なことござつたわい……惣之助、新平やーい……一、人の武家「ア！コレ／＼小兒、泣くな／＼」と不圖御覽なすつたに、供の者に逸れたのぢやな、オ、よし／＼心配するには及ばぬ、我が々が助け取らせ程に、吉川家の臣、國次、左衛門の伴惣之助、當年十歳……甲、ホ、ウ、能く分るゝ惣之助は不圖眺めませれば、向方の仁の佩刀は、何れも覺ゆるある惣刀流の装へなれば、惣之、ヤ、ツ

源助殿か「甲イヤ源助ではござらぬ」これ聞いて他の兩名は驚き
ました。が、一人の武家は更に驚きませなんだが、そもこの仁は何人
でございませうか、チヨイと一息休れて次回に伺ひませう。

第十一回

扱て只今惣之助に出會ひましたるは別人ならず、水戸の藩士田宮寛
八郎、朝比奈彌太郎、安島帶刀の三名でございます。安島と朝比
奈の兩人は何が何うやら更に相分りませねど、田宮は豫て伴新十郎
から聞いて居りますから、そこでそのまゝ惣之助を伴れて板橋の本
陣へ出掛けて参りましたが、寛八御兩所方には何卒お先へお引取り下
され、身はこの者を捨て置き難い次第がござるから……彌太「イヤ
ヤ、その儀は我々とても別段急ぐ身上にあらす、何う云ふことかは
知らねども、俱々立會うて然るべきやう計らひ申さん寛八「それでは
お附合ひ下さるか彌太「如何にもお附合ひ仕らう」そこで先づ惣之助
に食事させ、驛役人を呼び寄せて取調べて見ますと、全く三河

屋の庭の石燈籠の側に一人焼け死んで居るものがございまして、死
亡つて居るものか但しは息があるか更にその邊の所は相分りません
どありませる寛八「ム、然らば兎も角も伴れ参れ」どあつこれより
戸板に乗せて揺れぬやうにして伴れて参りましたが、惣之助を呼ん
でこれではなにかと見せませると、聊か石燈籠にて押へて居ました
る處だけ見覺ぬのある衣類が残つて居ります、それと見るなり惣
之助は「新平やーい新平やーい」と泣き出しました、扱てはこの者に
違ひないと思ひましたゆゑ寛八「これはこの小兒の下部であるらしい
から何卒氣の毒ぢやが問屋の者共に、四名の所は八名掛つても構は
ぬから成るだけ揺れぬやうにして小石川水戸のお館まで伴れて来て
呉れよ役人「委細承知いたしました」そこで惣之助を駕籠に乗せ、新
平にはそれと手當をして伴れ歸ることになりまして、駕籠で立歸つ
て参りますと己が長屋へ擔ぎ込ませ賃錢を拂うて人足は還し、兩
人はそのまゝ自分の長屋へ泊り置きまして、寛八郎は早速この趣を
主君光剛卿へ言上及びました、豫て新十郎が遣はしましたる書

面^{おも}の趣^{おも}きは申^ま上げてございませうから、そこで光^{あき}圀^{くわん}卿^{けい}のお手^て許^{もと}より恭^{こう}
 見^みることもになりまして、一命^{いっめい}には別^{わか}れぬ、愈^い々^々新^{あたら}平^{へい}を診^{しん}察^{さつ}させて
 て、二人^{ふたり}の醫^い者^{しや}は詰^つめ切りまして、服^{ふく}薬^{やく}塗^ぬる種^{たぐ}々^々手^て當^{あた}り及^{およ}びまし
 たが、何^{なに}にしろ三^{さん}十^{じゅう}五^ご萬^{まん}石^{せき}三^{さん}家^けの御^ご一^{いつ}家^けの者^{もの}の一念^{いっげん}、小^こ兒^にながら
 も、君^{きみ}の御^ご仁^に慈^じなる思^{おも}召^めしと、田^{でん}宮^{みや}一^{いつ}家^けの御^ご一^{いつ}家^けの者^{もの}の一念^{いっげん}、小^こ兒^にながら
 も、危^{あや}く思^{おも}はれし新^{あたら}平^{へい}も秋^{あき}の末^{すえ}に至^{いた}つて全^{ぜん}快^{くわい}に赴^ききました、初^{はつ}めて源^{げん}助^{すけ}は當^{あた}り
 入^い郎^{らう}は一^{いつ}伍^ご一^{いつ}什^じの物^{もの}語^ごり致^{いた}されまして、初^{はつ}めて源^{げん}助^{すけ}は當^{あた}り
 若^わ旦那^{だんな}は田^{でん}宮^{みや}新^{あたら}十^{じゅう}郎^{らう}高^{たか}と云^いふこと、分^わりなりました、又^{また}新^{あたら}平^{へい}よりお上^{かみ}に願^{ねが}ひ
 乞^こひ、並^{なら}びにお君^{きみ}の身^み上^{かみ}の怒^{いか}り返^{かへ}す、くも不^ふ埒^らな奴^{やつ}は倉^{くら}橋^{はし}兄弟^{けい}、
 寛^{かん}八^{はち}郎^{らう}も或^{ある}ひは歎^{なげ}き、或^{ある}ひは怒^{いか}り、返^{かへ}す、くも不^ふ埒^らな奴^{やつ}は倉^{くら}橋^{はし}兄弟^{けい}、
 縦^{たて}令^{しやう}新^{あたら}十^{じゅう}郎^{らう}が道^{みち}中^{ちゆう}にて敵^{てき}に廻^{まわ}り會^あはずとも、我^{われ}れよりお上^{かみ}に願^{ねが}ひ
 申^まし、乾^か度^ど草^{くさ}を分^わつても吟^{ぎん}味^みなし、仇^{あだ}は報^ははせて進^{しん}せるから夢^{ゆめ}々^々心^{こころ}
 配^{はい}あるな、又^{また}お君^{きみ}の所^{ところ}在^ありもそのうち相^あ分^{わか}るやう計^{けい}らうて得^えさせるか

ら、我が長^{なが}屋^やにて緩^{ゆる}容^{ゆる}と時^{とき}節^{せつ}を待^{まち}たれよ、就^{すな}はては汝^{なんぢ}の忠^{ちゆう}心^{しん}は實^{じつ}に感^{かん}
 ずべきことである、身^み体^{たい}の全^{ぜん}癒^いを待^{まち}つて改^かりて我^{われ}が閑^{かん}暇^{げま}には武^ぶ術^{じゆつ}を
 教^{しやう}へて遣^{つか}はするから、一^{いつ}心^{しん}不^ふ亂^{らん}に武^ぶ藝^ぎの稽^{けい}古^こを致^{いた}すべしとあつて、
 この趣^{おも}きを光^{あき}圀^{くわん}卿^{けい}へ言^い上^あげ及^{およ}びます、主^{しゅ}君^{きみ}は深^{ふか}く新^{あたら}平^{へい}の忠^{ちゆう}義^ぎの
 程^{ほど}をお感^{かん}じあつて、遂^{つい}に新^{あたら}平^{へい}に目^め通^とりを許^{ゆる}すと云^いふことになりまし
 た、勿^なれ休^{やす}み極^{ごく}もな、天^{てん}下^げの副^{ふく}將^{しやう}軍^{ぐん}の水^{みづ}戸^こ公^{こう}にお目^め通^とりの出^で來^{きた}たと云^い
 ふのもこれ全^{ぜん}く忠^{ちゆう}義^ぎの徳^{とく}でございませう、扱^あつてそのうち新^{あたら}平^{へい}も壯^{さう}健^{けん}
 の身^み体^{たい}どなりまし、日^ひ々^々愈^い々^々之^の助^{すけ}と俱^くに田^{でん}宮^{みや}の長^{なが}屋^やに在^あつて武^ぶ
 術^{じゆつ}に心^{こころ}を委^{あづ}ねて居^ゐりまし、お話^わし轉^まつて此^{こゝ}方^はは田^{でん}宮^{みや}新^{あたら}十^{じゅう}郎^{らう}でござ
 いませう、岩^{いわ}國^{くに}を立^たち出^でなした、廻^{まわ}り話^わし轉^まつて此^{こゝ}方^はは田^{でん}宮^{みや}新^{あたら}十^{じゅう}郎^{らう}でござ
 した、圖^ずらすも市^{いち}中^{ちゆう}にて星^{ほし}野^のは聞^きき拾^{ひろ}つてに尾^お張^{ちやう}領^{りやう}の内^{うち}は新^{あたら}十^{じゅう}郎^{らう}の物^{もの}語^ご
 りを致^{いた}すれば、星^{ほし}野^のは聞^きき拾^{ひろ}つてに尾^お張^{ちやう}領^{りやう}の内^{うち}は新^{あたら}十^{じゅう}郎^{らう}の物^{もの}語^ご
 し、この地^ちに留^{とど}まつて居^ゐれば、星^{ほし}野^のは聞^きき拾^{ひろ}つてに尾^お張^{ちやう}領^{りやう}の内^{うち}は新^{あたら}十^{じゅう}郎^{らう}の物^{もの}語^ご
 ら、美^み濃^{のう}の國^{くに}は石^{いし}津^つ、松^{まつ}平^{へい}攝^{せつ}津^つ守^{しゅ}殿^{でん}の御^ご領^{りやう}分^{ぶん}地^ちまでも手^てを入^いれて探^{たん}

して呉れまされたが、更に敵の手掛りはございませぬ、然るに田宮は
 岩國にあつて神に誓ひし言もありますから、星野の待遇を断絶し相
 變らず非人の妾にて大洲觀音の裏手に起居をして居りますから、
 密かに星野よりこの趣きを傳へました、そこで今はこの地に在つて
 も無益、後日江戸にてお目に掛らんと約を結んで星野に別れ、追々
 東海道筋を吾妻の方へと遣つて参りましたが、圖らず遠州金谷に於
 て暫く足を留め居ります、不圖大井川にて夕方二人の虚無僧
 に出會ひました、●確かに敵倉橋兄弟と認めましたから、直ちに跡
 を追駆けました、悲しいかな先に渡しを越され、跡に尾いて渡ら
 うとする際、松平伊豆殿、公儀臨時御用のお急ぎに就き川止めを
 ひ、一足の遠ひにて跡を逐ふことならず、そのうち日も暮れ果て
 了、ひましたから、翌日を待つて急ぎ大井川を渡つて跡を逐ひました
 が、最早影も姿も相分らず、無念ながら敵兩人は取逃すと云ふこと
 に相成りました、そこで詮方なく當地を發足いたし、遂に伊豆の國
 は三島の驛まで出て参りました、今三島の明神前まで参りますと

路の傍に一人の宿引女、恥かしげにイんで居ります、何うやら見
 覺ぬのある女なりと、懇々見れば此は如何に、紛ふ方なき國次の娘
 のお君、若しや人違ひにはあらざるやとイんで様子を見れば、先方
 のお君も不思議さうに新十郎の姿を打眺め、互に少時見合つて居りま
 した、新十郎の方より聲を掛け、新十郎の女は周防岩國の國次惣左衛
 門殿の娘、さき女ではござらぬか、言はれて女は打驚き、「扱ては貴
 郎は源助様でござりましたか、お懐かしう存じます」と新十郎の
 側へ寄りカッどばかりに泣き出しました、新十郎何故斯る姿に相成りし
 かは知らねども、仔細はこれより聞いて得させる、併し往來にては
 見苦しいゆゑ、何れへなりと這入る方宜しからん、さき浅猿しい姿の妾
 より、お情けない貴郎のお姿、全体如何遊ばしたのでござります
 新十「イヤ、仔細を知らねば無理もない、實は斯々譯はこれ……
 さき、エ、それでは貴郎は岩國へ……新十、参つて仔細は残らず聞い
 た、併し大井川にて残念や敵兄弟に出會ひながら遂に川止めの爲め
 に見失うたことである、さき、それでは宛も角もこの神崎屋喜左衛門と

云ふ者方へお出でを願ひます」と是にて新十郎と伴れ立つて参り
 ましたきみ親方様、常々貴下にお話し申した源助様と云ふのは
 この方でござります喜左何ッ、お前さんは立派な武家の娘御であり
 ながら、探ねる頁人は乞食でござるか、これは物貰ひ、野臥りでは
 ありませんか新十亭主、不思議は有理、様子を知らねば無理もない
 ありせんか新十亭主、不思議は有理、様子を知らねば無理もない
 我れは水戸家の藩士にて田宮新十郎、高と申す者であるが、それす
 らこれなる君女は知らぬのである、實はこれなる君女の父親は我れ
 に取つては武術の師と仰ぐべき人、仔細あつて他手に掛られ、依つて
 道中、新く乞食非人と姿を變じ、敵を附け狙ふ者である」と事情を語
 り、當宿にて衣類萬端取調へ、新十郎は姿を改めることとなりまし
 た、そこでお君は新十郎に對ひ、馬籠の驛にて母親病氣の一條より
 悪漢の爲めに誘拐され、この神崎屋と云へる方へ飯盛女郎に賣られ
 し所、夫婦の情けに依つて曲者等は役目の方へ引渡し、相州小田原へ
 送つて牢屋へ入れられることとなり、妾を助けて今日まで厚くお世
 話下されましたゆゑ切て宿引の真似でもして往來へ出て居れば、若

や敵の者に出會ふことのあるもせんと、朝な夕なに明神様へ心を籠
 め、お願ひ申した効あつて、貴郎様にお出會ひ申し、こんな嬉しい
 ことはござりませんと、歎きの中に悦びの色を呈しました新十、それ
 は、又此方に出會ひし上は必ず心配することはない」とこの話しを
 聞いて亭主も初めて二人の身の上を知りましたが、新十郎は喜左衛
 門に對ひ、新十時に亭主、我れ些と思ふ仔細もあれば兎も角も今晩は
 當家に泊り、明日に相成れば然るべく工夫を致すことである」と所
 新十郎は岩國を出立の節、氏神に誓ひしこともあればとて今日まで
 は疊の上では衣食せず又泊りも致しませんでした、斯くお君に出
 會ひましたから、是にて始めての夜は疊の上にて臥すこととなり
 ました、初て翌日亭主喜左衛門を呼びまして新十氣の毒ながら其方
 これなる手紙を持つて、江戸小石川の水戸のお館まで何とこの君女
 を送り届けては呉れまいか、と昨夜認め置きました一通の書面を
 出して頼みました、すると亭主は快く承引きまして喜左へエ、

呉れて居るゆゑ、これより直ちに同道して彼れの許へ参り、和佐の心中を聞いて見ることにしやうではないか、彼れは若年とは云へどなかく、心あるべき者、實に此方も感じ居ることである新十、それでは兄上、御同道申しませう、そこで市ヶ谷の屋敷より星野と同道にて赤阪紀尾井阪の紀州家の屋敷へ出掛けて参りました、早速和佐方を訪れましますと大八「ヤアこれは御兩兄には能くこそ御尋來、何卒お上り下され、併し田宮の兄上には何時お歸りになりました新十、漸く昨夜歸りました、今日星野兄の許を訪れし所、貴下の御心配一方ならざる趣き、取敢ずお禮を申さんと、斯く同道にて罷り出でたることござる大八「マア何卒此方へお通り下され、いろくお話し申上げたきこともござりますから」と、そこで兩人は一室へ通りますると、大八郎は家來に吩咐けて二三の下物を取寄せ酒肴の用意に及びます、勘左和佐、それは止めて下され大八「イエマア茶の代りでござりますから何卒召喚つて下されるやう……」勘左何卒和佐、それは止して下され大八「イヤ、兄上の仰せではござるが、恙なく久々にて

戻られたる田宮の兄の旅の疲勞を休めると思召して、一口お喫り下され勘左、それは氣の毒ぢやのウ大八「何う致しまして……」是にて三人は四方八方の話しに時を移し、不思議の縁にて三人が兄弟になりたる物語り、語りつ聞きつ致して居りましたが、慌たしく家來の八助紙門外に手を支へ八助「ヘエ、旦那様へ申上げます大八「オ、何事ぢや八助、只今右内様がお歸りになりまして、お差支へなければお目に掛りたいこのことござります大八「オ、それは丁度好い處ぢや、此方へ通して呉れ、そこで八助は起ち行きました、跡に和佐は二人に對ひ大八兩兄に申上げます、只今家來より取次ぎましたは、手前の縁者でござりまして、父方の縁者紀州岩出の者でござります勘左「ムウ、大八、常今當地へ呼び寄せて手前の方で些と用向に使うて居る者でござります、何卒お言葉をお掛け下さるやう……」勘左「左様かそれは、……」と言つて居りますうち次室の處へ手を突きまして右内則遠殿、御免下され大八「オ、山田、サア此方へ、苦しうない」すると星野、田宮の兩名は「サア遠慮に及ばずメッとお道入り下さ

れ、我々参つて御厄介になつて居る處でござる。右内、それでは御免下され、手前は當家、和佐大八郎殿の縁者、山田右内と申す者、些と仔細あつて、江戸表へ罷り越し、和佐殿の仰せに依つて、斯る身しき姿に變じ、日々市中を駆け廻つて居ります。勘左、オ、左様でござるか。と眺めて見れば、普化僧姿、傍には天蓋、尺八などがございます。右内は大八郎に對ひまして、右内、則遠殿、今日は少し秘密のお話しを申上げんと存じて立歸つたることござるが……大八、左様か、實はこの度の一條は、この方々にお報せ申さん爲めの計らひなれば、決して心配には及ばぬ、何う云ふことか、此處にて語るが可い。右内、然れば、でござります、手前、未練ながら、笛の長をば命せられ、日々修行仕る。そのうちに、我が配下となつて修行に出づる者のうち、清風、清月、と云へる二人の者、これあり、尤も清風と云ふは兄にして、清月と云ふは弟なるが、何うして見ても、身体を我々に見せません、何さ、怪しき曲者と存せしゆゑ、昨日修行をして一月寺へ立歸り、それより俱に湯に参り、彼等の身体を驚と見届けし所、弟、清月は高股の邊に深

き槍傷あり、兄の清風と云へるは額に月形の疵あり、これと思へば、豫て其許の調へありし、新平殿の言葉に依つて察するに、清風の額の傷は、田宮氏が中間となつて、岩國に居られし砌り、鏢の柄にて打たれしと云ふ疵痕ならん、又清月の高股の傷は、新平が思ひ定めて突いたる所の槍傷ならん、と存せしゆゑ、手前、幼きころ、親人に伴られ、安藝の宮島へ参詣いたし、それより、周防岩國へ参つて、錦帯橋を見物いたし、暫く彼の地に滞在いたせしことあつて、岩國の勝手は概略心得て居りますから、他事ながら、岩國のこのを尋ね見るに、如何にも彼奴は詳しく、これを答へ、愈々倉橋兄弟に相違ないと思ひ止り、人相恰好寸分違はず、右に就て御注進まで立歸りまして、勘左、何と田宮……を聞いて驚いたのは、星野勘左衛門でございます。勘左、何と田宮……新十、ハッ……勘左、貴殿は和佐の志を何と思はる、我れは當年四十六歳なれど、これだけの考へは、若かなんだことである、行を前にして言を後にすると云ふ、實に和佐の發明には驚き入つたことである、新十、イヤ、早や兄の言はるゝ通り、新十郎、とても只敬服の他はござりませ

せん、則遠殿、親切の計らひ譬うるに物なく悉う存じます大八「イヤ
 御兩兄、お賞めに預かつて面目次第もござらぬ、實は新平が言葉に
 依つて敵二名は虚無僧と變じ居ることを承知いたしたゆゑ、不圖者へ
 ましたはこれなる右内、器用に尺八は至つて名人、殊に武術も
 拙からず、この者なれば敵を探るに偏強の者と存じ、手紙を以て國
 許より呼び寄せ、一月寺へ彼れを入れて探らせたる處、只今の話し
 では何うやら敵の所在を突止めたる様子、併し田宮兄にても参られ
 て確と突止めぬことに於ては、世には能く似た人もあるもの、若し
 間違ひなぞあつては後々の面倒……新十何さま左様、然らば明日此
 方は目黒の阪下へ参り壽屋と云ふ茶店に待ち合せ、修行戻りの普化
 僧共に、片端より報捨を出し、天蓋の下より面を覗き改めて見ん、
 その時の合圖は、新様く然か、新うく致したらば如何でござ
 らう」と宇内に語りますと宇内、何さま至極の御妙計、左様なれば
 明日手前が参るとき、新様く新様の合圖を仕らう、その時我等の
 後に尺八を吹いて居る者を驚とお調べあれ、素より兩名とも尺八

は随分上手でござります新十「イヤ承知仕つた、然らば左様仕らう、
 我れ岩國に在りし頃、彼奴間があれば尺八を吹いて居りました、然
 らば明日は何分其許然るべきやうお計らひ下さいたい」と宇内に呉
 れ、くも頼み込みました、そこで宇内は「委細承知いたしました」
 と皆々に暇を告げ一月寺へ立歸りました、此方は新十郎、夕方に至
 つて星野諸共大八郎に別れを告げ屋敷を立ち出でましたが、途中に
 て別れ、星野は市ヶ谷、田宮は小石川とそれ、我が屋敷へ立歸り
 ました、初て翌日は新十郎、水戸公に願ひ御召服を拜領なし、これ
 を身に纏うて密かに目黒阪下なる壽と云ふ茶店へ参り、店頭の床机
 に腰打掛け、未刻頃はひより普化僧の修行をして立歸る所を待合し
 て居りました、そのうち追々尺八を吹きながら立歸りまするを、
 片端より報捨を遣つて居りましたが、聽て申刻とも思ひし頃、三人
 連で戻つて参つた普化僧、素より集會時でございませうから、大抵同
 時に皆戻つて参りまする、この時新十郎は豫て山田と謀合してござ
 いまするから、これにも捨報を出すこととございませう、然るに山

田は笛長でございませうから、自分か布施を貰ひますと、左の手
 で受取り袂子へ納れべき布施を、左の手で受取つて右の袂へ納れま
 した、そこへ後方に居りましたる清風、清月は、相手が武家ゆゑ華
 山殿、左様な都合なことを致されは、咎めを受けらるも圓り難う
 ござるから、それは甚だ宜しからぬことと、ハツと氣にするその
 折しも、新十郎は豫て申合せあることゆゑ、これに相違ない存じ
 ましたから、笛長には目も掛けず、後方の二人に、目を着け、天
 蓋のうちななる顔を眺め、早くも羽織の紐を解いて後方へ投げ遣りま
 相違ございませぬから、早くも羽織の紐を解いて後方へ投げ遣りま
 すると、下には禪の用意をなし、十分の身拵へでございませぬ新十
 ヤア珍しや倉橋兄弟、我れを知らずや先年岩國に於て、國次家に住
 み込みし下僕源助とは假の名、誠は水府の藩士、田宮新十郎、高な
 り、師匠の敵こそ動かくな」と大音聲に呼ばりました、驚いたのは兩
 人で、段右、ヤア道理こそあれ切ては隣りの源助は、水戸の家來であつ
 たるか、此は敵はヒと顔見合してギョツと致しましたが、段右如何に

華山殿、新様な不將なることを申す者、これありませうと聲を掛け
 ば、華山の右内、「ヤア人を殺して立退きし曲者、一月寺へ身を潜め、
 普化僧の宗門を讀す汝等兩名、最早敵はぬ所であるから覺悟を致せ」
 言ふより早く、華山も同意でありしか、こりや敵はぬと逃げんと致すを
 た、扱ては華山も同意でありしか、こりや敵はぬと逃げんと致すを
 早くも扱ては華山も同意でありしか、こりや敵はぬと逃げんと致すを
 今、敵はす段右衛門、その場へ控と組み敷かれた、新十郎の早業に、
 の体を見て、素敵はヒとや思ひけん、身を轉じて逃げんとす、向
 むの方には大手を擴げ、此處まで出張つて、南無三敵はヒと又此方
 を着したる一人の武士、「身法未練の倉橋段藏とやら、義に依つて汝を
 召捕らんが爲め、此處まで出張つて、南無三敵はヒと又此方
 るぞ」と大音聲に呼ばりませうれば、南無三敵はヒと又此方
 げんとすれば、同じくこれでも拜領服、大手を擴げて突立ちながら逃
 「曲者其處動くな、義に依つて田宮氏に加勢を致す紀州の藩士和佐大
 八郎、これに在り」と言ひ合さねど、これへ出張り、萬一のこのある

時は、取返さざるやう加勢せんと此處まで出張つて呉れたのは、な
 か、實意なものでございませう、今は段藏進退窮迫、此方の飯を
 望んで尙ほも逃げ延びんとする處へ、奇体な坊主が禰禰の上を
 掛け、手には一ツの鐵棒を携へ、「我れを知らずや倉橋段藏、常陸の
 國は笠間の住人、大刀坊とは我がことなり、汝逃げんとすればこの
 鐵棒にて打殺して呉れん」と大なる鐵棒を輕るぐと振り上げまし
 た、これを見て段藏は驚いたなり、再び飯を下つて參る處を、早く
 も新十郎は段右衛門を縛り置き、飛び込んで段藏を引捕へ、難なく
 その處へ拾ち伏せて、これ亦高手小手に縛り上げました、この時右
 の坊主は鐵棒を携へ、徐々飯を下つて參りまして坊主「ヤア出来し
 なされた若旦那……新十、オ、其方は新平か、其方の小力あることは
 豫て此方承知いたし居るが、その様な鐵棒を輕るぐと自由な振り
 廻すまでの大力のあることば知らなんだ新平、イヤ、この鐵棒は私の
 夜業細工、鍛冶屋の世話にもならぬ鐵棒……新十してそれは何ぢや
 新平、桐の木に錆色を附けて鐵棒に見せたのでございませうから子供で

も擔げます新十、イヤ、早即の頓智驚き入つた」と新十郎は笑ひ出
 しました、然れば此奴等兩名を小石川の屋敷へ引き行かん
 星野、和佐には一禮述べて別れを告げ、二人の細附きは新平に引か
 せ、徐々この處を引上げてました、頓て星野、和佐もそれぐ己が屋
 敷へ立歸りましてございませうが、茲に一月寺に於てはこの事を聞
 きまして大いに驚き、縦令三家の勢ひなればとて、新く佛門に入つ
 て武士の隠れ家の宗門ともあるべき普化僧に、狼りに繩を打つて伴
 れ歸るとあつては、此方に於ても捨て置けぬと、集會なし、普化僧
 を、管主の長海、一同の者を少時と押し止り、既にして、我れ聊か
 れば、新く大勢にて水戸の館へ罷り越しては宜しからぬ、兎や角も
 我れは管主なれば、此方參つて程よく談判ひ、兩人の者を伴れ歸る
 べしとあつて、これより長海は水戸のお館へ出掛けて參りました、
 尤も身には輪袈裟を掛けまして、徐々と小石川へ遣つて參り、オッ
 と富飯御門を這入つてお目附所へ届け、玄關へ掛つて案内を乞ひ

するど、水戸のお館に於ては扱ては目黒から彼是れ申して参つたら
 しいと、直ぐに山邊主水殿は出迎へまして、先づ真海を使者の室へ
 通して面會の上、主水して何用あつて参られた、手前は當家の臣山邊
 主水と云へる者でござる、この時真海は泰然として此方に向ひ真海
 何故参つたとお尋ねあるやうなことでござるから手前は申し上げぬ、
 疾くに御承知あるべき筈、是非とも何卒中納言殿にお目通りを願ひ
 たい」とありませう、それはならぬと云ふ譯には参りませう、普化僧
 の管長のことでございますから、有繫の山邊殿もそのまゝ引取りま
 して、この趣きを公儀の附家老中山備前守殿へ話しを致しますると
 備前守殿は「然らば此方が會うて見やう」と使者の間へお出ましに
 なつて真海に對はれ備前我れは當家の老職の一人、中山備前である
 が、定めて其許の参られしは、清風清月のことであるから真海、清風清
 月のことであるかと仰せられるやうなことであるから何事も申上げ
 ぬ、是非とも中納言殿にお目通りを願ひたい」とありませう、その
 柄は何事も申しませせん、何故なればこの真海は立派な武士の末路で

ございますから、總て大名方の内情は明るうございます、大名と
 云ふものはその當人は何事も御承知なくとも、老職のうちには才智
 量の優れし者あつて、多くは其等の者が何事も計らうて居るので
 ございますから、我れも今談判をして居るうちに、家老のうちで答
 辨をされて了ふと、此方で一言も云ふことは出来ませんから、そこ
 で是非とも水戸公へ面會を乞うたのでございます、何うも是非が
 ございませんに依つて、水戸の重役方は真海を待たせて置いて、御前
 に於てそれく評定と云ふことに相成り申した、すると朝比奈彌太
 郎の申しまするには「手前は幸ひにお側筆頭を勤めて居りまして、
 殿中一刀御免のこととござりまするゆゑ、若し御對面の上、萬一御
 前のお敗け遊ばすやうなこともある時は、拙者發狂となつて真海を打
 斬つて了ひませう、依つてこれは兎に角お目通りをお許し相成る方
 宜しうござりませう、依つて朝比奈の組下にて参つて居る者十八は
 かりは「それはお頭がお手をお下しになるまでには及びません、我
 らが先に發狂となつて斬り捨て了ひませう」とありませう、是に

於て「然らば兎も角も其海を通さうと云ふことに一決いたしました
 すると光園卿は莞爾として笑ひに相成り「何様中山、山邊の申す
 如く、目黒の管主は一癖あるべき者ならんが、然りとて何程のこと
 やあらん、余が會うて一言の下に説き伏せて得させる」と恭しく中
 納言のお袋束をお着けになり、お座を設けてお待になりす、
 て管主其海は案内に件れてお奥へ通りました、これから光園卿と
 面會いたし愈々問答に及ぶと云ふ一段……。

第十二回

この時水戸の御前光園卿は、其海にお對ひ遊ばして光園目黒の管主
 其海とは其方か「其海は恭しく面を擡げ其海ハ、ツ、如何にも手前
 が目黒一月寺の管主其海にござりまする光園ハ、ウ、左様であるか
 ……」言ひつゝ其海の面を御覽遊ばしますると、額口に刀疵が一
 ケ所ございまする光園其方は額に疵があるが、それは何う致したの
 か「このお尋ねに其海も、正敷疵のことは捨て置いて清風清月の

ことを先へとも言へませんから其海若年の頃はひ過ちまして、阿蘇
 街道に於て同僚の爲めに受けましたる刀痕にござりまする」すると
 光園公「阿蘇街道とあるとからは、其方や肥後の者ぢやのウ其海ハ
 、ツ……光園細川藩か其海仰せにござりまする光園何程知行を貰う
 て居つた者である其海未熟ながら世にありませる頃は五百石を頂戴
 任りまして、細野又一郎と申しました光園ハ、ウ、然らば武士一人
 前の縁を貰うて居つたる者であれば、武士の情けと云ふものは心得
 て居るであらうのウ」五百石貰うて居つて武士の情けを知らぬと云
 ふやうなことは云へませんから其海ハ、ツ、その儀は聊か辨へて居
 りませることでござりまする光園ハ、それにて光園安堵致した、
 其方が武士の情けを心得てさへ居れば、大きに光園も満足である、
 其方今日當館へ参りしは、畢竟汝の配下たる清風清月のことに就て
 参つたのであらう其海仰せの通りにござりまする光園汝が配下たる清
 風清月を當館へ伴れ参られて、殘念に思ひ、助けて遣らうと思ふも畢
 竟其方の情けであらう、又此方の家來新十郎が、二人の者を生捕つ

て當館へ伴れ歸りしは、聊か己れが武術を傳へられたる師匠國次惣
 左衛門なる者彼等の爲めに討たれ、且つその妻は返り撃となり、途
 方に暮れたる娘と子供、並びに中間の三人に助太刀の儀を頼まれ、
 殊に國次の娘さみなる者は、惣左衛門存生中より妻に迎ふるの約束
 もあり、旁々の縁を以て新十郎一臂の力を添へて仇を報はせて遣ら
 んどするも情けなり、然ればその情けが重いか、但しは其方が配下
 なる清風清月の命乞ひに來たる情けが重いか、篤と思案を致して見
 よ、明君の計らひは臨機應變を以てなさるとは云へど、一言にして
 答辨ならず、只良海は赤面の他ございません、光圀右の道理を考へて
 彼是れ申す普化僧共へは、其方より然るべく説諭いたせ、と言葉短
 く仰せられましたから、今は良海も如何ともすべき術なく、恐れ入
 つて水戸お館を退るより他致方はございません、武士の情けは知つ
 て居るであらうと、初めに念を押されたのでございませぬから、今
 更彼是れ言ひ様もなく、又普化僧の今日の行ひは斯様く、のもの、
 宗門は斯く、の由緒あるべきものと云ふやうなことを言ひ出すこ

とも出来ませず、この上は立歸つてこの事をば一同の者に告げんと
 決心いたしまして、今やお暇を告げて御前を退らうと致しましたる
 時、光圀卿はお呼び止りになりまして、光圀良海待て、良海ハッ……
 光圀、目黒一月寺には、御親筆と云ふものがこれある趣き、果して左
 様であるか、良海如何にも日光大権現神君よりの御親筆これあり候ふ
 光圀、然らば一應拜見いたしたければ、大儀ながら水戸館へ持参なし
 て見せて呉れることはなるまいか、良海ハ、ッ……「斯くお言葉が下つ
 て見れば正敷見せぬと云ふことも申せせん、若し見せぬと云へば
 何う云ふことをされるやも圖り難く、誠に出る杭を打たれたと心得
 ました、が「委細承知いたしました」とお答へ致して引取りました、
 然るに一月寺の方では今に管主が戻つて参られ、返事に依ては水戸
 の館へ踏込まんもの、手に管主が戻つて参られ、返事に依ては水戸
 へ惜々として良海は引取つて参りましたから、○管主、如何でござ
 りました、良海、然ればなり、イヤ早や明君の仰せられること、云ふも
 のは、言葉短くして道理正しく、我れ一言も答うることも能はず、

念ながら…… ○「お敗け遊はしたのでござりまするか 真海、イヤ、問答は致さぬ……ア、真山殿、真山、ハッ…… 真海、其許一寸、これまでお出で下され」 真山と云へるを一室に招き、真海如何に真山、御身は越前の國福井の浪人にて、本名鈴木市郎次と申されたる仁、我が死後は御身を以てこの管主となすべき存心なれば、何卒其許我が首を介錯なし、その首級を以て水戸館へ参り、篤と申譯いたし呉れらるゝやう水戸公の仰せには、當一月寺にこれある紳君の親筆をば持参して参れど、このことなるが、中納言殿の御覽に入る時は、必ずお取上げになるに相違ない、然ある時は今後常陸の水戸領へは、一人も虚無僧は這入ることのならぬやうになるは必定ゆゑ、そこは其許に於て然るべきやうお計らひ下されたい」と尙ほ細々と遺言を致し、氣の毒や、真海こと本名細野又一郎は、ものゝ見事に切腹いたして相果てました、そこで真山の鈴木市郎次は、是非なくその首を介錯いたし、首桶に納れて水戸のお館へ持つて出で、事を分けて御親筆のお調べの儀は御免蒙りたしと願ひ出でました、けれどもなか／＼水戸殿に

は御承知はございませぬ「然らば偽言を以て一月寺の普化僧共は世を送り居るものか、甚だ不埒であらう」とのお言葉、真山「なか／＼、以ちまして、決して左様な譯ではござりませぬ、光圀果して實際親筆のあるものなれば何故見せぬ、親筆を見ざるうちは縦令何うあらうともこの光圀は許しは致さぬ」との仰せでございまして、致方がございませぬから再び親筆を持つて水戸のお館へ出ることになりました、光圀卿は受取りお検めに相成りまして、如何にもこれは神君の親筆に相違ない、依てこれなる親筆は永く當水戸館に預かり置、左様心得よ、真山「ハッ、恐れながら然ありまして時の老中お係り方よりお調べに相成りました時、大いに迷惑いたしますから、何卒御用捨の程を願ひ奉ります、光圀、イヤ、その儀は決して心配するには及ばぬ、若し時の老中より親筆調べのある時は、これを以て申開きを致せよ」と水戸のお館へ預かつたと云ふお墨附を下し置かれ、そのまゝ到頭親筆は水戸のお館へ預かりと云ふことになりました、何故これを光圀卿がお取上げなすつたかど申しますと、この親筆

の
御血縁御連技と云へば、遠慮なしに踏込み、その主人に對して面會を
乞ひ、腹浪八人の分際として、彼是れと問答がましきことを言ひ入れ
ては甚だ宜しからざることをゆゑ、この親筆さへ取上げ置かば、今後
大名に對つて斯る無禮なることは豈も言ひ出すことは出来まいと云
ふ思召しで、どこで光園卿がお預かりになりなつたのでございませ
る、依つて水戸領へは虚無僧が修行に這入りなつても、この譯を以て天蓋
を被つて修行をすることは出来ぬやうになりなつた、この譯を以て天蓋
へお預かりになつて居りなすから、普化僧は水戸公のお許しを蒙
つて修行をして居るやうな姿になりなつた、言はゞ威勢を先向へ奪
はれて了うたのでございませぬ、殊に天下の剛將軍のことに
ましたが、水戸殿は才智器量の優れし方、殊に天下の剛將軍のことに
ゆゑ、何とも彼是れ言ひやうはございませぬ、俗に云ふ泣寝入と云
ふことになりなした、切ても此園卿は新十郎をお呼び出しになりま
して、段々仇討の儀を仰せ聞けられ、當屋敷のうちに出しになりま

せ
るは最易けれど、それにては本人共は満足いたすまい、依つて此
方より公儀へ願ひ出だし、道灌山に於て仇を報はせることに致さん
との仰せ、誠に新十郎も有難くお禮を申上げて長屋へ引取りました
水戸殿より早速將軍家へ願ひ出し、當水戸家に於て二とあるまじ
き不埒なることを致せし者、これあるに依つて、以後何處にても斯る不
埒なる者の出でざるやう、懲戒の爲め重き仕置に行ひたく、就ては
公儀御地面のうち道灌山を一日拜借いたし、云々と云ふ趣きを老
中に就て願ひ出しましたから、そこで老中より將軍家の上聞に達し
ますると、然るべきやう取計らへよとの仰せ、依つて水戸殿の上聞に達し
容れることになりませした、その目を仰せ付けられませした、尤も内々星野
の兩家老に當日は檢使の役目を仰せ付けられませした、尤も内々星野
和佐にも報せませしたから、その日は兩人共に道灌山へ出張いたし
した、扱て道灌山に於ては竹細よりは人柵とか申しませすから、徒士
足輕に命じ、六十名と云ふもの腕の出来る者ばかりに六尺棒を持つ
て周圍を取巻かせ、君惣之助、新平の三人には仇討の要束を着け

させ、新十郎は後見として附添ひ、道灌山へ對けて罷り越しました。段右衛門、段藏の兩人には繩附にて引出しました。聽て刻限來りまへ、太鼓で進み鐘で退くと、數萬の見物聞き傳へ、追々道灌山へ駆け付けて見物せんと致し、何家の御威勢とて足輕共、「コリヤ、町人共、近寄つて怪我があつてはならぬ、今日は公儀御地面に於て罪人を仕置に行ふことであるから、其方共見物せんとあれば、退いて方へ退り何うなることか」と見詰めて居ります。程なく勘左衛門、大八郎の兩人は、水戸御家老の方々へ御挨拶を申上げ、尙は新十郎に面會なし、油断なきやうと言葉を掛けました。そこで床机を借用して左右に立別れ、腰なる扇面を出して膝に突き出し、徐に様子を見て居ります。そのうち段右衛門、段藏を目前に引き出し、兩家老よりの仰せ渡しには、「其方義周防岩國に於て、病氣に臥し居る國次惣

左衛門を、鼻法にも撃つて立退き、身の置所これなきゆゑ、當江戸表へ罷り越し、目黒一月寺にて普化僧の群に入り、諸國修行に出づるその道中、信州馬籠峠に於て、惣左衛門妻松枝なる者を返撃となし、利さへ、その忤怒之助を谷間に蹴落し、種々の不埒不届に付き、今日この處に於て右國次惣左衛門の娘さみ及び忤怒之助、下僕新平三名の願ひに依つて仇討を差許す、鼻法の所爲これなきやう尋常に勝負に及ぶべし、又た新十郎は豫て國次の門人なれば加勢の儀を仰せ付けたり、左様承知いたせ、兩人ハッ……是非に及ばぬと兩人は觀念いたしました。石見汝等所持の大小刀これなければ、此方より佩刀は兩名に恵んで遣はすから、これを持つて尋常に勝負いたせ」と頓て佩刀を二人の前へガラリお投げ出しに相成りました。そんならと申して、及換の佩刀を持たすと云ふやうな鼻怯なことは致されせん、依つて兩名は心靜かに各自に禪願卷の用意をなし、十分身支度の上、巴ひことを得ませんから、御一同に挨拶をして立上りまして、ドンド太鼓の音に伴れて場所へ進みます。するとその處へ式に依

て水と云ふものを持つて出ます、双方水を飲んで一足退り、段右衛門には君女惣之助、段藏には新平が立敵ふこととなり、親の敵主人の仇と云ふので銘々名乗りを掛けて勝負に及ぶことになり、然るに君女なり惣之助は稽古と云つた所が、一方は女一方は小兒、三年五年と稽古したではございませす、キンの儘かのうちに太刀の執りやうを覺れた位のこと、圓ひのお話しも申上げたことはございませす、が、なかく、及を合して呼る息吸く息と云ふやうな譯ではございません、凡も段右衛門は一人前に武術優れしもの、此方は全然何にも出来ぬもの、只常々寛八郎の申しまするには、若し敵に出會うた時には、斬らうとは思ふな突けどのこととございませす、か、突きの一手より知りません、依つてその危険なることは言ふまでもなく、動も致せば敵の爲めに斬り込まれさうでございませす、所が數萬の見物は関の扉を掲げて「立派な武家が澤山居ながら、レ娘に傷が附く、ソレ、子供が斬られさうだ」とワイ／＼言ひ離しますから、妙なもので段右衛門も少しその氣に怯れが出て参りました

たものど見ぬ、思ふやうには斬り込みません、新平は一生懸命、出来ぬながらも段藏を相手に、必死となつて闘うて居ります、命を投つてもと云ふ誠に大丈夫な決心で掛つて居ります、段藏も思ふやうに斬付けることは出来ません、所が段藏も一生懸命のことゆゑ、大喝一聲諸共に、斬り込む太刀先受け損じ、新平は額口に少々斬り付けられました見物、ヤア！不調さうだ、あの赤坊主が斬られたと見物、一同は聲を立てました、新十郎は双方の勝敗に目を着け、手には鯨骨の扇を携へ、控へて居りましたが、自分が飛び込んで加勢をして遣れば造作はないのでございませすけれども、仇討は敵の身体に一刀にても傷を附けざるうちは新十郎は手出しをすること出来ません、何うも武家の作法と云ふものは厳しいもので、何れも涙人ものだと云うて何うして殺しても可いと云ふやうなものではございません、さうで、齒櫛くは思ひませすけれども、サツと目を着けて見て居ります、この時和佐大八郎は、右の手が小刀の柄元へ参つたかと思ひます、この時和佐大八郎は、右の手が小刀の柄元へ参つたかと思ひます、

ると、看るく、うち段蔵の眼と鼻の間へ小柄が立ちましたから、
 アツと云つて反り返る處を新平は、拳も貫れど胸先から背まで一刀
 突き貫し、此方は星野勘左衛門、これ亦小柄を執つてヤツと
 言ふ聲諸共、段右衛門の左の眼へ打ち込みました、急所の痛手に陰
 眼く、遠巡をする處を、此處をと思つて娘のお君、父の敵と言
 ひさま思ひ切つて脾臓の處を、突きました、同じく惣之助も入身にな
 つて高股を望んでグサと一刀突き立てましたから、これ亦仰向けに
 打倒れました、この時和佐、星野の兩名は新平に對ひ「ヤ、新平、
 絶息を刺せ」と聲を掛けます、段蔵の胸元に手を掛けて、甚か咽喉元
 の處を刺し、と言ひながら、段蔵の胸元に手を掛けて、甚か咽喉元
 んで、絶息を刺さうと致しまし、此方は田宮新十郎、お君惣之助が飛び込
 勿れ」と扇を持つて近寄つて参り、倒れたる段右衛門の胸元を押へ
 新十郎如何に倉橋段右衛門、身はなことを致すな、この場に臨んで汝
 如何なることを致すとも最早や免れ得ざることを、最期に臨んで婦人

や子供に傷を付けて何とする、思か極まる奴である、これ程の傷に
 て絶命すべき理由はない、今新十郎が其方を立たして遣るから左様
 思へ、言ひながら急所へ對けてグイッとして軍扇の尖を當がひ、ム、ッ
 と押へた武術の呼吸、頭上より爪尖まで、手に持つ太刀を以て新十
 郎に斬つて掛りました、心を得たりと身を外し、利腕の踵の處を、ヤ
 ッと言ひささ甚しく打てば、ガリと得物を打落し、無念の切齒を
 キリ、と噛み、飛び掛らんとする處を、新十郎は燃髪取つて仇へ
 控と抜け出し、新十郎卒の君女、惣之助、絶息を刺せ、心得ましたと兩
 人は飛び込み、父上の敵思ひ知れ、扇を揚げて「天晴れ見事」とお賞
 した、時に興津、鈴木、萬の両家老、扇を揚げて「天晴れ見事」とお賞
 めになりました、數萬の見物も一時は鳴りも鎮まりませなんだ位
 でございませう、星野、和佐の兩人は仇討の様子を引取ることに
 水府老職方に挨拶なし、皆々別れを告げてこの場を引取ることに
 なりました、折から遙かの方より兩名の武家、慌たしく馬に打乗

田宮新十郎

の場にて致すべきにあらす、後日承る場所もこれあること、此處は公儀の御地面内、本日は公儀へお届け申し、時の老中の許可を得て借用申したる仕置の場所、此處にて彼是れ申すは無益でござる。と權もハ、の挨拶に、兩名の使者は立歸り申した、是に於て水戸御家老は三人を一先づ町宿へ對けて下け置かれ、新十郎同道の上、小石川の館へ歸りになりまして、又兩家老よりは殘らず見届けたる申上げ、厚くお禮を述べました、又兩家老よりは殘らず見届けたる様子を申上げましたから、光圀卿も御満足の体でござりました、所が吉川監物殿でございます、如何に三家の威勢なればとて不埒なる一言、我等も元は毛利の三家、故大岡のお寵に愛でなく、殿下に用ゐられたる家柄なり、餘りと云へば水戸の藩士、無禮なる挨拶、この儀は之の儘捨て置き難しと早速小石川の屋敷へ對けて、國次の娘並に惣之助等を申受けたいとの趣きを掛合ひました、光圀卿は如何な應じなされせん、吉川には毛利長門守と云ふ本家もあり、長州殿へ此

田宮新十郎

つて駆け付け来ります、これ別人ならず吉川監物の家臣、松本集人、茨木小平太の兩人でございまして、今日仇討の様子を聞き、この處へ對けて駆け付けて参つたのでございします、何卒國次惣左衛門伴惣之助、且つ川監物の家臣にござります、吉川家へ伴れ歸りたく、これに依つて水戸殿へ君女、下僕新平なる者、吉川家へ伴れ歸りたく、これに依つて水戸殿へ宜しく仰せ下し置かれ、この處にて我々にお引渡しを願ひます、主命に依つて迎ひに参りました」と申し述べました、すると水戸の御家老與津能登殿、「其は吉川監物經倫殿の仰せでござるか、単人如何にも左様でござります、能登然らば立歸つて左様仰せられよ、今日この報はせるに就ては、容易ならざる所の中納言家のお骨折、依つてこの儘にて其許等に引渡すことは相成り申さぬから、順序を願んで事を計らばれよ、元來この場へ對して迎ひの者を遣はすなと、は不都合にはこれあらすやと、水戸の藩士與津能登、鈴木石見の兩名が申し、たゞ仰せ下され、單人とは又何故でござりまするか、能登無益の論はこ

方より掛合ふべき仔細ありと、是に於て水戸殿より長州侯へこの趣
 きをお談しになりました、左様な粗暴の所爲を致されしぞ、今日國次の
 り、其許の等の爲りに左様な粗暴の所爲を致されしぞ、今日國次の
 娘さみ惣之助等の仇を報ふに至りしは、畢竟水戸殿のお計らひに依
 ていある、水戸公の厚きお情けなくんば何ぞ彼等如き者で仇の報は
 れやう理由はない、それはお情けなくんば何ぞ彼等如き者で仇の報は
 等が敵討出立の際、相當なる助太刀の者を添へて出立させなれば、彼
 ぞ、我れ水戸殿よりお掛合を受け誠に面目なきことである、以後斯
 様な不始末これなきやう屹度戒め置くことである、以ての外御立
 腹なり水戸殿へ言辭の爲り、遂に吉川殿は御息へ家督を譲り、山
 家なり水戸殿へ言辭の爲り、遂に吉川殿は御息へ家督を譲り、山
 と改められました、又新十郎は豫て惣左衛門の言葉もあり、父寛八
 郎も承知の上なれば、勘左衛門は豫て惣左衛門の言葉もあり、父寛八
 次郎の娘さみ女と結婚の式を擧げて父の家督を相續と云ふことになり
 ました、又新十郎の妹のやす女は、これ亦星野勘左衛門が媒介になり

水府田宮新十郎 大尾

なり、和佐大八郎の妻と致し、是に目出度く兩家の納りが若きまし
 た、且つ惣之助は中納言殿の思召しに依りて、常陸の國は茨木郡宍戸
 のうちにて二百石を下し置かれ、萬事新十郎を後見と致されまして
 國次の家名を立てさせることになりました、是に於て忠僕新平は用
 人となり一生を國次家で終りましたと云ふ、既に明治の初年まで水
 戸のお家には惣身惣刀流と云ふものゝ存つて居りましたのは、この
 惣之助の後胤でございます、エー演し續けましたる譽れの矢數譽
 れの仇討、三家三勇士功績のお物語り、田宮新十郎の講談も、是を
 以ちまして大團圓と相成りました、長々御消聴を煩はしましたる段
 は平にお詫びを申上げます、へエ御退屈様……。

明治三十三年五月二十日印刷
同 年五月廿五日發行

發行
之
證

口演者 石川 一口

發行者 岡本 宇野

大阪市南區櫻町四丁目三番邸

印刷者 井下 幸三郎

大阪市南區西清水町二百二十三番邸

發賣所 岡本 偉業館

大阪市東區北久太郎町心齋橋東入

同 中澤 書店

京都市竹屋町通高倉

終



大坂岡本の實名

普行

天明七年九月七日
和佐大八郎

天明七年九月七日
和佐大八郎